むことを得ざるところなり。云ふまでもなく、華嚴聖典は、佛陀最初の說法にして、夙に印度に流布せるも、其の敎理の餘りに深遠高妙なりしが爲め、終には衰微しが、支那に到るに及んで、一世の大德杜順禪師に依つて唱道せられたり、卽ち杜順禪師は五敎止觀を著はして、華嚴聖典の佛陀一代敎の根本法輪なるを鼓吹し、其の高弟たる第二祖智儼師、亦之を承けて盛に華嚴の哲理を唱へ、稍〻組織に形成せられ、更に第三祖賢首法藏師の如き大哲出でゝ、始めて之を大成せり。賢首の博識宏才は、彼の台家に於ける智者大師と難兄難弟にして、而かも賢首は華嚴の敎理を唯心的緣起論として說明を加へ、更に法界緣起を唱道したり。而して華嚴聖典より發せる敎理は、何れにも應用して可ならもるものなけれども、彼は之が應用に就ては、主として法相哲學、卽ち唯識哲學の系統に據りて、華嚴の敎理を發揚闡明したり。彼れ賢首は唯識的論理法を用ひて華嚴の玄理を演繹せるは、蓋し佛敎各宗各派の根柢は、哲學的知識の上に立たざるは無し、而して法相學は、哲學的眞理觀としては、最も深遠なるものなり、之に依て賢首の應用したる唯識論と、最も關係ある十重唯識に就て、聊か說明を試みんとす。

前に云へる如く、最初杜順禪師が、華嚴の敎理を道破するに當り、先づ五敎止觀を著はして、佛陀一代の敎理を五敎に分類して說明せるが、杜順の傳流を繼承せる賢首も、亦、小、始、終、頓、圓の五敎を以て、其の唯識的緣起論を詮明せり、こは賢首の五敎章、及び探玄記を繙かば明らかなる事實にして、更に賢首の流れを汲める淸凉の澄觀も、五種の唯心說を道破せり、乃ち

第一　小乘諸敎　　假立一心
第二　大乘始敎　　異熟賴耶一心
第三　大乘終敎　　如來藏義性一心
第四　大乘頓敎　　泯絕無寄一心
第五　大乘圓敎　　總該萬有一心

此くの如く彼も亦た一代敎を五階級に分類して說明し、以て佛敎硏究の標準を啓示したり。而して更に賢首法藏に從へば、其の著探玄記中に十重唯識を唱說して、華嚴聖典に於ける唯心的深玄なる哲理を道破したり。今其の十重唯識を說明するに先ちて、玆に唯識の語原に就て略述するところあらんとす、卽ち古哲の說に

從へば、識の性、識の相、皆心を離れず、心所心王共に識を以て主と爲すに依り、心に歸し、相を泯して、總て唯識といふ。唯は境の有を遮す、有を執する者は、其の眞を喪ひ、識は心空を簡ぶ、空に滯る者は、其の實に乖くが故に、斯の空有に晦き時は、長く二邊に溺る。彼の有空を悟れば、高く中道に履ると。而して彼れ賢首法藏が、探玄記中に開示せる十重唯識の所說と、五敎の分類とは次の如し。

- 第一　相見俱存唯識
- 第二　攝相歸見唯識　　始敎
- 第三　攝數歸王唯識
- 第四　攝末歸本唯識
- 第五　攝相歸性唯識　　終敎、頓敎
- 第六　轉眞成事唯識
- 第七　理事俱融唯識
- 第八　融事相入唯識
- 第九　全事相卽唯識　　圓敎
- 第十　帝網無盡唯識

而して世親論師の所說に依れば、二十唯識或は三十唯識あり、彼れに從へば唯とは、獨なり別境なきを遮るの謂にして、又識とは能了內心ありと詮すと云へり。蓋し如上の十重唯識は、舊華嚴聖典に於ける七處八會(新聖典七處九會)中の第六會の十地品に詳かなるところにして、十二緣起竝に唯心の諸說を道破せるものなり。是れ皆唯心緣起及び十重無盡法界緣起の源を成せり、卽ち賢首法藏が個中の文意を釋して十重唯識を立て、巧に敎義の寬狹を示し、敎理の淺深を顯はせり、是に於て諸敎の心性的方法分齊は炳然と明かに、圓敎の識相的建立は窮極せり。更に此に十重唯識中の相を說明すれば、第一に相見俱存の唯識と謂ふは、吾人が通常一般の常識に在りては、客觀的に實我實法の執着を破却して、直觀的に內在的深遠なる諸法唯識の眞理を欲するが爲なり、卽ち之を換言すれば、吾人々類が心外に於ける虛妄轉倒し、萬有に執着して連續的に實我實法のある事なきを破說して、內在的唯識の道理を說明して、自覺せしめんと促せるものなり。而して第二の攝相歸性の唯識は、第一に於ける客觀的心外の妄法を打破し、卽ち主觀的なる識內の諸法を存することをいへるものにして、此の攝相歸見の唯識は、吾人の心

中に於て、心境と稱して心に歸せしむるを以てするの唯識なり。而して吾人の心中にあらはるゝ境は、心を離れてあるものには非ずして、悉皆吾人の心内に存すとせり。進みて第三の攝數歸王の唯識は、八識及び心王心所の差別あることを說明せるものにして、此の唯識門は吾人の轉々相生する心の攝するところのものたり。而してこれを心王に歸せしむるは、八識の詮はるゝところ、心所を攝して自らの心王に歸せしむるの唯識なり。第四攝末歸本の唯識は、例へば鏡の影像に於ける多くの影像は、一の鏡面に現はれたるものなるが故に、之を攝する時は唯一の鏡體に歸すべきが如し、通常說くところに依れば、各識自體ありといへども、此の唯識に至りては前七識は別に自體あること無く、皆第八識中より轉變せし能功なりとし、而も其の第八識は眞妄和合の者なりとす、惟ふに十種の唯識の中、初め相見俱存の唯識より此の攝末歸本の唯識に至るまでは、現象上の所立にして、唯順を追ふて進み、序に隨て攝したるに過ぎず、而して其の極點に到達したるもの、卽ち此の唯識なり。第五に攝相歸性の唯識とは、前四唯識より更に進みたるものにして、現象上の立論を放棄して、方に萬有の本元たる眞實心に就て論ずるところあらんとするに在り、而して之を要するに此の唯識門は、眞如常住、生なく滅なくして、萬有に遍通せる無差別平等の理體なりとするが故に、萬有は眞如を離れて一塵の有するなく、又一滴の有ることなく、悉皆眞如海中の波瀾ならざるは無きを以て、萬有唯一心と立論するにあり。第六は轉眞成事の唯識にして、こは前來の唯識に於ては現象に屬する心より、進みて實體卽ち理心に就て、萬法唯心の理を立つる趣を云へるが、未だ其の實體より萬法の顯現する所以を知る可からず、是に於て眞如の實體より一切萬法の顯現する所以を說き、而も萬法唯一心の大旨を成するに在り。第七事理俱融の唯識は、本體と現象の互に相異るが如く見ゆるも、仔細に之を尋究すれば、寸毫も乖角すること無く、兩々相鎔融して無量ならざるはなく、而かも其の鎔融無碍なる一切の萬法は、皆平等普遍の眞如心を以て體とするが故に、唯心無物と論成するものなり、第八融事相入の唯識は、妙用を以て本體を收むるに、更に別體無きが如く、妙用も亦一切の萬法に遍くして、互に相入すべければなり、斯く相入無碍の義を論じて以て、唯心の旨を立つるを以て本唯識門の主意となす。第九全事相卽の唯識は、宇宙の千界萬象は、本體を以て妙用を收むれば、更に別用なきが故に、互に相卽せざる

はなし、而して其の相卽する事物は皆眞如實相の上より緣起せしものに外ならざるを以て、萬法唯心の義を論成せざるべからざるなり。第十に帝網無碍の唯識とは、既に宇宙の千界萬象が、或は相入し、又相卽して無碍圓融のものなることを云へるが、其の相卽は各一重にして、未だ重々無盡の相は知るべからず、依て相卽入相交々累現して無碍圓融なりとするなり。

一八、吾國體に對する美的觀念

吾輩は既に實在を現實及び理想の二方面より觀る事を說けり、更にまた一面物理的、化學的、機械的、解剖的、觀察と、一面信仰的、詩歌的、理想的、美的觀察とにより、論ずる所あらんとす。確か歸化人の學者なりしが、曾て『日本人は皆詩人なり』と云ひしやう覺ゆ。吾が日本の國たる氣候溫和、風物淸純、山水明媚なり、されば此の間に生息せるもの、いかで美的觀念に缺如すべけんや。而してこゝに特に注意すべきは從來外國より渡來せる、文學にせよ、宗敎にせよ、技藝にせよ、吾邦に入ると同時に、いづれも皆、日本化し美化したること是れなり。斯くの如くにして、日本の歷史に於ては、皇室と國民との關係及び、國民相互の關係に、實に一種言ふべからざる、美的觀念を養成し來れり。君に忠を盡す、國の爲めに身命を舍つ、祖先を崇拜す、父母に孝を盡す、兄弟姉妹相敬愛す、夫婦相助く、長老を尊敬す、幼孤を憐れむといふが如き、其の情の厚うして、親密なるは、是れ日本特有の美風たり。山間僻地の半ば傾き倒れたる茅屋に棲み、三度の食に不足を訴ふる細民にして、猶ほ家の何處かに、楠公父子が、櫻井驛に於ける永別の樣、又は兒島高德が、春夜行宮に忍び入り、櫻樹を白くして、兩行の詩を題せる景、又は淸少納言が、九重の宮殿に、玉簾を褰げて、御苑の雪を觀る姿態、或は紫式部が、石山寺の秋月に對して、源語を草する風趣、又は秋夜配所に、恩賜の御衣を捧げて、餘香に涕泣する菅公、或は春風旆を吹き、落花馬蹄に香しき、勿來關の八幡太郎、或は足柄山頭に、月下笙を調ぶる新羅三郎、富士の高嶺が、雲を突いて白く露はれたるが如き繪畫、若しくば月を詠ぜるの歌俳、花を謠へるの詩賦などを張り付け、朝夕これを仰ぎ見て、樂しめるを見れば、以て如何ばかり日本人が、皇室に對

し奉りて盡すことを以て、善美なりとせるか、將た又た、如何に日本人が、天地萬物に對して、その美を喜ぶ性質を具有するかを、想見するに餘りあり。

されば、日本の倫理は、外國の倫理の個人的、又は皮相的なるに比して、遙かに秀出し、その特色は卽ち忠君愛國、祖先崇拜、父母に孝を盡すこと、家長權の威嚴を認むること、夫婦は相和して亂れざること、子弟を愛護して懇到を極むること等の、美風良俗となれり。日本の倫理道德は、他國の倫理道德の如く、人間行爲の表面を律する、假設的のものに非ずして、天地自然の眞理に契合するもの、語を換へて云はゞ、源を宇宙の實在より發せる眞理たり。而して此の觀念は、日本人が處世の根本大義にして、又た外國人の容易に了解し能はざる所とす。卽ち外國人にも忠孝の行爲あらんかなれども、彼れの忠孝は、死物的にして、眞の活動的精神なくして、畢竟便宜的なり。吾が國人の忠孝は、活物的、神聖的、精神的、內心的なり。歐米諸國に最も勢力を占むる宗敎は、耶蘇敎にして、彼土の人々の多くは、此の耶蘇敎を奉じて行動するか、然らざれば、個人主義、又は社會主義等を奉ずるものにして、素より比較に値せざる所とす。

抑も、吾が國民の忠孝の心は、皇室と聯關し、國體と結合し、吾が國民が皇室を奉戴し、國體を護持する精神より、發生したるものにして。上皇室の上に於ける仁愛と上下、國民が心中に具有する至誠と、上下相感應したる所に發する物にして、眞實なり、至靈なり。故に吾が國民は、歸化人を除くの外、悉く皇室の一神系より分派せるものなれば、此の忠孝や決して一個人の私有に非らず。浸潤の久しさ、別に威力を以て喚起するを要せず、機に應じ時に會して、自動自發するなり。是れを以て吾が國民の忠孝は活物なり。宜なる哉、吾が國古來忠孝を以て、人倫の大本とし、上下和睦、四民協同の要道とし、國體皇運隆盛の要素とせることや。他國の中には、君臣の關係は、唯便宜上、約束上、利益上、君主を奉戴するもの多ければ、臣下より反逆を企て、君位を奪ふものありとも、民の幸福利益に大したる影響を及ぼさゞれば、更らに新君を奉ずるに至るも、不平不滿なかるべしと雖も、日本國民の忠は、本源的にして、全く天性なり。又一個人が父母に對するの孝も、同樣にしてこの忠孝の心持を、他の百事百件に推し及ぼして、日本國民の道德倫理は成立せしなり。

是より以下少しく、日本の歷史によりて、吾が國體と國民との美的觀念を述べん

と欲すれども、日本歴史を通じて、古來一貫して流れたるものは、この忠孝を美とせる觀念、及びそれより發したる諸德にして、枚擧すれば數限りもなし、又年を經る事の長き、或は其の間に、この美的觀念を所有せざるにあらざれども、何等かの理由の爲めに、日本國民としては、病的なる者も、絶對に無しとはいひ得ざれども、其は僅々の例外にして、論ずるに足らざるものとす。日本國民の全體に澎湃充溢せる觀念が、從來如何に他より侵入し來れる思想をも、忽ちに日本化せしめ、日本倫理の上に資せしめしか宗教に資せしめしか、美術に資せしめしか。而してその倫理たると、宗教たると、藝術たると、そのいづれたるを問はず、日本に渡來してよりは、いつしか日本的に美化され、日本國民固有の思潮中に包含され來たりしことは、説明を要せざるところなり。但し現今侵入しきたれる歐米の思潮を、日本國民が如何に消化し、その美點を取り、その醜なる部分を排除すべきかに付きては、また別に論ずる所あらんとす。

應仁天皇の時、王仁なるもの來りて、論語及び其の他の書を獻じたるが、これに伴ひ、所謂儒教は吾國に入り來れり。是れ實に儒教的倫理道德の名稱を輸入したるものにして、その以前の吾が邦には、倫理的實行はありたれども、倫理的名稱の如きは、此の時の輸入にして、この道德名稱が、如何に吾が國民の道德思想の發達に影響を來したるかは、實に想像に餘りあり。既に名稱あれば、其の概念を授與する上に便を加へしや明かなり。

次には佛教の渡來あり、佛教は未來の幸福希求、人類の安全希求の如きを、其主なる目的としたれども、それに伴へる思想、例へば殺生を禁ずるといふが如きをも輸入したり、殺生を禁ずる如きは、慈悲を勸むるの途たり。儒教の渡來を以て吾が思想界は豐富となれり、繁雜を極むるに至れりとは雖も、日本人はこれに動搖せられて、自國を輕蔑することなきにより、佛教家などをして、所謂本地垂跡説を唱道せしめ、源を印度に發せし佛教も、遂に日本化して、日本在來の習慣に契合するに至れり斯くの如くして儒教及佛教は、日本化し了れり。日本人が古來尚武的氣性に富むと同時に、また慈愛の念に厚きは、その皇室に對し奉りて、忠を盡さんとするには、勢ひ皇室に敵對するものを征服せざるべからず。この尚武心は他の國の如く、自己の恣なる慾望に發出するなく、正義公道の上に立つものにして、實に國民性の一美

的觀念たるなり。吾人が祖先の神には、須佐之男命あり、手力雄命あり、經津主命あり、大國主命あり、皆武神に在す。而してその大國主神が、自ら野蠻强剛なるものを征服し、國家を開かれながらも、祖宗たる神裔に國を讓りたまへるが如き、勇猛と、明識と平和とを併有したまへり、これ日本民族の好標本とも見るべきに非ずや。又その後、神武天皇が、非常なる困苦と艱難とを嘗めさせられ、敵の爲めに血族臣下を亡ぼされながらも、祖宗の遺志を繼ぎ、祖宗の遺業を成就せんとて、毫も屈し給はざりし如き、又た其の軍に從へる吾人の祖先が、自己の利益を顧みず、誠意誠心、皇業の爲めにのみ盡さんとしたる如き、否、君の爲めに倒るゝを美事とし、

海行かば、水漬く屍、山行かば、草むす屍、大君の、へにこそ死なめ、のどには、死なじ

と歌ひたる如き、眞に死を見ること、歸するが如くなりしなり。實に吾人の祖先は父のみの、父の命、母そばの、母の命、疎かに、情つくして念ふらん、その子なれやも、ますらをや、空しくあるべき、梓弓、すゑふりおこし、なぐ矢もち、千尋射わたし、劍刀、腰にとりはき、足曳の、八つ峰踏越え、さしまくる、心さやらず、後の世の、語りつくべき名をし立つべし

ますらをは名をし立つべし後の世に
聞きつぐ人も語りつぐがね

これを見ても、吾人の祖先が、忠孝の念盛んにして、忠孝の爲めに死することを、いかに美事としたるかを想見すべし。既に忠孝の爲めに死することを苦とせざるのみか、本懷の事とせり、本懷のことゝするとは、厭はずして喜ぶことなり。普通の人が忌み避けんとする、又一大事とする死を以てして、猶忠君愛國の爲めには本懷とす、他の細事推して知るべきなり。若し是等の祖先にして、個人的私利私慾のみより打算し、機械的に、物質的にのみ考へたらんには、斯かる精神的詩歌的、美的の國家に對する觀念を抱かざりしや明かなり。

猶、啻に武人にのみ忠君愛國的觀念に厚かりしといはんや、

君かすむ宿の梢をゆく〳〵もかくるゝまてにかへりみしはや

去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣猶在此、捧持毎日拜餘香。

と菅公をして詠ぜしめたり。その他あぐれば、その數幾十、又は幾百にも上るべけれども、以上擧げたる詩歌に表はれたる精神は、國民一般の精神と見なば、足ることなれば、多くを擧げず。嗚呼日本國民は、宇宙萬有の微妙なる美的活動を達觀し、皇位の絶對、忠孝の至道、悉く是れ美的實在的眞理とす。彼の宇宙の一切を機械的に立論し、人生の事、乾燥無味なる物塊とするものゝ笑ふべきを知る。

一九、人生に於ける信仰の價値

人類に智識あれば、また感情あり、意志あり、感情の動く所、意志の定まらざる所に、左右し東西して止まざるは、普通人の生活なり。然れども、誰れとて是の如く、日を消しゆきて、而も生存の價値ありや、將た又、何故に此の世に生れ來れるか、死後いづくに行くものか、などとの疑問を起し、疑惑に囚れざること無きものは非ざる可し。

斯る時に、宗教家なるものありて、大聲叫んで曰く、その解決を與ふ可きものは吾等なり、吾等は既にその解決を得て、安心の地位に立てり、汝等迷へる衆生も、來つて吾等の說に聽け、而して吾等の心境と一致するに至らば、疑惑は悉く氷解するのみか、非常の愉快と安心とを得らるべし。然れども、そは言語を以て說明し盡すべき性質のものに非ず、自ら悟入してこそ、其の妙味は解せらるべけれ、例へばこゝに一椀の美味ありとして、如何に辭を盡し言を費して、その含める味について說明を試むるとも、聽者はたゞ想像を複雜にするのみにして、到底その味を知ることを得ざらんのみと、洵に此の宗教家の比喩や當れりと云ふ可し。此の如く、宗教上の信仰を得たるものゝ心情は、然らざるものゝ窺ふことを許さゞるものとす。

宗教的信仰を喚び起さしむる大基礎は、天地人生の秘奧を穿てる、宇宙の心なる絶對の神意を直觀せるもの、卽ち眞如實相の姿を、そのまゝに會得せるもの、天啓無二の宗教的眞理是れなり。既にかくの如くなれば、この眞理たるや、區々たる目前の利害論內に拘束せらるべきものには非ずして、廣大無際、其の力や測る可からずその力や窮め得べからず。既に人にして、至高無上なるこの宗教的眞理に參し、これを補捉したらんには、その確信の力、またそれを補捉し能はざる人以上なること

は、論を俟たざるなり。而してこの確信を保持し、その信念に由つて行動して、また顧慮するなきものを稱して信仰ある人と云ふなり。

既に心に絶大なる宗教的確信あり、豈に區々たる外物の爲めに、その感情を動かし、その意志を左右にして、不安、不定、憂患、痛苦の境に彷徨するの理あらんや。事物に接する毎に、是非善惡を判別すること、迅速に而も明快に、既往に溯りて懊惱することなく、將來を憂患して處置を忘るゝことなく、身を天地自然の力に任せて悠々迫らず、その事業は宇宙の心たる神意と合し、人生に有利有益なることなれば、俯仰天地に恥ぢず、以て生を樂しみ、直ちに四圍を『天國』と觀じ、釋迦若しくば、基督の如き古聖人が、世人の苦痛を視、又は不幸とする所に居して、虛心平氣、寧ろこれを喜びし如き、心的狀態を解するに至る。

此れ毫も不可思議のものに非ず、然かくあるべきものなり。然れども、不幸にして世人の多くは、これを解せず、相鬪ぎ相鬪ひ區々の利を爭ひ、身を滅して、而も恐れざるが如き、洵に憫れむべきものたらずんば非ず。

嗚呼、宗教的眞理こそ、人をして人生至高無上の涅槃の境地に誘致するものなり、所謂『天國』に誘致するものなり。されば世の人類、凡てにして、この宗教的眞理を會得し、悟入したらんには、この地球上のあらゆる人類は、直ちに皆神たり佛陀たり。既に地球上の人類は、眞理の彼岸に到達し、一般に神たり佛陀たりし上は、戰鬪は全く跡を絶ち、人類一般の幸福や、蓋し測られざるものあらんに、惜いかな未だ人智の進歩低く、利欲の迷霧深く、五大洲を閉塞して、容易に散ずべくも非ず。各國民の多くは、猶ほ人道を後にして、卑劣なる慾望を逞しくせんとし、侵略的競爭兵力的競爭、詐術的競爭にのみ熱狂し、これが爲めには、同胞の生命を喪ひ、自己の產を失ふも、また辭せざる如きは、現下世界の趨勢に非ずや。

而して更に嘆ずべきは、各國民何れも目前の利害關係を先にし、物質的文明を謳歌したるの結果、宗教的眞理なるもの無しと斷じて、宗教を以て、人生に於ける一種の奢侈品か、或は非理なる迷想となすこと是れなり。而して斯かる說議をなすものにして、各國の下層に在る知識少しとせられたる人々によりて、論述せらるゝならば、そは不問に附し去るも、或は時に於て不可なからんも、今や世界各國の堂々たる學者、宗教家にして、宗教的眞理なるものについて、迷想をさしはさみ、或は輕卒に

斯かるべきものあるべき道理無し。宗教的眞理など云ふものゝありとするは、科學の進歩せざる時代の人民が、懷抱したる迷想の殘夢にして、笑ふべく排斥すべきものたりと立論し、主張するに至りては、又放任し置くこと能はず。その科學萬能主義者とも云ふべきもの、一にして止らずと雖も、その內、有力なる學者は、說をなして曰く、

宇宙に目的ありとする宗教家等の目的々宇宙觀といふ物は如何なるものかと云ふに、そは宇宙の本源には、一大目的といふものが一定し居りて、凡そ宇宙に起る一切の現象は、悉く此の一大目的に依て、定められて居るといふ趣旨にして、人間は萬物の靈長として造られ、萬物を治むる任務を與へられて居る。動物植物の如き有機體は、人間に治められ、人間のために生存する任務を與へられて居る。又土、石、鑛の如き無機體も、それ〴〵人間の便益の爲めに造られて居るのみならず、日月星晨の如き天體と雖も、是れ亦地球上人間の需要のために造られて居ると云ふが如き主張に歸する。

目的々宇宙觀論者の說によれば、唯一眞神なるものありて、これは全知全能の神にて宇宙も造り、人生も、其他の萬物をも造り、就中、人間に最大なる幸福を與へるといふ。然し公平に、人間世界の狀況を觀察すれば、神は人間に幸福を與ふるよりは、寧ろ不幸を與ふる方が多きは如何。世には何の罪なくして、而も生涯不幸不運に陷る者もあり、短命に終る者もあり。その反對に隨分惡事を働き、大罪を犯し乍ら、生涯幸福を受けて、安逸に暮らす者も少からず。その例を世界に擧ぐる時は甚だ多し、誠意誠心、唯一眞神を信仰して、唯管祈禱する者にも、不幸者澤山にして、之れに反して、一向唯一眞神を信ぜざるのみならず、反つてそれを誹謗する者の中にも、幸福者多きは、如何なる理由ぞ。

唯一眞神が全知全能、至仁至愛にして、又正善の源ならば、必ず先づ絕對圓滿なる知情意を具有すと見ざるべからず、然く見るには如何なる證據に依るかを聽かんことを欲す。

抑も知情意なるものは、有機體中にあつて、獨り高等動物就中、我々人間に於て、最も之れを具有するものにて、其の外のものが具有し居るに非ざれば、知情意なるものは、全く有機體が進化に於て、具有したるものなりといふことは、甚だ

明瞭にして、進化主義より研究すれば少しも疑ふべき餘地なきものなり。

然るに、未開半開時代の思想は、實に愚極まるものにして、唯一眞神にも、人間同樣に知情意あり、然もその絶對的圓滿なものと考へ居れり。かくの如きは進化主義によつて、その妄想たることを指定し得て、明かなるものなれども、妄想に陷ることの深き、容易に解悟する所なし。否、彼等は進化といふ道理をさへ辨ぜざるが故に、神には人間よりも更に大なる知情意ありと妄想し、人間的の神を造り出すものなり。然れば、神は造物主に非らずして、人間が造神主であるといふを以て適せりとなす。彼等は知情意具有の神は、全知全能にして、其の知能を用ひて、宇宙萬物を造れりと考へ、而して至仁至愛と、至正至善とを以て萬物殊に人間を支配するものと考へたり。これ卽ち迷信妄想の大根源にして、その迷信妄想たらずといふことを、立證すること能はざる所とす。宗教中に於ける、基督教も佛教も回々教も皆かゝる迷想妄信に坐するものであつて、如何に考ふるとも、宗教家や哲學者の所謂、宇宙の本體にありといふ、仁愛正善の至德と、自然界に於ける、慘刻殘忍なる生存競爭、自然淘汰とは、全く矛盾撞着して、少しも一致するところのなきに驚かざるを得ず。然るにそれにも拘らず、神は全知全能なりとか、又は神は眞と善との外にあらずなどゝ主張するに至つては、全く妄言といふの外無し。又慘刻殘忍なる生存競爭こそ、大いに人間界の進化を促進するものなることを知らずして、生存競爭に慘刻殘忍なるべからずと論ずるは、宗教家の立場なり、今日の如き進步世界にありては、務めて此の如き迷想の束縛より脫せざるべからず云々。

實に淺薄極まる議論と云ふ可し。かゝる論者の常として、先づ宇宙に目的ありと思ありとは、何を以て證し得るかとの議論なれども、そは區々たる人間行爲の裁判に於てこそ、證據呼はりも要あるべけれど、その證據なるもの必らずしも眞正なるものにして、その證據によりてのみ裁斷したる裁判なるものが、果して眞正にして、また疑ふ餘地無きものかといふに然らざるべし。況んや、大なる宇宙の本體の有無及び、宇宙に目的ありや、否や、知情意ありや、否やに關して必ずしも證據を云云するの要あらんや。然らば宇宙に知情意無しとは、何によつて決するのか、何の證據によりて無しと斷じ得るかと迫らば、彼等もまた窮せんのみ。彼等の科學的說

明にして、此の宇宙の森羅萬象に亘りて、一の漏らす所なく、明にして些の疑點無からしめて後に、宇宙に目的無し、あると思へるは妄斷の甚しきものなりと云はゞ、或は傾聽に價せんが、漫然、宇宙精神なるものなし、宇宙に目的なし、知情意なしと、輕卒に斷言を下して、自ら高しと心得るが如きは、好んで異を立つるものにして、却つてこれ迷信妄想たり。その果して、宇宙に目的ありとすれば、善をなすものは、善果を得べきに實際は然らずして、惡をなせるものに、善果を得るが如きは何ぞとて、駁擊を試みんとするが如きに遇つては、その小兒の議論に似たるに、思はず、噴飯せずんばあらず。善をなして不善を得たりといふが如き觀察は、そも〳〵幾時間を以て制限したる觀察か、又幾年を以て制限したる觀察か、將たまた、某は善をなしたりと云ふ、其の善は批評者の一二が、見て以て善となすものにして、宇宙本體の目的とする善に副ふものなりや、又その不善の果を得たりといふも、畢竟二三の人が見て以て不善の果とするものにして、その人に取つて不善なるやも、又宇宙本體が不善と認むるものなりや否やは、不問に附したる論議なるのみ。

吾人はよくその宇宙精神に參し得たる偉人の所說に、盲從せずして心服するのみ。そを盲從呼はりする學者にして、心服するものゝ迷信妄想は、常に破る可からずと嘆ずるが如く、眞に宗教的眞理を信仰する者よりすれば、物質論者の證據呼はりをする短見を愍み、其の迷妄を啓くの容易ならざるを嘆ぜずんばあらず。

又、神が造物主に非ずして、人間が造神主なりと云ふ說も、怪しき反駁說と云ふべし。かくの如き議論は、人類を藐視することの甚だしきものにして、自ら人類を以て無價値のものとするに歸す。吾人は人類にして、始めて宇宙精神の存在をも認め得るものとして、人類を以て他のものより進化したるものとなし、人類を愛し、人類の道に價値ありとする所以は、人類にしてよく宇宙精神と冥合一致し得べきものなるを信ずるが故なり。人類が造神主なりとて、人類を排斥するが如きは、自ら何を以て處らんとする學者ぞ。又論者が慘酷殘忍なる生存競爭こそ、人間界の進化を促進したれ云々と云ふ、そは事實ならん、然れども、そは却つて吾人の說に味方するものと云ふべし。慘酷殘忍なる行爲は、到底天地の容れざる所なるを自然に覺らしめて、人間界に改良を加へ、進化を促進したるものと云ふべし『今日の進步世界にあつては務めて此の如き迷想の束縛を脫すべし』とは、吾々の借用して、以て彼

等を警しむるに適當なる語なるのみ。

既に人類の一部に、この宗教的眞理を認め、これによりて、安心立命を得、その行爲にして、宇宙の化育に贊する所あるを認むるものは、自然とこれに向ふ。而してこの行爲の正しきものに名けて人道といふ、人道は假の名にして、その實は宇宙の本體の目的の一たるのみ。而して、この人道に依つて國を建て、此の人道によつて益々衆生を風化し、宇宙精神と一致して、赫々天日の如く輝くものを、吾が日本の列聖となす。その『天日嗣』又は『天皇』の如き言語文字は、その意義、畏れ乍ら宇宙精神の大なるに因られしものにやあらん『天』と云ひ『日』といふ、これ古に於ては、宇宙の本體としたる神、若しくば神に緣深き語にてありしことは疑ふべからず。畏れ乍ら我が國の列聖は、かゝる信仰によりて、世界の人類、禽獸等迄をも敎化したまはんとの御趣旨にして。吾等が祖先またよく列聖の御精神、御意志を奉體し、世界無二の國體を保持し來れるものにて、吾人は皇室に對する信仰を、いよ〳〵厚くして以て、國家の精神を貫徹せざるべからず。

信仰あるものと、信仰なきものとの强弱優劣、その行爲の功績の多少の如きは、そのたゞ常に外物の刺戟によりて、感情のまゝに意志を二三にし、左往右往定まる所なきものと、一定の信仰により、行爲動作に秩序あり標準あり、守る所あるものとの比較を見ても、猶ほ明瞭ならん。茲に信仰の價値を喋々することは、既に要なき迄に明瞭なり。日本國民が世界に冠絕する所以と、日本の國體が世界の賞讃驚嘆仰望に價しつゝある事實を否認せざる限りは、これ頗る有力なる立證たり。

日本の列聖は信仰により世界に立ち給ふ、その皇室を信仰するは、これ宇宙本體の精神を信仰すると選ぶ所なし。敢て云ふ、日本國民は、絕對無上なる至尊を信仰の對象として、惑ふこと勿れと。

二〇、皇位の絕對と現實及理想の兩方面

絕對的實在論は、之れを二方面より見ることを得、二方面とは何ぞ、曰く理想と現實是れなり。理想を擧げて現實を貶することの正しからざるが如く、現實に執し

て、理想を排斥することも亦た當れりと云ふ可からず。古來、此二方面の中、其の一方面の外に偏したる實在論は、到底完全なる學理と稱するを得ず、乃ち理想主義の論者は唯心論に傾き、現實主義の學者は唯物論に陷れば、是れ畢竟不完全たることを免がれず。

例へば唯物論者が、物質に對し、微を穿ち細に亙れる、其の研究の結果を報告し來るとも、哲學者、倫理學者、美學者の學說に大なる關係なきが如く、何事も科學者の研究のみに依りて、其の報告を悉く是とし、一切他を顧みざらんか、宇宙間の事、總て機械的に見られ、吾人々類の如きも他の動物と同一の如くに觀られ、人類に於ける倫理上、若しくは、歷史上に深き交涉なく、美學上及び宗敎上の信仰に關係淺きものとなり終らん。されば、人は到底此の物理的、化學的學問のみを以て、滿足すべくも非ず、換言すれば、物的以外に心的、又說明的以外に詩的のものを要求し、兩々相倚り相助け、相補ひ、相接し、以て進みゆくべきものとす。是を以て完全なる實在は、吾人の智情、意を滿足せしめ、この三者の平衡均準上に成れるものたらざる可からず。何となれば、現象を全然離れたる實在なるものゝ存立をば、絕對に許すべからざれば

なり。かるが故に現在を研究するには、現在の現實的方面の研究と、理想的方面の研究との二に分ちて、これを研究するを便とす。恰も實在なるものは、物なりと斷ずる唯物論者と、これに反し、實在なるものは、心なりと說く唯心論者との爭鬪の、古來二千有餘年間絕えず、而かも今猶ほその歸著する所なきが如きに見ても、世間あらゆる事相に對しては、物心二面、現實、理想の二途より研覈するを以て優れりとする所以なり。たゞ注意すべきは、實在は到底實在にして、實在そのものは、物心の二に區分すべきものにあらざること、猶ほ吾々の體全體を、皮又は骨或は血と云ふが如き、名稱を附して研究するも、血が直ちに體全體にあらず、骨が直ちに體全體にあらざることを忘るべからず。乃ち一個の人間に於ても、唯物論者は、肉體の組織なくんば、精神宿らず、心的現象は物的現象の所產なりと主張し。又一方唯心論者は、精神の所產こそ物質なれと主張するも、そのいづれにもせよ、精神的方面を閑却する事も出來ざれば、又物質的方面を疎外することも、不眞理なるは明白にして、この二者、相依りて以て、吾々をして一個の人として活動せしむるのみ。この理想と現實、心的と物的といふが如きは、畢竟物の表裏に於ける名稱の如きものたり。而し

て此表裏二面の名稱を有する一個の人間は、各々その希望と目的とに向つて行動しつゝあるなり。個人の結合したる國民にも、またその國民としての希望もあれば、將た又目的も理想もある可きなり。然り吾人日本帝國民には確然これあるを見よ。日本帝國の祖たる天祖は、取りもなほさず、絶對的實在にして、皇位の尊嚴神聖なるは、理想的の實在なり。而して此超絶的實在の大原故郷より、發生したる皇位を繼承したまへる現代の至尊は、卽ち現實的實在なり。この故に日本國民の希望とし、目的とし、理想とする所のものは、何ぞや。抑も大日本帝國は如何なる主義を以て今日に至れるか、又今後、立たんとするか。これを云ふには歴史を措くこと能はず。さり乍ら、こゝに述べんとする目的は、日本歴史を細敍せんとする點に存せざることを諒せよ。

天照大御神、其の皇子を、瑞穗國に降し給はんとするや、勅して曰く、

豐葦原の千秋の長五百秋の瑞穗の國は、我御子、正哉吾勝勝速日天忍穗耳の命の知らさん國なり。

と、而して此の忍穗耳命、更に皇子を擧げたまふに及んで、代つて葦原に降らしめたまふ、天照大神こゝに彼の三種の神器を賜ひ、

葦原の千五百秋の瑞穗國は、是れ吾が子孫の王たるべきの地なり、宜しく爾皇孫、就いて治むべし、行け、寶祚の隆なること、天壤と窮りなかるべし。

と、嗚呼、何ぞ其れ皇なるや、なんぞ其れ明瞭なるや。卽ち知る天皇は、神の意を體し此土に君臨し給ふものにして、天つ日繼とは、天意を繼ぐとの意に外ならず。已に天位を繼がせらるゝものなれば、吾々の先祖は、天皇を呼びまつりて『神ながら』と稱し奉り、天皇は天地に參し、天地の化育を助けたまふもの、吾人國民は絶對に天皇に對し奉りて、欽仰すべく、その大御心を體し奉りて、些の違反なく、夙夜に天皇化育の大精神の萬一に酬い奉らんことを欲すべきものたり、かくの如く、君臣の分、確然として今日に及べり。神武天皇の詔詞に、

『天業を恢弘し、天下に光宅し』

『六合を兼ねて以て都を開き八紘を掩ひて宇となす、亦宜からずや』

と、仰せられたるは、吾國上下の目的とするところにして、その深意は、明德を以て天下に君臨し、四方の人民をして恩澤に濕はんことを欲せしめんとしたまふものな

り。

今上天皇曰く、

天壤無窮の皇運を扶翼すべし。是の如きは獨り朕が忠良の臣民たるのみならず、又た以て爾祖先の遺風を顯彰するに足らん。

と、日本國民と、日本の皇室との關係は、實に麗はしく、且つ美しきものゝ絶頂なり。乃ち日本國を統御せらるゝ天皇の大御心は、神の聖意に出でたる時間的及び空間的に、生物の安寧を進めんと志ざさるゝものにして、殊に吾が國民を愛撫したまふこと、慈母の赤子に於けるが如く、至らざるなく、國民も亦た至尊を欽仰すること、天の如くにして、敬重また至らざる無く、列聖の鴻德は國民全體の意志と合し、融然混和してその盡くる所を知らず。

されば、日本國民にして、如何に西洋の惡思潮に感染するとも、また如何に物質的方面に重きを置く、理想排斥主義の現實論者たりと雖も、わが皇位の尊嚴を疑ふ者は一人もあらざるべしと思はるれども、前にも述べたる如く、近來歐米諸國の風潮、又は事業を歡迎するに急にして、能くこれを咀嚼し翫味し、其の善惡是非を識別するの餘裕なき有樣なるを以て、幼稚なる頭腦を持つ者は、是等のものに、攪亂され、或は暴擧妄動を以て快とし、自ら一定の見地なきを耻ぢず。漫りに自己の奉ずる邪說に、理由を付し、以て國民の思想を動搖せしむるに至る。豈に寒心せざるべけんや。

世界いづれの國にも、一般人民を統御ずべき主權者あらざるなし。而して其統御すべきものは、國民の希望と相容れざらば、永續すべき性質のものにあらざるは論なし。吾が日本の建國以來三千年の久しき、上に在りて、國民を統御し給ひたる列聖と、國民と些の矛盾衝突なく、天皇の意志は卽ち日本國民の意志、天皇の發奮は、日本國民の發奮にして、語を換へて云はば、陛下の理想たりしなり。而して至尊は先きに述べたる如く天照大御神の意思を繼承せられつゝあるものにして、卽ち神の意志は理想なり、而して其の理想を實現し給ひしものは、則ち列聖の遺訓なり。

此の如く、畏くも吾が　至尊に於かせられては、列聖の理想を實現し給ふ現實的實在なりしなり。

然れども、國體を異にせる外國に在りては、其の主權者は萬世一系ならず、國民の

大部分は、國民主義よりも、寧ろ個人主義を重しとし、主宰者また、國民の幸福安寧を永く、企圖せんとするよりは、寧ろ自己の利慾を先にせんとするに傾き、その弊害は上に立てるものは、下を壓迫して至らざる所なく、下は上の壓迫に耐へずして相團結し、乃ち或は政府を轉覆せんとし、或ひはまた主宰者を暗殺して以て、その苦痛より脱せんとするの徒を生じ、忌はしき極端なる社會主義なるものゝ跋扈を見るに至る。彼等は曰く、主宰者何物ぞ、吾人と同じき一の肉塊のみ、彼れに理想あらば、我にも亦理想あり、彼れに人を壓迫するの權利あらば我にもまたこれあらざるべからず、彼れの目の物を見るが如く、我れにもまた物を觀るの目あり、彼に音を聞くの耳あらば、我にも亦同じく音を聞くの耳あり、寧ろ彼れに優るの機官を有し、彼れに優るの知能を有す、而して彼れの壓迫に耐へずんばあるべからずとするの理由あらんや。もしこれありとすれば、そは不正の社會組織、國家組織なるべし。既に不正不良の國家組織、社會組織ならば、寧ろこれを破壞し、善良にして且つ公平なる、組織たらしめざるべからず、これ吾人の義務なり、社會の幸福を計る方法たり。これが目的の爲めに倒るゝものは、よし、その效果を見ずして倒るゝとも、その功勞や、その國民に取りては沒すべからざるものなり、國民の恩人として、永世不朽なるべきものなりと。斯くの如き外國に於ける思想に觸れて、愚かにも、吾が國體の如何を辨ぜず、況んや現今吾が國體を他國が羨望する餘り、研究しつゝあるにさへ氣付かず、吾が國體を毀傷せんとする者の如きは、洵に沙汰の限りなり。吾萬世一系の天皇は、天祖の承志を繼承せられ、吾々國民的思想を發揚せられつゝある主腦にして、卽ち心的より云ふも、物的より云ふも皇位は、尊嚴神聖にして犯す可からず。されば吾人國民は、此國體を維持するのみかは、いよ〳〵その光輝を發揚し、禍を未然に防ぐべし、是れ目下の急務たり。

二一、人生最高の希望

私は常に專門的に一つの宗教を研究して居ります者でありますから、其の方面で多少ともあなた方の御參考にもならうと思ふことを成るべく申上げたい積

りであります、今日の演題は「時感」と云ふ卽ち時事に關係した事をお話する積りでありましたが、時局に關係した事は、私よりも諸君の方が、既に詳しいことでもあり、又私個人としては時局、卽ち戰爭などに對しては、既に自分の統理して居る雜誌、若くば新聞、其他に於て意見を發表して居るので、此所で繰返す必要はないのであります、それで時感と云ふ代りに「人生最高の希望」と云ふ事をお話したいと思ふのであります、諸君は既に上流の貴顯紳士方であり、富貴、名譽、若くば人生の快樂と云ふことに於ては、既に獲得してお居でになるが、私から申しますれば、それ以上人間と云ふ者は、精神的にもう少し崇高な、清くして尊いやうな、希望がなければならぬと云ふ事を、自分の立場からお話したいと思ふのであります。

其前に方りまして、私が少しく時事に關係した事に付き、諸君の御贊同を仰ぎたいのは今日哲學とか、宗敎とか云ふ方面に於きまして、昔の大哲學者とか、若くば今日の大文豪とか、又其國が昔から非常に學術に長じて居つて、其所に深い學問の淵源となつて居るやうな事があれば、其人や又は其學術を崇拜するよりして、其國までをも崇拜するやうな傾があるのであります、既に新聞紙上に於ても散見致しまする所であるが、或學者は獨逸の學術に依つて、我々は餘程の利益を得て居る、然るに我日本が獨逸と兵火相見ゆるに至つたが、これが長く續けば、日本の思想界が枯渇するであらうと、かう云ふやうな事を、立派な精神界に學術界に地位を占めて居る最高學府の敎育家が云ふのであります、其他にも我々が見聞する所に於て、矢張り斯う云ふやうな議論をする人が間々あるのであります。由來我日本が、彼れの長を採つて我が短を補ふと云ふ側から言へば、私は非常に悲しむべき事であらうと思ふのであります。そこで此人物と國と云ふものを併せ崇拜することは餘程考へねばならぬと思ふ、嘗て動物愛護會でありましたが、私も會員の一人で出席致しました所が、其出席者の一人に非常に京都の人を罵詈した者がある。其言に曰く、京都人は實に優柔不斷にして、男子と雖も女々しい、女の言葉のやうな言葉を使つて、精神からして惰弱で、到底京都人は爲す有るに足らぬ、昔から、人物が出て居らぬ、又將來も出ないと、斯う云ふやうな事を申しました、是はどうも餘りに過言ではないかと私は思ふのであります、成程京都の人が荒くれな男子でも、女のやうな言葉を使つて居りますが、併し京都にでも古來立派な人物が出て居る、之れは一々例

を擧げるに及ばぬ、近來に至りまして、乃ち維新の際には三條公の如き、岩倉右府の如き、其他にも人物が出て居ります、畏れ多いが　明治天皇も京都で御誕生になり、又代々の天皇も多く京都に於て御降誕になつた、又我々の側から申せば、彼の德川時代に町人の息子でありながら、槍を立てゝ京都を濶歩した伊藤仁齋の如き人物も出て居る、聞く所に依れば、大鹽平八郎の如きも、矢張り京都で小僧をして居つたと申します、尙ほ近江聖人と言はれた中江藤樹先生の如きも、京都で生れられたと云ふ樣な事で、學者や政事家の側から見てもさう云ふ風に人物が出て居る、他にも美術家、實業家も澤山出て居る、かやうな譯で、國と人物と云ふものは、別々に取扱はんければならぬと私は思ふのである、彼のソクラテスは我々が平生其書物を讀み、其人格を崇拜して居る人でありますが、アゼンスに生れた、今日彼所はどう云ふ有樣であるかと言へば、孤城落日の有樣である、又希臘は昔は文明國であつたのが、今日は見るに忍びぬやうな有樣であるが偉人は澤山に出た、又猶太の如きも今日の有樣である、けれども歐洲各國で宗教上の泰斗となつた基督の生れた所である。又印度はどうであるかと言へば、英領となり殆ど見る影もないが、釋迦の如き大宗教家が出で、其他世界の宗教又は哲學の淵源をなした婆羅門教の如きが出た、斯樣に世界の精神的學問は殆ど印度に源をなして居ると云ふやうな事實である。又支那はどうであるか、實に云ふに忍びざる狀態であるけれども、支那には孔子の如き大人物を出した、又孟子の如き、老子の如き、今日から見ても、世界共通の聖人賢者であると云ふやうな人が出たのでありますが、さう云ふやうな工合で、其國は如何に衰微しても、其人物は、萬古に光明を放つて居る。どうも人は其好む所に依つて偏するのでありまして、漢學者は支那を愛し、露國の學術宗教を好む人は露國を愛し、又獨逸學を好み、獨逸の文學哲學を研究する者は、人情として獨逸を崇拜するのは、免かれぬ所であります、彼の漢學の盛んな時分に、諸君は既に御承知でありませうが山崎闇齋と云ふ人の事でありますが、我が邦は當時漢學が盛んにして、文物典章皆支那から仰ぐと云ふ有樣であつた、彼の物徂徠の如き、孔孟の道を崇尊するより、孔子は天なりと云ひ、支那を中華と稱し、自から東夷の物茂卿と云つた、孔子が道不行乘桴浮于海と言はれた、其解釋には、昔の學者が孔子は卽ち支那では自分の道が行れぬから、東夷卽ち日本と云ふ夷國へ行きて吾道を行うと云はれたと、註釋を麗々

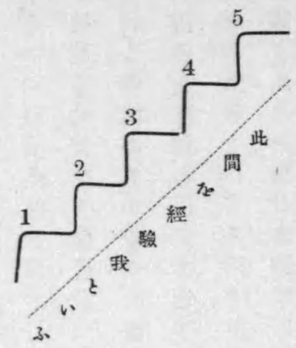
と加へた時代もある、此の時代に於て山崎闇齋が、或る日澤山列座せる弟子に向つて申すには、我々は孔孟の道を學び、其教を奉じて居る者であるが、今日例へば孔子が大將となり、孟子が副將となつて、多くの兵を率ゐて日本へ攻めて來たら、君方はどうして之を處置するかと、斯う云ふ一の奇問を發した、さうすると支那を崇拜し、孔子は天の如き聖人であり、又孟子は孔夫子に繼ぐ賢哲であると崇仰して、殆どこれに心醉して居る時代でありますから、多く竝居る弟子共が、一人も是に答へることが出來ない、其時闇齋先生の申さるゝには、どうもお前方は一體學問をどう云ふ風にして居るのか分らぬ、支那を崇拜し孔子の道を尊んで居つても、若し日本へ孔子が大將となり孟子が副將となつて攻めて來たならば、我々日本人は立派に鎧を被り、鉾を執つて彼等の軍を討平げて、孔子や孟子を生擒つてしまふ、是れ卽ち孔子の道である、と云ふ事を訓へられた、實に是は味ふべき點であらうと思ふ。今日の學者間には、矢張り山崎闇齋の見識なくして、弟子の如き見識の人が澤山あるやうに思ふ、而も堂々たる學界の先生方に斯う云ふやうな人がないではないか、否、現に今日あるのに驚くのであります。そこで、我々日本國民は學問をするにも政治を施すにも、實業をなすにも、何所までも日本人と云ふ事を腦裡に置いて戴きたい。嘗て公孫龍と云ふ支那の學者は、白馬は馬にして白きなり。白くして馬にあらざるなり、白い馬は馬にして色が白いのである、白くして馬ぢやないと云ひました、實に詭辯でありますが、面白い說である。我々は日本人にして、或は內閣總理大臣なり、文部大臣なり華族なりであるので、內閣總理大臣にして、又文部大臣にして、又華族にして、日本人ぢやない、乃ち實業家にして日本人ぢやない、日本人にして實業家である、之をどうかお忘れない樣にして戴きたい、斯かる見地に立つて居れば、彼の所謂學者の如き其精神までも學問の爲に奪はれるやうな事はなくなるのであります、是は時局に對し、私が精神界に於ける一班を、御參考までにお話した次第であります、是から本題に入つて申す積りであります。

私は殆んど二十年近く、釋尊が三千年の昔、自分の思ふた儘の大悟界を赤裸々に說かれた所の華嚴の敎理を研究して居ります、華嚴の敎理中には禪や、法華や、眞言など皆含まれて居る、そこでナカ〳〵一席や二席で出來ませぬから、其の中の大要をお話して、諸君の御參考に供したいと思ふのでありますが、先づ最初に我と人と

云ふことを一寸述べます、我々は人類である、人である、是れはもう言はないでも知れた話、然るにお互に人でありながら、私とか我とか云ふことを言ふ、我がとか、自我とか云ふことをやかましく言うて、たとへば人に對して、我は聽かぬ、我輩は承知は出來ぬと言ふ、それが人であつて、我と云ふのはどう云ふ意味である、果して人間は二樣に分れて居るが、餘程是れは面白い問題である、彼の「カント」などが人は人にして我にあらず、我は我にして人でないと、斯う云ふ風に二つに分けて居る乃ち我と云ふのは我にあらざる人に名けて、お互が勝手に付けた者である、人と云ふのは是はもう普通一般の名稱であつて、これは何所へでも通じて云ふところである、我と云ふのは、個人に喰付けられたものであると、斯う云ふやうになつて居りまするが。印度の古い學問なり、私等が研究して居る、華嚴の哲理と云ふものになると、我と人とは一つに說てゐる、そして人と云ふよりは我と云ふ方が、餘程範圍が廣いのであります、人はお互に人にして、諸君も私も人である、けれども、それは何故我と云ふかと言へば、人と云ふものは一般的のもので、極く有觸れた所の代名詞であるが、我と云ふことになると、絕對我卽ち大きく言へば、天地宇宙と一つの大我である、其の事を大きく言つたものになつて居る、我と云ふものは、決して二樣のものでない、寧ろ我と云ふものゝ中に、人と云ふものが含有されて居る、斯う云ふやうに立てゝ居る彼の「ショッペンハウエル」の如き、印度古代の哲學を研究し、彼れの厭世思想は、皆印度の哲學から來てゐる、西洋の哲學は大抵源を希臘に發してゐる、而して希臘の哲學が印度から源を發して居るのである、是等のことは近來學者の皆證明する所であります、其印度婆羅門の哲學に「勝論」と云ふのがありますが、其中に我とは知識である、我と云ふのを知識だと云ふ事を言ふ、お互にギャッと生れると乳を呑むとか泣くとか眠とか何かする、知識に依つて乳を求めるとか、餓じければ泣くとか云ふやうに、段々成長して學問をし、實業に從事する、或は文學に從事するとか云ふやうに、皆知識に依つて生活する、乃ち其知識が我である、我とは此肉體でなくして、知識なるものが我である、と云ふやうに立てゝ居る、それから印度の龍樹論師の說いた「中論」等に依ると、矢張是も知は卽ち我なりと、殆ど能く似たやうな事を言つて居る又婆羅門哲學の中に、是は私が雜誌や、著書にも書いた事がありまして、それを繰り返へすのです、その婆羅門哲學の中で、我と云ふ事を二樣に分つて居る、二樣とは卽ち

高等　梵天(大我)
劣等　梵天(小我)

斯う云ふやうに高等梵天と、劣等梵天と二樣に立てゝ、高等梵天と云ふのは、卽ち天地宇宙がそれである、大我と云ふ大なる一の理體である。而して劣等梵天と云ふのは、我々卽ち多數に分れた人類なり、又は他の動物を劣等梵天として居る、是れは實に理由の無い事であります、けれども元來婆羅門敎の方は、所謂佛敎で云ふ小乘敎の立方と酷似してゐて、誠に巧妙ではあるが、極めて狹いのである、元來釋迦佛陀が彼れが如き大天才を以て、印度古代の所謂哲學や宗敎を研究して、其上に成立せしめたのは佛敎で、其佛敎の粹を拔いたのは、華嚴の敎理でありますから、其敎理は深遠高妙である、此は當然の事で、今日世間一般のことでもさうで、一つ茲に物があれば、それよりか餘程勝れた物が後に出來るのは、當り前の事であります、それに由ると、高等とか、劣等とか立てるのは、旣にもう論理法に依つても間違つて居ると云ふのでありまして、此は私が度々論じたことであります。此の高等梵天と劣等梵天、卽ち大我と小我について、或る學者は、斯う云ふ樣に說明してゐる。



(大　我)卽ち、眞我、又は高等梵天

(小我)卽ち假我、又は劣等梵天

斯う云ふ樣に、茲に其の絕對の大我に沒同せんとする小我は、進修の徑路を努力して行くのである、乃ち一より二、二より三、三より四、四より五と階段を經て、我々劣等の者が、高等なる大我、卽ち宇宙の實在に向上して行くのであると云ふのであるが、私は此說には反對である、其理由は私は度々私の著はした書物にもあり、又哲學宗敎等に關する雜誌等にも出しましたが、今日の哲學者の說に依りまするとと、宇宙の眞理、卽ち實在は絕對無限の大我である、又は眞我とも云ひ。而して我々人類は小

我であつて小さい、諸君も亦小さい劣等なる人間の小我であるとする、さうして見ると、我々小我は修養に修養を加へ、段々に階段を經て行つて、詰り窮極に至つて大我に沒入する、と云ふやうな立て方、卽ち大我が宇宙の本體であれば、我々は、小さな物で本當の我ではない假我である、宇宙の實在とか神の本性とか云ふ大きな形而上の問題になると眞我と言つて、到底我々が文字や言葉で盡す譯に往かぬものである、卽ち我々が段々に修業が加はり、或は我々が人類たる道を盡くして、立派な働きによつて、此圖の如く、修養を加へて、立派に人たるの道を盡くして、さうして第二に行くと、その一が消えてしまふ、それから第二に行き、第三の位置に行き、立派になり、人に指摘せられぬやう、惡と云ふことは決して爲さない、人道に依つて立派な者になつて行くのである、かやうに修養を加へて、さうして三より四に行き、五に行つて遂に宇宙の實在、神と言ひませうか、何とも申されぬやうな、我々の意識を超越した最高最尊の大我と合するので、そこで立派な人間になり、後世にも傳はるやうになる、又何方よりも一點の間然する所ないものになる、斯う云うやうに立つるのであるが、如何せんこれは大に間違つて居る、なぜなれば、我々が努力をして善を行つて無限の絶對に入らうと努力するのはよろしいが、併かし若し其中で第二なり、第三の所に於て努力がゆるんで缺くる所があれば、直ぐに故へ戻るから四に達することは出來ぬ、到底これは大我と小我とは全然隔絶して居りますから、我々には宇宙の實在、卽ち大原と云ふものと沒交渉である、若し人間の上で果して善であるか、惡であるかと云ふことは、詰り一の研究すべき高尚な問題で、是は別問題であるが、兎に角假令是が一の眞理でなくても、眞理として立てて格別差支ないのである、であるが、大我と小我と、語を換へて申せば、天地の本原と、我々人類と、全然隔絶してゐるものとするから此の如き矛盾が生ずる、是であると云ふと誠に不親切でもあり、我々と云ふものは極く詰らない人間になる、此の如く人間の形を具へて、表面さへ立派にして、法律の制裁を受けないで居れば、それで立派な人間だと心得て居れば宜い、さう云ふ時に決して大我に沒入することは出來ない、然るに私が研究して居ります。華嚴の哲理に據りますと、此の如く大小二我を立つるの用はない、天地宇宙其のまゝが大我があつて、我々人類も亦大我である、我々が最初より宇宙の實在なる尊嚴高美なる大我の一部であると自覺した時より惡い事を行ふこと

が出來なくなる、こゝに人格の崇高なる價値が顯はるゝのである、これは此の圖の如く說明が出來る、彼の二我を立つる學理とは、雲泥の差があります。卽ち

此の如く、大我と小我とを分ける必要はないのであります、卽ち宇宙の實在と云ふものを大我と致しますならば、乃ち大我の一部は我々である、之れを華嚴の賢首大師などは、絕對我又は眞我と稱して居ります、我々は最初より大我である、故に大我たるの名に背かざるやう、努力して立派に善を積み、人たるの道を盡さなければならぬ、此の如く我々の集合體で大我と云ふものが出來て居る、決して前の圖の如く階段を經て行く必要はないので、最初より既に絕對我である、我々は立派な絕對我である、これは前に申しました人と云ふものゝ種類、大きい我と云ふのは是である、

宇宙の眞理卽ち我である、我は宇宙の眞理であつて、其眞理の塊りが人類となつて居る、だから知識が進み、段々科學に依つて飛行機のやうな物までも出來た、併し戰爭など出來ることは餘り有がたくもありませぬ、兎も角もさう云ふやうに我々は初めから大我である、さう云ふ永劫不滅の大我が人間として見ると、惡い事をしたくても出來ない道理である、それは我々固より立派な宇宙の主である、絕對の神である、と云ふ觀念があればこそ、惡いことはしたくも出來ない、譬へば一つの美しい蜜柑があつて、其中に腐つた所があれば、其蜜柑に傷がつき、腐つてしまふと價値が下がると云ふ樣な道理である、それが腐らぬやうになさんければならない。序に一言致しますが、現今我國の學者中に新しい事を好む傾きがある、西哲も云ひし如く、天地の間に新しい物は一つもない、宇宙に古く存在せる物を、人は研究し發見して、恣に新しいと云ふのである、然るに今の學者は、婦女子の流行の衣裝を好む如く新しい學說を喜ぶ、此の頃は獨逸のオイケンの學說が大流行である、成程彼れは立派な學說を立てゝ居りますが、一體宗教とか、哲學とかと云ふやうな眞理觀は、古今と云ふものもなく、新舊と云ふものもない、新しいとか古いとか云ふが、我々は假り

に新とか舊とか云ふやうな名稱を勝手に付けても、眞理には古今なく新舊はない、これでオイケンの學說たる直觀とか、新理想主義とか云ふものは、禪學や唯識論中に既に道破されてある、其オイケン博士が今我國賓として我國に來る筈でありましたが、今回の事件で來ないことになつた、精神界の學者であるから來ても宜からう、殺されても自分の道を說くのであれば、宜しくオイケン博士の如きは、我が日本に來て、立派に自家の說を吐いて宜からうと思ふ、さう云ふやうで、オイケン博士の學說などは、是から度々此所に秋野孝道さんが見えて禪學のお話をなされると云ふことでありますが、オイケンの學說は其禪學に似てゐる、卽ち直覺的に悟る、元來禪は敎外別傳、不立文字で、彼所に月が出て居ると言へば、もう其指に用はない。こゝを明けよと瓦礫にで戸を敲き、今明けると云へば瓦礫に用はない、と云ふのは禪學の立て方である、オイケンの哲學は、東西の學界に大流行である、科學萬能主義、科學でなければ夜が明けぬと云ふ時に、精神主義を說いたから面白い、禪學も亦華嚴の敎理から見るとズツと早分りがする、是は私の一家言ではありませぬ、昔から佛敎の學者が是認する所論であります、實に華嚴の哲理は佛敎中のオーソリチーであつて、何所に行つても其上に超越する學說はない。

この華嚴の中には十玄門と云ふ高妙なる學說があります、其の中の一つに一多相容不同門と云ふ說があります、一寸の時間で十分お話することは出來ませぬが極く簡單に申しますれば、一多相容不同門とは、例へば一と千とは違ふ、算盤の上から見ても、一と千と云ふものは一緒にする譯にはいかぬ、けれども決して一を離れて千も萬もないのである、一多相容と云ふのは、相容れて少しも違がない、例へば茲に錢が十錢ある、一から數へて、一錢を取つてしまふ、決して十錢と云ふものが成立せぬのだ、百のものを一つ取つても、之れは九十九になつてしまふ、だから一と多とは離れられぬものである、又一の方から見れば、十の九が一の方に這入ります、九の方から見れば、一は九の中に這入る、どうしても一と多と云ふものは相待つて、決して犯すことがない、此の眞理は決して否定することが出來ないのだ、それは前に申上げた大我は大なるものである、我々も大我である、其大我の一人たる龜谷と云ふ者に宇宙全體が存在して居る、又柳原伯爵閣下にも宇宙全體が存在してゐる、斯う云ふやうに一錢と十錢、是が一と多とは相容れて同じものぢやないが、相容れて離れ

ぬのである、この道理であつて、宇宙は廣大無邊で我々の意識を超越してゐるけれども、我々を離れて宇宙は存在しない、であるから我々を宇宙の外に拋つてしまふと云ふことは決して出來ない、さうすると、我々はナカ〳〵尊嚴崇高な者であれば、決して人格を毀傷する樣な行爲は出來ない、又自から卑しむことの出來ぬ者であります。

もう一つ今度は、十玄門中の因陀羅網境界門と申すのを一寸述べます、是もナカ〳〵精しくお話せぬと分らむやうな次第でありまするが、極く簡單に述べます、因陀羅網と云ふものは、抹香臭いやうであるけれども、決してさうではない、因陀羅と申しまするとと、帝釋天と云ふのであります、兜率天上に帝釋の王宮がある、是は餘程詩的に、詩の方から考へると面白い說があります、そんな事は餘計な事でありますけれども、例へて申せば、此處に帝釋天の宮殿がある、其宮殿の中に因陀羅網と云ふてイロ〳〵な水晶の樣な立派な透明な珠で拵へた網がある、この玲瓏たる美麗な珠玉が千も萬もズッと接がつて居る、其中の一つの珠に黑點を付けると、其透明なる鏡のやうな珠の所に向つて此黑點が千にも萬にも、何所までも映つる、此黑點が是にも映つり、彼にも映つり、重々無盡に殘らず、皆一の點がある、例へば我々が此所へ顏を出しまして鏡に映る、鏡に私の顏が映れば、私の顏が、鏡が幾個も重なれば重なるに隨ひ幾個にもなる、卽ち何所までも何所までもこれが遁れずにある、十も百も千も萬も重なります、さう云ふやうに黑點と一緒で、我々が一つ此所に居れば、これが宇宙の間に充滿して居る、決して我々の肉眼では見えぬけれども、此宇宙の間に充滿して居る、實に是は面白い、此道理は如何なる學理の上から研究しても、又打壞さんとしても出來ない、確固動かぬ所の眞理である、さうして見まするとと、我々人間は餘程尊いものである。此頃はいろ〳〵の靜座法とか、何々術とか流行し、彼所へ行けば病氣が快くなるとか、姓名を判斷するとか、頻りに迷信な事が流行するけれども、此の如き眞理を自覺した上は、ソンナつまらない事をする必要はないなのである。猶、十玄門中の十世隔法異成門と申すことを述べます、今日私共お互は何か言ふと、我々は息が絕ゆれば、卽ち肉體が土になつてしまふ、それと同時に我々の眼に見えぬ所の精神までも、換言せば靈魂と云ふものも無くなつてしまふ、といふことは殆んど今日の科學社會の定論となつて居るやうだ、けれども、是は決してさ

うではない、十世隔法異成門の道理から言ひますと、我々が今此所でお話して居ることであり、又あなた方が此所にお出でになると云ふことも、チャンと極つて居るのである、我々の常に思ふ一念と云ふものが決して消えるものぢやない、と云ふのは、十世隔法異成門と申しまするが、それは過、現、未の三世、卽ち過去、未來、現在と云ふ、此過去と云ふのは、卽ち今一時間前は過去である、現在と云ふのはお話して居る現在である、又止めて歸る時分は未來である、是は刹那の間に生滅して行くけれども、此道理は、又否定することは出來ない、此過去に三つ掛けると三世になる、現在未來共に三を掛ければ九であつて九世になる、是は算盤の上でも否定することは出來ない、それを總括したものを十世と申すのである、お互が此倶樂部に來て居ると云ふことは決して故なくして來たのではないのであります、又我々が此肉體を茲に受けたと云ふものは、何等か元との過去に原因がなくて、ヒョッと出たものでぢやないと云ふことは申すまでもない、我々が此過去と云ふ事は、佛敎などで無始以來我々人類になつて來て、斯う云ふやうに餘儀なくされて居る、此餘儀なくされて居ると云ふことが、又未來永刼に對して、矢張り之れが一貫して行つて居る、一夜の間に何千年何百年と云ふ時間を超越して、釋迦や孔子の事や、或は德川家康や、又豐臣秀吉の事など夢見ることが出來る、是等は夢とは申すけれども、時間を超越してさう云ふ事が出來ると云ふのは、我々の一念と云ふ者が、過去を一貫し、未來を一貫して居る、森羅萬象何事も實に我々の一念に存在してゐる。總て物には原因と結果とがなければならぬ、決して何か、空にヒョッと出來ると云ふことはないのであります、それを十世隔法異成門と云ふ、卽ち過去の一念は千萬年の前の事も、千萬年の後の事も皆我々の一念の中に總括して居る、是は實に深遠な道理、又此道理は誰れも否定することが出來ない、一に二を寄せ三を生ずる、此數理的に考へても決して是は打消すことは出來ないのであります、それで斯んな事はあなた方が能く御承知でありまするが、道德とか倫理とか云ふ事も最近までは、唯々お互に人と人との間を調和して、法律に觸れざる限りに世を渡ればそれで宜い、善惡はこれで宜い、お早やうございます、お早うございますと云ふ樣に、立派に人たるの道をやつて行けばそれで宜しい、人生の能事至れり盡せりと云ふやうな考であつたが、段々道德の立て方も、深遠を加へ、宇宙の實在に根柢を有するものであると云ふ樣に、非常に高

妙な、神とか佛とか云ふ詐りのない觀念から生ぜんければならない、と云ふことになつた、此頃の學者は不死の倫理と云ふことを唱へ出して居ります、誠に是は佛教で云ふ不滅の道德と云ふのである、我々は人が見ぬから內證で惡いことをする、彼奴はどうも憎らしい奴だ、一つ打つてやりたい、彼奴を虐めてやりたいと、併し行爲に顯はさなければ、決して法律には問ふ事が出來ぬ、けれども道德の方では彼奴は憎い奴だと心で思ふ事も已に罪惡である、是は私が申さなくても、學者の方が多いから御承知であります、それが今日物理學者の說に依つても、我々の肉眼では見えない、空間にはどれだけ物質があるか分らぬ、と云ふやうな說が出て來ました、さうして見ますると、物を取つたり、人を殺したりはせぬけれども、彼奴は惡い奴である、犬を嗾けてやらうとか、何か法網にかゝる樣な事があればよいと思ふことが形となつて存する、と云ふやうな說が出るやうになつた、人が見ぬからと云ふてやつた惡事が決して永遠にそれは消えずに現存する、何所までも附て行く、唯識論などには能く出て居る、朝早く寒い時にホーッと息を出すと、我々の肉眼で見ては、之れがパッと消えるやうであるけれども、是が天地法界の中に充滿する、或は濠へ行つて石を投げて波紋が出る、直ちに消えたやうであるけれどもアノ波紋は如何なる抵抗力があつても、何所までも推して行く、是は動かせぬ道理である、して見ると內證で惡い事は出來ぬやうになる、唯々それが人に指摘をされぬだけでなく、人が若しさう云ふ事をすると永遠に何時までも此罪惡が存する、して見るとナカ〳〵釋迦などと云ふ人は早く偉い事を考へたのであります。

もう一つ未だ時間もありますから、我佛尊しと云ふやうな事で、自分が研究して居る事を申して見ましやう、華嚴の敎理中に、此の天地を四つに分けて說てある、卽ち(一)事法界、(二)理法界、(三)理事無碍法界、(四)事々無碍法界と云ふことで、是は賢首と云ふ人が、三重觀に一つを加へ四方界と云ふものにしたのでありますが、事法界は卽ち事物、石もあれば、水もある、總て我々の眼に見えて居る、事物は皆事法界である、之れには、コップならコップ、或は椅子ならば椅子の働をなす道理が存して居る。又眼には見えぬけれども、それだけの道理があつて成立して居るのが理法界である、其上に理事無碍法界、例へば理と事とは別物であるかと云へば、決してさうでない、無碍で碍へることがない、此碍の字は本當に書けば礙であります、決して事と理

とは礙りない、どんなに科學が盛んになつても、電氣を使つて種々の發明も道理に依つて出來る、例へば仲の惡いもので言へば、水と火と云ふ、水火も啻ならぬと云ふ間柄のものが一つになつて居る、隨分水の中に油田などがあつて、其所へ這入ると云ふとバット火が出たりする、或場合には火が燃えて居る時に水を灌げば消えることはあるけれども、さう云ふ反對であつても、此道理からすれば左のみ碍へるやうなものでない。今日の哲學者なり、宗教家なりの說方では天地の眞理と云ふものは、現象卽圓融と云ふ樣な事が、最高の眞理となつて居る、現象卽圓融と云ふのは華嚴の第三の理事無碍に當るのであります、然るに此華嚴哲學の深い道理に依りますと、其上に事々無碍法界と云ふものがある、是は立派な西洋の宗教や哲學が來ても、どんなものが來ても此上に出ることは出來ぬ、事物と道理は、其區別を言ふ必要なくして、事々無碍卽ち椅子なら椅子、テーブルならテーブルと云ふ物が、卽ち無碍で、此中に道理も何も含んで居る、別にさう云ふ道理を說く必要はない、人間の身體を見ても、手足があつて血を包んで居るやうなもので、是が人間の一の性質であつて、それを解釋してそれを知るだけの必要はない、是に超越した眞理はない、我々が其事實を悟れば、其儘が卽ち眞理である、斯う云ふやうな姿が事々無碍法界と云ふことになつて居る、此事々無碍法界の境界は何であるかと云へば、滿場の諸君の如く、富、貴、名、譽を得て、猶其上に是は失禮であるけれども、情、欲、乃ち此の三つを併せてもつてお在になる、併ながら此の三者は、人間の窮極の目的で、それ以上に目的は無いとしたら、誠にどうも人間はつまらぬと思ひます、私は貧乏な老書生でありますから、負惜を言ふのでないが、どうもそれだけならば、其樣な人間と云ふものは安つぽいやうに私は考へる、立派な爵位もあり、又名譽の肩書もあり、其上逸樂をも恣に出來る、斯う云ふやうな事で、此上もない結構な人間で、萬人共に希望する所であります、するが、それが最高の目的であるかと云へば、決して私は首肯が出來ない、諸君も亦さうであらうと思ふのであります、決して之れが自分の滿足した窮極の事ではない、それ以上に何等か一つ人たる者は、立派な者にならうと思うて居るのである、又それがなければ其人と云ふものは殆ど人格の低い人と言はんければならぬ、精神上非常に高尙な天地萬物と一つになる、宇宙の根本となる、永久不滅のものとなる。語を換へて申しますれば、神とか、實在とか云ふやうな絕對無限の地位に至

らんければならぬ。諸君も御承知の通り、彼の哲學者スピノザと云ふ人であります、彼は平生眼鏡を磨いて生活して、人の四疊半の二階を借りて生活した、或時一貴族から彼は或大學校の名譽教授にして立派な生活をさせる、其代り哲學の研究はお前の自由にせよ、併しながら教會に於ける規則だけは守つて貰はんければならぬ、と云ふ招聘を受けた、さうすると云ふとスピノザは殆ど何週間か、深思熟考した結果、矢張りお斷りした、如何にも貧乏な眼鏡磨をして生活して居るよりも、大博士になり、大學の教授になり、澤山な月給を下さる、それは如何にも有難い、さうして哲學は自由に研究するも宜しい、併しながら教會に於ける規則だけは守らなければならぬ、是は考へものである、さうして見ると人間と云ふものは富貴と云ふ事と、名譽と云ふ事と、情欲と云ふ事と、其三つが人間の求むる所である、是れ以上に望む所はないとすると、今之れを承知すれば此三つを併せ得ることは出來る、それから二階に引込んで長い間、沈思默考した、併しながら待てよ、自分は眼鏡を磨いて生活して、ヤット口を糊して居るが、自由に自分の思ふ儘に天地の眞理を研究し、自由に自分の著述も出來る、大學の名譽教授になつて、澤山な月給、それは有がたい、人生の望を果すことは出來るが、矢張り世間に向つて多少自分の意志を抂げて、思想を抂げて講釋もせねばならぬ事もある、又教會は非常に形式に流れて、教會の規則を守るとして見ると、是は考へものだ、自分が宇宙と合一し、此の實在と一つになり、神と云ふ最高な尊嚴なものと一つになる、宇宙は卽ち神である、神は卽ち眞理である、之を憧憬し、それに向つて努力して居る者が、さう云ふ工合になると富貴、名譽、情慾の爲に此望、最高なる望を抂げなければならない、さうして見ると、眼鏡を磨いて口を糊して居る方が宜い、と云ふことで遂にお斷りをしてしまつた、私は斯う云ふ人格の高い人を憧憬し敬慕して居るのであります、さう云ふ事を申しますと、私は失禮な事を言ふと仰しやるか知らぬが、兎に角釋迦はどうであるかと言へば、王位を捨てて大法の爲に乞食坊主となつて、彼が如き偉大なる宗教を建立した、ソクラテスでも毒酒を仰いで斃れた、さう云ふやうな事があつた、我々は此最高の位地に進みたい、矢張り名譽も必要であるし、爵位も羨ましい次第でありますが、あなた方も、其上に努力して、人爵の高い位地に向上せられんことを切に希望致しまするが、決してそれだけが人生の希望でないと云ふことは、私が申上げずとも、諸君の心にさう云

ふ御希望があり、此地位に達し、此地位に努力して戴けば、自然と爵位なり、名譽なりに光が付て、情慾と云ふやうな詰らない事は、自然に消滅してしまふやうなことになるのであります、是は私が非常に希望する次第、諸君の様に立派な上流の方に對して斯う云ふ失禮な事を申したが、切に其邊は私が宗教を研究する立場として、諸君に希望する次第であります、是でお話は止めることに致しますが、尚御參考までに、もう一つ古事を述べて、此席を下ることに致します。

元來上流に立つて居る方は、餘程注意を加へて御出でなさらんければならぬ、此位の事はしても惡い事はあるまい、斯んな事位は宜いだらうと云ふやうな事をする、此の日本倶樂部に御出での方は、皆社會の上流人で、模範的の人々である、さう云ふ方々が、若し御失敗があつて、惡事でもなさることがあつてはならぬ、これは古い書物に在りまする事である。或る一人の大德な賢人がありました、是は比喩でありますから、非科學的で、誠に神祕的でありますが、譬喩でありますから、其積りでお聽きあらん事を希望する、此の人が誠に高潔で、人から模範的人物であると言はれたが、眼を病んで、如何なる眼醫者に掛けても治らない、困つて居ると、或一人の友人が言ふに、お前の眼はそれは到底治らない、醫者に掛けても治らぬ、其筈だ餘程酷いから、それでマア東京で申しますれば、不忍の池見たやうな所でありますが、是から一里ばかり向ふに蓮池がある、其所に祠があつて、其池の蓮の匂ひを嗅いで、其露を眼に塗れば、一週間と經たぬ中に全快するといふ話、是は有難いと云ふので、其賢人が毎日、未明に起きて、今日であれば三時か四時頃に杖を頼りに其蓮池の傍りに行きますと、美しい蓮花がポツ〳〵と音がして開いて居る、其馥郁たる匂が清く鼻をうつ、それを手探りにして、露を手につけて眼に塗つた、さうして歸つて來る、さうして六日目になると、端から少し明いて來た、するとどうも結構な事で段々眼が快くなつた、是は結構な事であると言つて居りまする、今日で申すと軍人でありませうが、劍を提げた男が來て、其蓮を半ば刈り取りて繩で引張つて持つて行く。誠にどうも無慘な事をするものである、酷い事をする、惡い人もあるものだと思つて居ると、丁度辨天樣見たやうな神樣が聲を出して、コレお前は泥棒をした惡い人だ、神樣が物を言ふのですから、面白い話であります、そこで其人はイエ私は友人の告げに依つて、此蓮の匂を嗅ぎ、露を眼に塗れば全快すると云ふことで今日六日目であ

る、ウス〳〵見えて來たので有難いと思うて居る時に、荒くれた武士が來て、蓮を刈つて歸りました、それでお人違ひであります、と言ふと、神樣はイヤ〳〵お前は怪からぬと仰せられる、實にどうも無實の難で困つた事であります、私は決して左樣な事をする者ぢやない。イヤお前が盗つた、其譯聽かしてやると、仰せられ、さて、神樣が仰せられるには、彼の男は、劣等な者で、人より指彈されてゐる人物である、他人の物を盗み取るとも別に咎めるには及ばぬやうな人間である、それが此蓮を切つて持つて歸つたのは惡事には違ひなけれども、其人からすると非常な罪惡ではない。然るに汝は人より模範的な人である、社會から賢人と言はれる人物である、然るに此祠に主が居るのに、それの承諾も受けずして、假令、蓮の匂ひを嗅ぎ、露を塗つて眼を治すと云ふに止まるも實に不屆な事である、汝の罪は、彼の武人が蓮を切り取りしよりも猶ほ深し、看よ茲に眞黑なる衣を著して居れば、少許の墨が付いても目立たぬが、純白なる衣を着する者には、秋毫の汚點あれば直ぐに明白に分るべし、それと同じ樣に人の模範となつて居る者が惡い事をすると、直くに世人から指彈されるのであると。乃ち賢人は、其の敎を奉じて、益々修養に修養を加へて、立派な聖人になつたと云ふ事であります、是れは誠に詩的な神祕的な、印度古代の古い話でありますが、我々が取りて以て服膺すべきものであらうかと思ふ、諸君は恰も此賢人と同樣な地位に在る方々でありますから、社會一般の人よりも、一層修養に修養を加へて、最前から御話した樣な、吾々は宇宙の實在、卽ち絕對我であると云ふ事を自覺されて、充分に國家の爲め、又社會の爲に盡して戴きたいと。大哲フイヒテ嘗て曰く、人の如何なる哲學を擇ぶやは、其如何なる人なりやに關すと、諸君も亦富貴、名譽、情欲の三つを超絕し、更に淸く高き希望に向はれる事を希望致します。

二二、哲學の權威と宗敎の尊嚴

「吾人の生活は、最高最深なる哲學を攻究し、又至上至美なる宗敎を憧憬するのである。此の立場から見れば、哲學は學術界に於ける王者であつて、宇宙の原理を智的に攻究すべき學問であるが故に、其の客觀界と、主觀界とを大別して、宇宙の森羅

萬象の歸結と、その法則を探究する、最も權威あるものであると信ずる。宗教も亦諸學術の上に秀出し、宇宙の原理、卽ち神の實在を美的に憧憬するものであると思ふのである。哲學は研究的に行き、宗教は宇宙に對し、情的若くば美的に進むものであるけれども、其の歸着する所は、俱に宇宙の大原に歸一するもので、人生に於ける最高最尊のものと信ずる。故に此の二つのものに對しては、他の學者なり宗教家なりが、之を客觀的に冷かなる立場に在りて研究するけれども、吾人は此の最高善、絕對者が、直に吾人その者であると信ずるのである。故に吾人の生活及び生命の源泉は、皆これより發して居るものであると信ずる。

斯かる立場に在るものであるから、人生に於ける、謂ゆる富貴、名譽情欲等は、吾人には最終の希望とするに足らぬものである。由來昔の哲學者、宗教家は、皆かゝる境地に生活し、又之を生命の源泉としたのである。卽ち佛陀の如き人生の一切を超出して吾は宇宙の本體卽ち法身の顯現であると信じ、絕對無限の法身佛であると自覺したのである。而して耶蘇も亦、人生に於けるあらゆるものを超越して、天國を創定し、自から權威ある神の子であると稱した。又夫のスピノザの如きも、人生に於ける富貴、名譽情欲等を果敢なきものとして顧みず、唯、宇宙の本體卽神といふ立場に在つて、之に沒同せんことを終生の希望としたのである。であるから例へば若し個人として現世に於て不遇であり、又物質的幸福を享くることが淺いにしても別に宗教の樂園があり、心靈の國土を有して居る以上、毫も吾人は不安苦痛を感ぜぬのである。然るに斯かる最高至上なる大原故鄕に到達することを欲せず、又此くの如き純美高明なる世界に安住することを好まずして、徒らに一般物質的慾望にのみ汲々たる者が多いのは、甚しい妄想謬見といはねばならぬ。吾人は寧ろ世の冷遇を受くれば受けるだけ幸福であるとして、希望を久遠の樂地に繫ぐ者である。然るに世間の哲學を研究し、宗教の宣揚に從ふ者にして、往々低級の凡俗に媚びて、これが拍手を得んと欲するために、彼の人生に於ける非理罪惡の結晶たる戰爭を讃美し、戰爭の哲理を說き、若くば弱肉强食を以て宇宙の眞理、自然の原則なるかの如く唱道する者すらあるのである。將來に於て、吾人の常に主張する如く、永久平和論者が勢力を占め、凡てを解決せられて、戰爭は遂に其の跡を絕つに至ると信ずるのである。然るに、世の可戰論者は謂ふ、元來人間の生活は競爭的に

して、絶えず幾多の爭鬪を續けて、究極の勝敗を決すべきもので、其大なるものが戰爭といふ形式に於て現はるゝのであると。果して然らば、戰爭は永久に避くべからざるものであらうか、若し此の論を至當とし、此說に信憑し、戰爭が人間必然の事象であるとする論者は、或は一歩進んで神の定められた秩序の手段であるといふかも知れぬ。而して遂に此の如き獸的思想が、崇高なるべき哲學者を墮落せしめ宗敎家を支配し、宗敎家哲學者も、亦忽ち之れに附和し、雷同する有樣であつて。哲學の權威も之れに蹂躙せられ、宗敎の尊嚴も、此れに破壞せられんとする傾向である。

凡そ宇宙の實在には、二つの見方がある、卽ち宇宙を心靈的謂ゆるインスピレーションに觸れたる立脚地より見るのと、宇宙萬象を唯物的機械的に見るとの差がある。後者の如きは科學者に多くして、萬般の事物を機械視し、進化の道理より、遂に戰爭を是認するに至る者であつて。如何に多くの犧牲を拂ひ、如何に多くの殘虐が行はるゝとも、こは天災地變に因て、人命が失はれ、財產を奪はれ、建設せられた文明が、用捨もなく埋沒されると、毫も選ぶところなく、極めて必然的の事象であるとする論である。然るに前者に在りては、鑛物、植物、動物等の一切を通じて、最も知識あり、又最も進歩したる者は、凡ての差別的善惡を超越した、吾人々類にして、此に權威ある哲學は生れ、尊嚴なる宗敎は現はれて、宇宙の實在と合一する說である。卽ち此の宇宙は謂ゆる本體卽神といふ崇美皓潔なる眞理觀に依て成立し、而して幾多の萬象が相互永久の平和を樂しむやうに造られたものである。然るに唯、凡てを機械視する時は、宛然無味乾燥たる沙漠を徘徊するにも似て、其處に何等の感興なく思索なく、極めて平板なものであり、また從つて權威もなければ、尊嚴とすべきものもないのである。宇宙の活動は、渾て機械的で、萬物は原因結果の理法に由りて支配せられ、互に聯貫相續しつゝ行くものであると。この機械論に世の宗敎家哲學者の多くが、附和雷同して、低級の俗衆に媚びてまで、物質文明を謳歌するに至るは、卽ち此の宇宙を機械視する者であつて、本より吾人の大に憾多しとする所である。吾人は飽くまでも自個の所信を貫くためには、前途に横はる惡魔を斥け障礙を排して、有終の目的を達せねばならぬのである。昔佛陀が謂ゆる華嚴法界の眞理を說きたまひし時、大衆は其の突梯なる不可思議の說法を嘲つて皆逃げ去

つたといふが。而かも其の高大深遠の說法は、やがて千古不滅の一大眞理であつた如く。又彼の泰西の一大詩人が心奧の秘想を一篇の大作に著はしたが、これに模倣するものは、一人も無かつたが、容易に模倣し得る小詩篇は、皆競ふて唱和したと同じく、低級なる俗衆は、戰爭を讃美する哲學者や、自國のみの勝利を祈る泰西の宗教家の態度に敬意を表するであらう。然し、靜に思へば此の複雜なる人間社會の事相は、單に肉體的物質的機械的見方に依つてのみ解決さるべきものではない、人間の眞相を分析し探究し盡す時、其處に偉大なる靈光の閃きを觀照することが出來るのであつて、此の眞理は永劫に間違はぬのである。例へば物を數ふるのに、極微以下に到ることは出來ず、又大極以上に進むことが出來ぬのである。嘗て西人がいひし如く、此に一個の風琴があつて、これが音を發するに當り、一番低い音は、一秒時間に三十二の震動を爲すが、凡そ世界に低い音といふ音の中に、これより低いものはない。又其の反對に、極大の音は、一秒時間に一萬五千の震動を爲すと云ふ、無形の音聲すら既に然りである。凡百の事物は、皆此の規則の外に出づることは出來ぬ。況んや有形の物にして、而かも吾人の心靈上、宗教上神人合一の概念は矢張吾人に具備せられてある。然るにこの神的生活を希望する、宗教家や哲學者にして、戰爭を讃美しつゝあるは、所謂牛の名を以て馬を求むるの類で、これは到底牛馬共に得られぬことは明かな事である。斯かる世にありては、彼の世界の平和を破れる者を、高壓的に制御し得べき偉大なる俊傑の出現こそ望ましいのであつて、天下紛々たる愚論迷說の徒輩は、之を一掃し去らねばならぬ。例へば此に堅く閉ぢられたる鐵門があるとするに、千萬人が集つて押し破らんとするよりも、眞に一人の傑物が來つて、一個の鑰をもつて開けたならば、容易に開かれ得る。これと同じく、大傑物の出現こそ望ましい。

*　*　*　*　*　*

吾人が常に云ふ如く、宗教家は、普通一般の俗人が希望する世俗的、富貴、名譽、快樂の三者を超越し、人生に於ける最高最尊の希望、卽ち無限絕對なる神と合一するを目的とする者であるから、自から尊嚴ならざるべからざるものにして、物質上の辛苦、又は斯道の犧牲等になることは、毫も意とするに足らない、謂ゆる身を殺して仁を爲すまでに至らねばならぬのである。卽ち天下後世に不朽の聖人として、傳へ

らるゝ所の大宗教家、大哲學者は、何れも皆、救世濟民を以て其の生活としたのである、夫の大哲スピノザの如き、僅かに眼鏡磨きを職業として口を糊しながらも、絶えず哲學の研究に耽つてゐた、たま〳〵ハイデルベルヒの大學から招聘せられたにも拘はらず、彼が大なる自由思想のためには、名譽ある大學教授も何等の價値を認めなかつたのである、卽ち其の招命を辭退した文中の一節には、明かに彼が高雅で寡慾で、而かも偉大なる性格が現はれて居る。彼は云つた、一度大學の教授となり、青年子弟の教育に從事するに至らば、自ら哲學的思索、哲學的研究の事、意の如くならず、且つ又よし哲學的研究の自由を許すといふも、教會の信條に觸れざるを要すとある以上、其の範圍は明かでない、それでは、他日紛議諍論の本となるまいでもないからと。恬然として榮職を顧みず、相變らず眼鏡磨きを以て生活としてゐたといふ。「本より彼は人生最終の目的を以て、富貴、名譽、情慾等を超越したるものとせることは勿論にして、自由に至高なる哲理を研究し、宇宙の本體は神なることの外、何物もないと信じたのである、卽ち彼が不滅の哲人たる所以は、此に存するのである。」

又我邦に於ける、華嚴の大學者たりし、僧高辨、卽ち明惠上人の如き、彼れも亦富貴榮華を見ること恰も塵芥の如く、高潔にして尊嚴なる宗教家であつた。彼れは鎌倉の執權北條氏の歸依する所で、北條泰時が、天下の政治を諮ひし時『無欲』の二字を政治の基礎とすべき事を訓へた。其の他萬乘の天子又は公卿等の敬仰する所であつた。或る時六波羅に於て北條氏の臣下が、彼れ明惠上人が敵方を隱匿せしといふ口實を以て、之を不法檻禁し、既に危く嚴罰に處せんとした時に、之を聞知した、泰時は臣下の輕擧を叱責し、明惠の縛を解き、且つ懇に上人に向ひ、師は何故に其の無實を告げ玉はずやと問ふたが、其時上人は儼然として、我には敵味方あることなしと。怨恨の色を現はさなかつたと云ふ。又彼れは後鳥羽帝の寵を受け、或時皇妃建禮門院より召されて、戒法授戒の事を依囑せられた。然るに其の日皇妃は、一段高く設へられたる玉座の裏に、玉簾を垂れ、纖手を出して戒法を受けんとし玉ひしに、明惠上人は曰ふ、愚僧は素と紀州有田の賤しき者の子なれども、今は佛陀の教を受け、出家沙門の身なり。出家は三界の大導師なれば、王公にも事へず、また拜せざることあり。故に佛智の尊嚴を屈して貴人に阿諛すること能はず、他の僧に受

戒あれと決然立ち去らむとせしより、建禮門院は、玉座を降り、對座して戒を受け玉ひしと云ふ。實に宗教家の尊嚴なるは此に在るのである。彼れは實に富貴、名譽、情欲を以て其の眞生活なる宗教の尊嚴に比すべきに非ずとしたのである。

又彼の奈良朝に於ける聖武天皇の如き、華麗莊嚴なる奈良朝佛教の創唱者として、今日に至るも世界に比類なき大佛を建造し玉ひ、將又我國に佛教のオーソリチーたる華嚴聖典を轉入して、之を弘布し玉ひたる聖皇である。天皇は毘盧舍那佛の前に幸し玉ひて、自から三寶の奴と稱したまふた、これを畏き皇位を屈したまひしとて、無學なる神道者儒者輩が誹謗し奉れるが、此は大なる謬見で、實に御理想の崇高なる所以である。其は天皇が、大佛を鑄造し玉ふに當りて、僧行基を伊勢大廟に參向せしめ玉ひ、神意を奉伺せしめた後、毘盧舍那佛は天照大神の垂跡たることを確信し玉ひて、無限絶對の神を禮拜するは、當然の事と確認し玉ひたのであつて、寔に天皇の御見識の偉大なるを讃美し奉るのである。斯くの如き理由によつて、吾人は哲學の權威と、宗教の尊嚴を永遠に主張し把持せんと欲するものである。

二三、何の日か眞の文明を見ん

高遠なる哲學の研究を喜び、尊嚴なる宗教に憧憬するものゝ見地に立ちて、現時の世界の大勢を觀察すれば、實に戰慄に堪へざるもの少なからず。吾人々類が、初めて此の地球に生活せし原始時代は且らく問はず、有史以來の事蹟を見るに、古來多くの聖賢が、口を嗄らし、身を殺して、慈悲博愛を主とせる道を說き、世界の人類をして、永遠の平和を樂しましめんとせし精神的事業は、今日世界の大勢より觀れば、實に矛盾撞著を極むるもの多し。史を案ずるに、洋の東西を問はず、時の古今を論ぜず、常に一旦文明の域に到達せる國は、何れも皆野蠻國のために亡ぼされ、而して其の野蠻國は却て國家として進步發達せるを觀る。由來國家の進步發達を圖ることを目的とする政治、法律、教育、美術、工藝、其の他百般の事物は、何れも皆人文史上の必要物として生出せしものなり。而して其の何れの國民と雖も、世界の平和を

望む點に於て、相一致するものなりとす。就中、各國を通じて、最も重大視する政治の如き、其の根本は國家の存立、人類の安寧を圖るに在りて、本と是れ哲學的眞理より出立したるものとす。然るに何事ぞ、近來國家的政治の主張は、何れの國も、人類的道義と衝突するに至れり。吾人の如く、先聖の敎義を崇敬し、人道を重んじ、常に世界の平和を希望して止まざる者より見れば、今日の世界の有樣は、實に惡魔の集合、禽獸の世界と稱するも敢て不可なしと思ふなり。其の世界の强國と目せらるる歐米の文明國なるものを見るに、各々自我の國土を擴張すること、各人のいづれもは、唯我主義によりて行動し、これが爲めには、更に善惡正邪を論ぜざるかの觀あり。而して吾人が見て以て最も奇とするは、彼等禽獸惡魔の生活を爲すものにして、また平和を說き、人道を論ずること是れなり。今や彼等は人道的の立場と、國家的立場との衝突中に介在せるものなり。人道的觀念よりいへば、道德を尊重し、世界人類の生活を安固にせんとするを眼目とし、國家的觀念よりすれば、弱國を亡し、自國を强大にすることを主とし、これがためには、多くの人を殺すことをも、敢て辭せずといふに至る。されば彼等は、陽に人道を稱へ、國際公法の重んずべく、永久の平和を說くと雖も、陰には唯、自國の擴大を圖るに、日も猶ほ足らざるの觀ありとす。而して彼等歐洲の列强は、概して基督敎を奉ずるを以て、帝王又は主權者は、常に十字架の前に平和を祈るを常とす、いふまでもなく耶蘇は今より二千年前に、小亞細亞に出でたるものにして、彼は人類、永遠の平和を保たしめんと欲し惡魔の世界を、天國に化せしめんことに苦慮し、終に十字架上の露と消えしなり。彼曰く『爾の隣人を愛すること、猶ほ己れを愛するが如くせよ』と、是れ博愛仁慈を以て根本とする者に非ずして何ぞ。然るに基督敎國の政治學者や政治家の多くは、これを到底行ひ得ざるものと非認せり。又耶蘇の『人あり爾の左の頰を打たば、又、右の頰をも向けて打たしめよ』といへるをも、歐米の學者は之を難じて、こは實行の伴はざる空言にして、到底遵奉し得ざるものなり。かゝる場合には、寧ろ猛烈に反擊するの勇氣なくんば、個人の權威、又は國家の尊嚴を保ち難きに非ずやと。此等政治學者政治家の主張は、眞の人類相愛主義とは、絕對に違背するものにして、彼の基督の敎ふる所、又は聖書に含める語の如きを排斥し、他を愛するより、己れを愛することにより、國家は其の實力と繁榮とを助長すとし、政治の根本義は、唯我主義の發揮と、國土擴

張主義とに在りとするなり。而して彼等は尙ほ厚顏にも、陽に基督敎を信奉すと稱し、彼の帝王或は主權者は、其の大禮の儀式に際し、十字架を頭上に戴き、神の前に誓言す、これ實に笑ふべきに非ずや。

吾人は實に今日の文明國を以て、眞の文明國と見ること能はず、そは何れの國と雖も、今日の勢力を獲得せるは、畢竟野蠻的に唯我主義、又は國土擴張主義を遂行し、他の文明國を亡ばして、國を興したるによればなり。彼の希臘羅馬の如き他の野蠻國のために亡ぼされ。又支那唐宋の文明時代に於ても、遂に野蠻人のために亡ぼされたるに非ずや。斯かる事實に徵して、吾人は今日泰西の物質的文明は、眞の文明に非ずして、野蠻的惡魔の集合、又は禽獸界と呼ぶに躊躇せざるなり。

如上縷說する所、全世界の各强大國は、國土擴張主義を以て、國家存立の原則となすにも拘はらず、彼等の祖先中には、夙に世界の平和を主張し、人類の安寧を絕叫せる者あり。斯かる思想は遠く希臘時代に萠芽せり乃ちアンフイクチオン同盟の如き、平和を期し、戰爭の豫防を企圖したりき。又後代に至りても、かゝる思想は常に絕えず。卽ち中世紀に於ても、彼の羅馬法王が、各國の君主をして、各國間の反目を仲裁し、或は戰爭を調停せしめたるが如き、固より其の範圍は極めて狹隘なりと雖も又以て其の平和を企圖せる一斑を見るに足るべし。

又紀元一四六五年にも、彼のポヘミヤ王ボヂニブラッドが、王侯會議を起して、爭鬪の調和を圖らんとせし如き。或は佛國のアンリー第四世が、大耶蘇敎共和國議會なるものを起したる如き。此の他有名なる學者の間には國際仲裁論、或は軍備制限論を著して、盛んに平和論を主張し。又彼の大哲カントが永久平和論を著したる如き、實に世界の平和を企圖せるなり。既に吾が明治天皇の世に至り、彼の萬國平和會議に、我國の代表者の此の會議に參列し、國家的、人類的の提議を爲すに至りたるが如き、吾人の大に歡喜せし所なり。然るに世界の實際は、矢張、弱肉强食の有樣にて、何れの日か此の恐るべく、忌むべき戰爭の停止すべきやを知るべからず。

想ふに其の國が異なれば、その政體も人種も、亦宗敎も異なるを免れずと雖も、各國の代表者が、此の會議に列席して、平和的人類共通の眞理を討究し、この會議をして、世界の平和を保つ上に於て、大に實力あるものたらしむれば、二十世紀の今日、此の忌はしき戰爭は、その影を滅するに至りしならむ。而して吾人の最も痛嘆措く

能はざるものは、近來各國を通じて、富の程度の高まれるに伴ひ、物質的驕奢に流れ、肉慾的快樂に耽ること盛んに、個人主義の行はれ、利己的勢力を逞くし、彼の美しき神を崇敬する信念の薄らぎ、又道德を敬重する觀念の衰へたること是れなり。この悲むべき傾向が、方今世界を通じて、思想界、精神界に及ぼし、其の惡結果は、遂に高遠なる哲學の眞理も、尊嚴なる宗教の權威も失はれつゝあるを見る。

抑も、宗教は何れも皆慈悲仁愛を主眼とすれば、世界共通のものたり、萬國普遍的のものたり。乃ち佛陀の聖典にせよ、將た耶蘇の聖書にせよ、今日世界各國に譯されて流行しつゝあるなり、だゞに佛教及び耶蘇教といはず、孔孟の教の如きも、一般的性質のものなれば、世界の人類をして皆其の福音に浴せしめざるべからず。實に世界の政治家が唱導する唯我主義、國土擴張主義の如きは、人類の平和を希望する宗教の教義と矛盾衝突を極むるものなれば、哲學の權威も宗教の尊嚴も其の力の及ばざるを悲しむ。然りと雖も、世の宗教家又は哲學者を以て自ら任ずる者は、其の實全く精神界を支配すべき者なれば、物質的方面には其の力の乏しきを常とすれば、獨り自らを高しとするは可ならんも、かくては、宗教家、哲學者の使命を全うするものといふべからざれば、絶えずこの弱肉强食主義の行はるゝ、恐ろしき惡魔の世界を一變し、玲瓏玉の如き天國となさゞるべからず。されば宗教家なるものは、一の宗教に拘泥せず、飽迄所信を世界に公表して、人類の安寧と、世界の平和を圖らざるべからず。然しながら、こは大事業なるが故に、己が一生に果し得ざるとするも、或は二代三代、若くば數代を重ぬとも之を貫徹せしむるの覺悟なかるべからず。吾人が今目前、惡魔の跋扈するを見、常に現在に超出して、哲學宗教の研究に餘念なきにも拘らず、敢て此の論を爲す所以のものは、往昔歐洲の一哲學者が、專心哲學の研究に耽り、砲彈のその書齋を撲つをも知らざりし態度の如き、實に欽仰すべきも、今日世界の戰亂を聞くに及んで、默止するに忍びざるものあれば也。

二四、斯道は時處を超越す

昔し叡山に靈空と云ふ非常な智識の御方が居られた。天台の教相學に精通せ

ることは、他に竝びない學者であつた。此人が天台の三大部を講義なさる時、皆な聽きに行つた、其時代に有名なる鳳潭と云ふ坊樣があつた。是は或は伊藤仁齋先生の處に行き、或は徂徠翁の處に行き、色々な理屈を言つたと云ふ僧である。此僧が靈空の三大部の講釋を聽きに行つた。他の者は染み〳〵とは聽かぬが、此の鳳潭と云ふ坊樣だけは熱心に靈空の講義を聽いて居る。餘り高尚深遠であるから日に日に聽衆が減つて了つて、終には僅かに二人か三人になつて了つた。さうすると靈空上人が鳳潭に向つて、私も斯うやつて講釋して居るが、私の言ひ方が足らぬと見えて段々聽衆が減つて了つたから、一旦中止したらどうであらうかと言つた。是は其の實は自分の言ふ事、所謂祕密を殘らず鳳潭に知られるといふ懸念があるから、さう云ふ事を言ひ出したのである、所が鳳潭が言ふのに、決してさうではありませぬ。それならば私が明日から、聽衆を連れて參りませうと言つた。さうすると靈空はそれならば私も快くやりませうと答へた。それから明日になると鳳潭が、伏見人形を、澤山風呂敷に包んで擔いで來て、聽衆席に並べて、自分が其眞中に座つて居つた。軈て時刻になると靈空上人がやつて來て、それを見て驚いた。

本統の人間は、鳳潭一人で、あとは人形ばかりである。道の靈空も、是は怪しからぬ君が聽衆を連れて來ると言ふから私もやつて來たのだが、是は何んだと云ふ話、鳳潭の答へには、左樣でございます貴僧の御講義は非常に高尚深遠にして、その眞意を解する者が無い、私は一生懸命に聽いて居るけれども、他の聽衆と云ふものは殆どお飾りである、餘り高尚深遠なる爲めに眠氣がさして來るから出て來ぬ、詰り他の人間と云ふ者は、此の人形と同じである。眞に聽く者は私一人であるから宜いではありませぬか、斯う云つた所が、靈空上人は、ア、さうかと言つて手を拍つて、鳳潭一人の爲めに天台三大部を講釋し了つたと云ふ話がある。そこで私は今日の聽衆諸君は、僅かであるけれども、今の鳳潭上人と一つであると思ひます。

さて、道といふことは、中庸に、率性之謂道とか、易の形而上者、謂之道とか、董仲舒の道之本原出於天といふ道で、換言すれば眞理である。此の道、卽ち眞理は、時處を超越して不變である。絕對の眞理と云つて、お話してもよいが、此學舍は所謂、儒敎を以て本旨としてゐられるから、斯道といつてお話する。更にお斷りして置きたいのは、今日は、儒敎によりてお話するのであるが、自分は宗敎に趣味を有つて居り、又

平素宗教を研究して居るものであるから、自然と宗教を加味するやうになることであります。尤も私の主義は儒佛一貫説であります、儒も佛も、その根柢は一であるといふのですが、なるべく、今夕は東洋の學説を引合に出してお話する。先づ少し、支那、印度のことを述べたい、道とか教とかいふことは、古く儒教で説くけれども太古に溯れば、印度に其の源を汲んでゐる、印度の太古には、哲學が盛であつて、婆羅門教の中、數論、勝論の二派が、最も勢力を占めた。この二派は互に自分共の説が、他より優れてゐるとして、軋轢したものである。慈恩の説によれば印度の婆羅門の教理は、非常に立派なものであつて、其の内、自ら二派に岐れて互に相爭ひ、俱に印度に止ること能はず、一は西方に渡りて、梵天の教卽ち、造物主神を弘めた。これが耶蘇教の遠因をなしたもので。又一方は、東の方に渡つて來た。それは虛空卽ち天といふことを説いた。これが伏羲、神農卽ち、儒教の根本となつたのだと。この耶蘇教、儒教が、俱に印度の婆羅門より出たといふことはちよつと面白い説である。但し果して然るかは、深く研究を要する。

紀元前四世紀頃には、希臘人は、印度に往來した。隨つて婆羅門の哲理は、希臘に入つて、希臘哲學の祖をなした。これは此向きの史家が證明してゐる所である。又有名なショッペンハウエルは印度の哲學を、研究した。然し、ショッペンハウエルの研究したのは、單に其の小乘教の方であつて、大乘教を西洋に輸入した學者は未だ無い。

婆羅門哲學の上に於ても、實在の觀念については二樣の觀察をしてゐる。その梵天は、造物主神で、天地萬物これによりて造られたりとしてゐる。又梵天を人格的に見る、梵天を人格の大なるものとした。これに反して一方は、萬有的抽象的に立て、これが一切を產んだとしてゐる。或る學者は、萬有的抽象的のものを絕對的大我とし、他の人格的のものを小我と觀るが、これにいては、意見があるが茲では述べない。

佛教の實在觀念は、二樣になつてゐる。釋迦が佛教を道破した時には、無論印度の古き哲學を基礎とし、參考としたのである。であるから、佛教の小乘教となると婆羅門の教理と殆んど同一と見られる節もある。その二樣といふのは、一は人間的、近接的であつて、一は出世間的、幽遠的である、一は佛陀又は如來を謂ひ、一は眞如

光明をいふ。又語を換へて、法身、應身ともいつて居る。應身とは、釋迦のやうに、生を享けて、後死するもの、法身とは宇宙の如きをいふのである。かの馬鳴はこれに更に報身を加へて、三身に分つて居る。龍樹は、眞身と化身との二身を立てゝゐる。今も云ふ如く、應身は此の世に肉身、卽ち生を享けて終に死する、卽ち始あり終あるもので、報身は彌陀のやうに、法藏比丘から修業を積んで、無限絕對の佛となるといふので、法身は始なく、終なき無限絕對のものを云ふのである。

儒敎も、二樣に說いて居る。その一方は、上帝といふ如きもので、他の一方は、抽象的に、太極といつてゐる。上帝といふ方は、人格的で賞罰も、天が與へるといふのである、孔子の如きも、天、德をわれに生ず云々といつてゐる。平生の生活を天に鑑みてゐた。太極とは何かといふに、世界の眞理とみるので、萬有的、抽象的である。耶蘇敎にも亦ゴッド卽ち獨一の神を說くやうであるが然し耶蘇も、又一方には、各人皆その胸中に、天國を藏すといふやうに云つて、人格的の神と萬有的の神と二樣に說いてゐる、之れは止むを得ないことであらうと思はれる。

眞理卽ち道は、如何に時勢が變化し、天地に變動があつても滅するものでなく、動搖すべき性質のものでない。時の新古卽ち推移によつて左右するものでない、人心の傾向以上である。卽ち時處を超越してゐるのである。孔夫子も、わが道一以て之を貫くと云つてゐられる。吾人も亦た斯道によりて生活しなければならぬ私は佛敎中、華嚴の敎理を研究してゐる。華嚴は、佛敎の最高位に在る可きものである。華嚴は釋迦が覺りを開いた時、第一に說いたものであるが、餘り高尙過ぎるので、衆人が解しなかつた。そこで、平易に說き明して、衆の智識が進んだ時、また說いたものである。この事は、私一個の臆斷でなく、古今の宗敎家が、是認してゐるのである。

日本にも澤山の宗旨がある、而して何れも皆、その祖師の說を高しとする、これは當然であるが、更に公平無私に觀察する時は、各派何れも皆、此の華嚴に胚胎してゐる。儒敎では、一方に、治國平天下といふやうに、平易な說をなすと思へば、易のやうな、中庸のやうな、高尙な學說がある。殊に宋儒程子に至つては佛敎が盛んに、高尙な說をなすのに對抗する考へで太極說を極めて抽象的に高遠に唱へた。而して彼れは、八十華嚴を見るより易の一行を讀めば足れりとまで叫んだがこれは負惜

みである。元來二松學舍は、陽明學を奉ずる所である。陽明學と其の說を異にする宋儒の事を引合に出したからとて、御立腹にもなるまい。宋儒や其の他の學者が、如何に華嚴を攻擊しても、華嚴の道理は立派なもので、此の後如何に、哲學が精微を極むとも、これ以上に出ることは出來ない。志のある方は御研究あらんことをお勸めする。私はチョッと、華嚴聖典中の二三の玄理をお話する。乃ち、十玄緣起中の十世隔法異成門といふことについてお話しやうと思ふのである。

十世隔法異成門には、非常に深遠な哲理が含まれてゐる。十世とは何かと云ふに、お互がかくしてゐる刹那の間に、過去、現在、未來が含まれてゐる。卽ち昨日は過去であり、かくしてゐる刹那は現在であり、明日は未來である、この過、現、未三つの中にまた、三つのものが含まれてゐる。卽ち三三が九となり、この九を纏めたもので一つ、この一つを先きの九つに加へれば、十世になる。この頃、新しい眞理とか新しい女とか云ふが、これは畢竟意識にあらはれたものを、便利上新とか舊とか云ふのであつて、眞理の上には、元來新舊はない。進化といふことも、畢竟變化で、大體からいへば、毫も進化するもので無い、古いも新しいもない。この道理から云へば、吾々がこゝに居るといふことは幾億年前から現存してゐたに相違ない。又吾々が今日刹那の間に思つてゐることは、又幾億年後にも現存してゐる。過去も未來も現世の一念に存してゐる。この一念は、過、現、未の總てを總括してゐる。一念、卽無量劫ともいひます。この劫といふ字は、算盤の上にも用ふる字であつて、長いことを意味する。先日謠曲の師匠が來て羽衣の謠に『君が代は、天の羽衣、まれにきて、撫づとも盡きぬいはほぞと聞も妙なり東歌』とある說明を求めた、これは、佛敎經にある譬喩で、其の譬喩は、或所に四十里四方の大石がある、その上に三年に一度天人が天降つて來て、その柔い輕い羽衣で、ちよつと撫でて去る。その撫でて撫でて撫で盡した時を一劫といふ。劫には大中小の區別はあるが、兎に角、劫とはこんなものである。宇宙のことは到底、算數の外にある。一念はいつまでも盡きないのである。

明の智旭といふ僧は、陽明學に精通し、天台の敎理を究め、更に自ら淨土敎を信奉したが、此の僧は、一切經は、吾人一念の註脚に過ぎないと喝破した。心といふものは大なるもので、心の中に、宇宙を包含することが出來る。

夫の馬鳴は、自心起信、直信自心と云ひ、又王陽明子は、南鎭に花を觀た時、斯く花が

美麗に觀えるのも、心が存するからであるといつた。こは唯心哲學としても、多少議すべき所もあるが、兎に角、この心の廣大無邊であることは、如何なる學者も非認し難いであらう。次には一多相容不同門、これは隨分、喧ましい議論で、西洋の學者にも一と多について、研究した者がある。桑木嚴翼博士も、一と多とに付いて論文を草せられてゐるとかいふ。一卽多、多卽一、これは成立する眞理である。例へばこゝに金が拾錢あると、壹錢を除いて拾錢のあるべき筈がない。千も萬も、幾億も皆、一を離れて成立しない。乃ち一が宇宙の實在ならば、多は森羅萬象ともいつてよい。多數の中に一があり一の中に多數がある、一と多とは深遠な哲理を含んでゐる。次は因陀羅網境界門、因陀羅とは、帝釋天宮殿につるされて在る無數の珠網で、これは比喩ではあるが、これを假りて、法界の眞理は、重々無盡なることを說いたので、その無數の珠の一つに、黑い點を附ければ、幾千萬の珠にも、亦、一黑點が映る。此の道理によれば凡てのものは、重々に重なり、關聯して、盡くることがない。吾々の思想と雖も、かくの如く重々に無盡であつて、決して滅することはない。因果の方則に當つて違ひはない。此說は十玄緣起の中のわかりやすい所を述べたるに過ぎないが、高尙な譬諭あると思ふ。

儒敎でも太極を言ひ、中庸には、上天の載は聲もなく臭もなくと云つて居る如く、道は意識を超越してゐる。又時處を超越してゐる。であるからお互が、かゝる道に準據して、日常の生活をすれば、至高無上、尊嚴にして愉快である。彼の聖人と稱せらるゝ、釋迦、孔子、ソクラテス、耶蘇の如きは、皆この道に依つて、倫理道德を樹てたのである。であるから、彼等の道は、永久に滅びない。勿論その當時は今日の如く科學が進步して居なかつたから、その道を說いた根本精神でなく、たゞその說明の爲めに、引用したる事物には非科學的で、今日から見て笑ふ可きものがある。此れは枝葉であるから、これに拘泥して、全體を退くる如きは、愚も太甚しきものである例へば、孔子は、迅雷風烈を、天の怒りに歸して居り、程子なども、また爾く解釋してゐる。然し今日では、その雷なるものは、電氣の作用であることが分明になり、その電氣を利用して、電話、電車等、文明人を利益する所が莫大である。獨り孔子に止まらず、耶蘇敎の聖書にも、非科學的の個所が、眼に觸れるが、これは深く追究すべきものでない。崇敬すべき釋迦、孔子、耶蘇、ソクラテスが重んじたる道である。であるか

ら、印度は英領となつて亡びても、釋迦といふ一大人格は永久に亡びない、支那も亦た、革命があつて共和政體にならうとしてゐるが、孔子は支那の國が如何に變じても依然として偉大である。その他、カントの如き、耶蘇の如き、ソクラテスの如き、その身は亡くなりても、その抱持した心は、永久に世を照してゐる、諸君は、どうか、この道、時處を超越する所の道によつて生活せられたい。而したら諸君は、物質によつて、求めらるゝ幸福以上の幸福を味はれることゝ信じます。失禮な申分でありますが、此の二松學舍の講堂は他の學校、例へば高等商業とか、高等工業とかいふやうな學校のそれに比較して、お粗末なやうに感じます。然しながら、講堂が如何ばかり、立派でも、假にそこに道に尊ぶ觀念の人が、充實してゐないとしたならば、その講堂はさほど有り難いものではない、物質的肉欲的快樂は、道を樂しむ心に比すれば、極少さくも憐れなものであります。例へ終身貧乏で、逆境に在つても、後世から尊崇されるやうな、道に依つて生活がしたいものです。

原憲といふ人が、草蘆に貧しい生活をしてゐるのを、子貢が意氣揚々として訪ふて、却つて原憲の爲めに辱められたことなどに見ても、如何に道を守る人の心持が尊いかは解る。猶、儒行篇を御覽になれば、王侯貴人の尊榮にも讓らない所の高い道德家の品格が窺れることゝ想ひます。又彼の「白扇倒懸東海天」といふ詩で名高い、石川丈山の如きもこれである。

丈山は吾國の三十六歌仙に因み、唐人の詩の巧みなもの三十六人を選んで其畫像を狩野某に描かせ、其上に自分が讃をしたものを、楣間に竝べて、六六山人と號し其の堂を詩仙堂と呼び、時の學者を時々此處に招き、道を講じ詩を詠じた。幕府は何とかして、この學者を、幕府に仕へさせやうとしたが、丈山は之れを斥けた。又、後水尾天皇より、彼れの德を聞召され、屢々お招きになつたが應ぜず、

わたらじなせみのをがはは　あさくとも
老の浪添ふかげぞはづかし

の和歌一首を奉つたので、天皇は益々その意思の堅固なるをめでさせ給ひ、畏くも宸翰を賜はつたと云ふことであります。

又鎌倉時代に、明惠上人、一に栂尾の高僧高辨といふ人がありました、此の人は華嚴の造詣が至つて深い人で、われ〳〵が華嚴の敎理を研究する上に、この上人の惠

を受けることも少くはありません。此の上人は紀州の卑しい家に生れたのではあるが、德のおかげで當時の至尊をはじめ、數多の月卿雲客が此の人の敎を受けたので、北條泰時の如き傑物も此の人に師事したのである。又後鳥羽天皇の如きは、非常に寵せられたと申すことでありますし、皇后建禮門院も上人から戒を授かりたいと仰せられ、上人を宮中に召されたる。仍で上人が參候してみると、多くの宮人宮女が並んで、正面の一段高い簾の内には門院が居られ、それと闘を隔てゝ下に上人の座が設けてあり、門院は簾の内から僅に手を出して戒を受けうとせられた、そこで明惠上人が云ひますには、愚僧は紀州湯淺の權守の子であるのに今かく高貴の方に召されるのは、眞に光榮に存じますが、今は釋尊の子弟となり、其の敎戒を持する身であれば、時には神明をも拜せず、國王大臣をも敬せざるあり、それであれば高座に上らずして戒を授け法を說いたならば罪に落ちる、また說かれたものも、罪に落ちると戒められて居ります、愚僧獨り何も、たかぶるのではないが、左樣な次第であり、釋尊の敎に背く事になれば、こゝでお授け致しがたいと申し上げた、門院はこれを聞かれ、お驚きになつて簾の内より出られ、上人を上座に直し、戒を受けられたさうです。

又、德川氏の盛んな時、伊藤仁齋といふ大學者があつた、この人は京都の商人の息子であつたが、學問に志した爲め家庭が衰へた、この先生も貧に安んじ、一向學に志された。ある年の暮近所に餅を舂くのを、子息東涯が幼年の事とて大いに羨み母に餅をせがんだ、乃で奧樣が子の東涯が、非常に餅を欲しがることを先生に告げると、先生は無言のまゝ、着て居られた古羽織を脫して、之を奧樣に渡した、奧樣はこれを典じて餅をつかれたさうです、かやうに貧賤に居ても志を變へられなかつたので、德川氏も仁齋先生の歩くときは鎗を立てることを許したさうです。先生には五人の子があつたが、それ〴〵儒者として諸侯に仕へた、就中、伊藤の首尾藏といつて、最長兄と最末弟とが優れて居たと申します。その末子の蘭嶋が初めて紀州侯、今日の德川侯爵へ召されて上つた、其頃の紀州家の勢は大したもので、飛鳥をも落すといふ程でした。蘭嶋が參候してみると大廣間に家老以下のものが列び上席に紀州侯の席があり、それに對し最下に蘭嶋の席が設けてあつた。蘭嶋席について、默然として一語をも發しない、そこで家老及び臣下の面々が皆、これは蘭嶋身卑

賤に育つて、今日この立派な所に出たので臆して語が口より出ないのであらうと思ひ、汗を握つて見て居ると、依然として口を開かないので、役人が早くと勤めると、蘭嵎はおもむろに云ふには、某、卑賤な者であるが、今説く所のものは聖人の道である。然るに恐れ多いことではあるが今候には、褥の上に坐し、最高の座にありて、講義を聽かうとする、これでは講義を始むるも如何かと思ふと述べた。これを聞かれた紀州侯は大いに驚いて、その褥を取り去つて、殆んど同席の如くにして謹んで聽かるゝことになつた。するといよ〳〵蘭嵎が講義を始めたが、その音吐高亮にして、その辯論も、立板に水の如くであつたので、並み居る家老以下の面々大いに讃嘆して措かなかつたと云ふ、學者はこのやうに威嚴を保ちたいものである。

今日の學者は、如何かといふに世俗の爲めに道を枉げ、黄金の爲めに節を變ずるもの、比々皆然りといふ有樣です。獨り學者といはず、國政を料理すべき政治家にしても、どうも斯の道を重んずるの念に乏しい。これは憂ふべきことである。諸君は世を擧つて迂遠とし、陳腐としてゐる所の道を、朝夕に講じてゐられるので誠に喜ぶべきことである。婆娑論といふ書物の中にこんな面白いことが書いてあります。それはかうです。或る深山に猿が五百疋棲んで居た。其の猿が四百九十九疋まで鼻が無い。タツタ一疋完全な猿が居る、そこで四百九十九疋の猿めが、此の完全な猿を見て、アレは不具だ、鼻が附いて居る。毎日キー〳〵と言つて非常に苛める、苛めらるゝが奈何せん、一疋と四百九十九疋であるから、衆寡敵せず默つてる。所が或る神樣が出て、これ〳〵貴樣等はいかぬ。完全な鼻のある猿と云ふものは、是は當り前の者である、却つて貴樣等が不具なものだ。それであるから自今以後、此の完全な猿を帝王とも仰いで、貴樣等仕へて宜からうと、それから自覺して了つて猿めも遽かに騷ぎ出して、我等は不具なものであるから、鼻のあるものに仕へんければならぬと言うて、澤山御馳走を取つて來たり何かして、其の猿を帝王の如くに仰いで皆仕へたといふ話である。この四百九十九疋の猿のやうに、世間は大抵、道を尊ぶもの德に志すものを迂遠としてゐるのである。

要するに諸君は、地上で不遇であることは、決して憂ふることでない、憂ふ可きは、道に依らない生活をすることであると自覺して、いよ〳〵斯道を發揚體現して生活されることを希望します。

昔し、印度に鏡面と云ふ一人の王があつて、ある時、生れながらの盲人どもを集めて、汝等は象と云ふものを知つて居るかと聞くと、誰れも知らないと云ふので、それでは今、象を知らせてやると、侍臣に命じて象を將れ來らしめ、衆盲をして手でこれを捫模しめた。其の中、象の鼻を模るものには、これが象であると敎へ、其の他、牙、頭、背、腹、脛、膊、趾、尾と、それ〴〵象の一ぐるものには、これが象であると敎へ、其の他、牙、頭、背、腹、脛、膊、趾、尾と、それ〴〵象の一部分を模るものに、之れが象であると敎へた。後、象を退けて王が衆盲に、象は如何なるものであるかと尋ねしに、鼻を模つたものは、曲轅の如しと云ひ、牙を得たものは、杵の如しと云ひ、耳を得たものは、箕の如しと云ひ、頭を得たものは鼎、背を得たものは、丘阜、腹を得たものは壁、脛を得たものは樹、膊を得たものは柱、膊を得たものは臼、尾を得たものは絙の如しと云ひ、互に他人の云ふところを非とし、各〻自分の言を是として、果ては相爭ふたので、王は大に嘖き出したと申します。

又昔、或る人が或る盲者に、太陽は如何なるものかと尋ね、太陽の形はかゝるものぞと、銅盤を示して、敲いて音を發したら、他日鐘の鳴る音を聞きて、此盲人は、あれは太陽であると云つたので、或る人が太陽はそんなものではない。太陽の光は燭の如きものであると敎へたら、盲人は燭を捫りて其の形を知り、後日其の篇を揣つて、之が太陽であると云つたと云ひます。太陽と鐘と篇とは、非常に違ふけれども、盲人から見ればそれが分らない。宇宙の眞理を人が知り得たと云ふのも、此等盲人達に類しないならば幸である。

斯くの如く宇宙は不可知的のものであるに、世の科學者などが、自家の小我見と小知識によつて、これが眞理だ〳〵と云つて、得々として居るのは實に可笑しい。彼の釋尊の如きは、宇宙を不可知的のもの、不可思議のものと、說かれたのはこゝである。人間の限ある知識で、限り無き宇宙の萬有を窮盡することは出來ぬ。必ず吾々人類の意識を超越するものゝあるのを悟らねばならぬ。斯樣なる問題に逢着する毎に、吾輩は實に歎喜に堪へぬのである。ソハ吾輩の常に研究して居る所の華嚴聖典に、委しく說いてあるからである。華嚴聖典中の阿僧祇品、如來壽量品、佛不思議法品の如きは、明白に宇宙の廣大無邊にして、不可知的であることを說いてある。近來英國の哲學者、スペンサー氏の如きも、哲學上種々研究の末、萬有の絕對的本性、若しくば本原は到底不可知的であると說いて居る。これとりもなほさず、

宇宙萬有の絶對本性は、吾々の意識を超越し、到底不可思議にして、且つ不可言說であることに、歸着せざるを得ないからである。これは眞理の上の事でありますが、修養の方におきましては、孟子も、天下道有れば、道を以て身に殉し、天下道無ければ、身を以て道に殉すと云ひ。又天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行ふ。志を得れば、民と之れに由り、志を得ざれば、獨り其の道を行ふ。富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず、此れを之れ大丈夫と謂ふと、いつて居ます。私は諸君に斯かる大丈夫となられることを希望して止まないのであります。而して猶、諸君は今日、最も結構なる時期に生を享けて居られると申したい。卽ち今日の日本は、東西の學理を一緒に研究することの出來るのである。而して上には、萬世一系の　天皇を戴き、天照大神の神勅を奉じて宇宙統一の使命を遂ぐべき志を立つべきよい時勢である。諸君は道によつて、大いに精神的大事業を成し遂げられんことをお勸め致します。

二五、眞理は永遠の勝利者たり

吾人々類は、素と宇宙の最高實在者たる神を憧憬し、また其の神と合一せんと欲するが故に、世界の永久平和を希望す、而して平和は眞理であつて、戰亂は非眞理である。吾人は本著の前章に於いて、吾人の眼に映じたる世界の變局につき論辯した。然かるに世の論者、殊に哲學者宗教家までが、何れも皆、戰爭の止み難きを論じ、又或は戰爭を讃美する者さへある。彼等の多くは曰く、人の本性からすれば、由來人類は戰爭を好む者である、否、戰はねばならぬやうに出來て居る者であると。けれども、原始時代の人類は未開野蠻で、戰鬪を好み、戰鬪によつて他を征伏したのであらうが、人智の進歩發達し、人道の重んずべきを解する樣になり來つてからは、平和を希望し、戰爭を厭ふやうになつた。彼の戰爭を讃美する者のごときは、人類を他の動物同樣に取り扱ふ結果より起る議論であつて、人類を人類として見る、崇高なる理想から出た議論でないと思ふ。一體何故に斯ういふやうな謬見が現はれるのかといへば、先づ哲學者や宗教家の見る所と、政治學者や政治家の見る所と、大

體此の二方面から觀察して見る必要がある。哲學者や、宗教家の見る所と、政治學者や、政治家の見ると所とは、多くの場合、常に相反して居る。即ち哲學者や宗教家は、國家的觀念を唱導すると同時に、又普遍的觀念をも唱導し、世界の人類をして、悉く人道を尊重し、俱に永久の平和を希望し、獨り我が國家を愛し、我が國民を愛するに止まらずして、全世界の國家を愛し、全世界の國民を愛するのが、其の立場である。然るに政治學者や政治家は、これと全然相反して、單に唯我主義若しくば弱肉强食、他を愛するより、己を愛するによつて、國家存立の原則として居る。これは彼の政治學者の主張する政治上の道德を高め、國と國との交際を親密ならしむべき、國際公法に違反し、又神が人間社會に降したる教則とは、絶對に背戻するのである。彼等世界各國の帝王及び主權者が、此の一視同仁の宗教を遵奉しつゝあるにも拘はらず、國土の擴張を企て、自國の發展のみ企圖してゐるのは、大なる矛盾と認めねばならぬ。即ち人類の同等を期し、世界の平和を冀ひつゝ、唯、己れが國を富ませ、己れが民を利せんとする自家撞著を責めねばならぬ。これを時勢に迂なる一種の空論といはば、それまでゞあるが、深遠なる哲學を研究し、尊嚴なる宗教を奉じ、慈悲博愛を念とする者の見地からは、見逃すべからざる大問題であらうと思ふ。

或者は謂ふ、戰爭の如きは、人類の免るべからざる所のもので、寧ろ世界の進步發達を促すべき唯一の方便である、故に戰爭は決して罪惡でない。吾人は常に絶えず戰爭を爲しつゝある、戰爭をすれば、必ず勝利を期さねばならぬ。これに依て益々人智は進み、世界は開發せられるのであると。こは普通の進化論者や、政治學者の議論で、一應は道理のやうであるけれども、其の實、極めて御都合主義の甚しきものであつて、到底吾人の首肯すべからざる謬見である。然るに此種の論者は更に謂ふ、毒藥を服して自殺するものがあるからといふて、毒藥に罪もなければ惡もない。戰爭も亦これと同じで、戰爭其のものは、罪でもなければ、惡でもないのであると、此に至つて如何に其の謬見の笑ふべきかを知る。吾人は如何なる場合にも、戰爭は罪惡なりと主張するに躊躇せぬ、換言すれば、戰爭とは罪惡の代名詞である。

由來人類には精神界と物質界との二があつて、戰爭の如きは、物質界の惡結晶であり、呪ふべき惡現象である、然るに今の學者中には、臆面もなく平和の戰爭を云爲するものがある。平和は實に平和であつて、戰爭でなく、戰爭は到底戰爭であつて、

又平和ではない位のことは、自明の道理である。然かも平和と戰爭を混同するは、猶ほ病人と健康者を一緒にするより以上の迷ひ方である。精神界の勢力主義は物質界の戰爭と同じものではない、これは高尚なる活動であつて、此の活動を平和の戰爭などと稱するは、甚しき謬見であると思ふ。

彼の萬國平和會議は、何がために生じたのであるか、徒らに多くの生命を害ひ、財産を失ひ屍の山を積み、血の河を流し、國家を動搖せしむることの罪惡なるを憂慮し、世界各國協贊の下に組織せられたものではないか。斯くの如く戰爭を未然に防ぎ、平和を將來に期して居るにも拘らず、今次の如き世界の大戰亂の起つたのは、元より人道に戻り、互に唯我主義を遂行せんとするからである。然るに斯かる罪惡なる戰爭を讃美する論者のあるのは、實に悲しむべきである。曾て歐米の或る學者は曰く、『戰爭をして人を殺し、人の國を奪ふことを許すならば、寧ろ欺騙して掠奪した方が、却て穩和で人情にも近い手段である』と。假に吾人が、此の二つに一つを選ばねばならぬとすれば、吾人は忍んで此の巧みなる手段に依て取る方を選ぶ者である。人を欺いて財寶を掠めることの、兇器を以て財産を奪ふに勝るのと同じである。戰爭の厭ふべく、呪ふべきは、此を以ても、推知せらるゝではないか。

斯く云へば、論者或は更に云はん、古來文明國が、野蠻國の爲めに滅ぼされ、また文明人が野蠻國のために打負けしは、歴史の上に明らかである。然るに自分獨り慈悲博愛主義を守り、自國のみ人道を重じ、正理公道を守つても、他人又は他國が然らざる時は、常に他人又は他國の後に立たねばならぬではないかと。これは吾人の主張を誤解せるの甚しいものである。吾人は決して一人、又は一國を指すのではない、世界の人類、世界の各國に向つて論ずるのである。少なくとも、最近の萬國平和會議に列席し、幾んど百數十日間も、世界の平和を論議した、四十五箇國の主權者に對して論議するのである。

吾人が敢て斯かる說を公にし、精神界の大事を絶叫しても、禽獸界にも等しき惡魔の横行する今日の世界に在ては、吾人の說に耳を傾ける者が、或は無いかも知らぬ。けれども眞理は永遠の勝利者であるから、吾人は吾人の一代を貫く所說として、止むべきではない。或は二代三代、乃至數十代を貫いて、此の所信を繼承せしめ、永久の平和と、世界の安固を圖らねばならぬのである。

昔、支那の學者は、彼の有名なる伯夷の行爲を頌して次の如く云つた。

士之特立獨行、適於義而已、不顧人之是非、皆豪傑之士、信道篤而自知明者也、一家非之、力行而不惑者寡矣、至於一國一州非之、力行而不惑者、蓋天下一人而已矣、若至於舉世非之、力行而不惑者、則千百年乃一人而已耳、若伯夷者、窮天地亙萬世、而不顧者也、昭乎日月不足爲明、崒乎泰山不足爲高、巍乎天地不足爲容也、當殷之亡、周之興、微子賢也、抱祭器而去之、武王周公聖也、從天下之賢士、與天下之諸侯、而往攻之、未嘗聞有非之者也、彼伯夷叔齊者、乃獨以爲不可、殷既滅矣、天下宗周、彼二子乃獨恥食其粟、餓死而不顧、由是而言、夫豈有求而爲哉、信道篤而自知明者也。今世之所謂士者、一凡人譽之、則自以爲有餘、一凡人沮之、則自以爲不足、彼獨非聖人、而自是、如此……若伯夷者、特立獨行、窮天地亙萬世、而不顧者也。

と、この確信があつてこそ、始めて眞に一代の師表ともなり、又萬世の標準ともなるのである。苟も眞理を愛し、仁以て己が任とする者が、紛々たる世の毀譽や、區々たる人の褒貶を氣にしてはならぬ。

吾人は曾て一宴會に列して、其の同席の一人から、京部人の評を聞いたことがある、曰く、京都人は柔弱で、男の言葉も女のそれの如く、誠に意氣地なく、實に京都には昔しから人物は出ない、京都人は爲すあるに足らぬと。吾人はこれを耳にして、倩々と考へた、成る程京都の人は柔弱で、男の言葉も女のそれの如く、男兒らしくないかも知らぬ、然しながら、靜かに思へ、其の京都にも、昔しから大人物も顯はれ、驚くべき事業家が生れ、更に尊ぶべき大才が出たのである。近き維新の際にも、三條公は如何、岩倉公は如何、申すも畏きことながら、明治天皇陛下も亦た京都に降誕あらせられたのではないか。柔弱の國が必らずしも柔弱の人を生ずるとは限らぬのである。

これは啻に一京都と、京都人のみの問題ではなく、古今東西の歴史に徵しても、明かなる事實である。卽ち國がつまらぬといふ故を以て、必ずしも偉人傑士が出ぬと斷定するのは甚だ早計であつて、たとへば、古の文明國たる希臘の今日はどうである、實に昔しの文華はドコやらへ去り、云ふに忍びざる有樣ではあるけれども、其のギリシャには、錚々たる偉人が現はれたのである。雅典はどうか、其處にはソクラテース出で、アリストテレース生れ、而して世界的名士の多數者を出したにも拘

はらず、現在の雅典は、孤城落日の觀を呈して居る又猶太は如何、耶蘇クリストが生れた、其の猶太は、實に見る影もない有樣である、併しながら、希臘にしても亦猶太にしても、其の國々が生んだ、偉人と事業とは、萬世不朽の聲譽を保ち、赫々たる其の令名は永遠の勝利者として長へに大光明を放つのである。更に印度は如何、支那は如何、一は大不列顛國の所領に係りて、屈伸意の如くならず、他は卽ち四海嘲笑の的となりて、世界各强の蹂躪に委する有樣である。けれども、前者はこれ覺王釋迦文佛を降誕せしめ、後者はこれ大聖孔夫子を出現せしめたではないか。飜つて獨逸は如何、古來屢々殺戮を行ひ、人道を無視し、兇暴を敢てし、仁義を紊り、方今は未曾有の大渦亂中に在りて、而かも尙ほ非道惡虐を恣にするといふと雖も、カントの如き大哲は此の國に生れ、ヘーゲルの如き天才は、此處に出てたのである。乃至文人に政治家に、哲學者に、得易からざる人々は、古今多くは獨逸に現はれたのである。斯くの如くして、吾人は國家と其の人物の、必ずしも同一視すべからざるを知る。斯かる立場に在つて、學術道義の上より考ふれば、其の國の如何に拘はらず、其の人を憧憬し、其の人を尊崇せねばならぬのは、明かなる事である。然るに今日の學者と稱する人々の中には、其の人を畏敬すると共に、直に其の國を讃仰し、國家と人物を同一視するの風がないでも無いやうに思ふ。一應は無理からぬことであつて人と故郷の離るべからざるが如く、猶ほ人物と國家とは、相隔つべきものでないやうに思惟する。けれどもこれを哲學宗教の上より見眞理觀上より批判する時に當りては、決して人を以て直に國を上下すべきではないと思ふ。然るに甚しきは自己の立場を沒却し、自我の總てを忘了してまでも、國家と人物を同一視するのは、確に現代の一弊竇ともいふべきであつて、殊に思想界の大問題ではあるまいか。此れの足らざるを、彼れに仰ぎ、彼れの偉大なるに、此れが私淑するのは好い。併かし何が故に我が精神、我が立脚の地を忘却してまでも、此れを棄てゝ、彼に趨るのであるか。吾人は哲學者にして日本人たるのではない、日本人にして、哲學者たるのである。吾人は宗教家にして日本人たるのではない、日本人にして宗教家たるのである、乃至吾人は國務大臣にして日本人たるのではない、日本人にして、國務大臣たるのである。此の主客を轉倒し、次第を錯誤したる謬想は、確に時代思潮の一面であつて、且つ最近に現はれたる疑ひなき事實なのである。

昔、漢學の隆盛時代に在つては、支那を中華と稱して、我が國の文物は、悉くこれを支那に仰いだのである。それ故に、中華と稱するも、敢て當らぬといふでもなかつたが、然しながら、荻生徂徠の如きが、東夷の物茂卿とまで謙遜したと聞いては、寧ろ其の心事の卑しむべきを思はずには居られぬではないか、畢竟自我を沒却するの甚しき者であることは、論を俟たぬのであらう。曾て儒者山崎闇齋は、一日多數の弟子に向ひて、『今日にも、若し中華(支那)より、我が日本に對して、孔子を總大將とし、孟子を副將軍として、數萬の兵を率ゐ、攻め來たとしたならば、我々の如き、常に絶えず孔孟の道を學びつゝある者は、如何なる態度を以て此の場合に處したならばよいであらうか』と問ふた。其の時に闇齋を圍繞して居た弟子達は、此の突梯な奇問に窮して、誰あつて一人之に答ふる者がなかつた。是に於て闇齋は徐ろに儒生に敎へていふやう、『若し不幸にして、斯かる場合に立ち至らば、たとへ平素孔孟の道を學び、其の敎を受けつゝある者と雖も、身に鐵甲を被り、手に干戈を執つて、彼等孔孟を討伐し、孔子孟子を生擒して、我が國家に酬はねばならぬ、これ卽ち孔孟の道である。』と、これを傾聽した多くの弟子は、今更ながら、師闇齋の卓見に驚嘆したといふことである。今日の歐羅巴に起つた大動亂が、延いて我が國へも波及し、其の結果、多年我が文華のために惠澤を垂れた、獨逸帝國と我が國との間には、不幸砲火を以て相見えねばならぬに至つたのは、萬々已むことを得ぬとはいひながら、一旦國交を斷絶した上は、その非道を咎め、愈々我が國光を輝かし、益々世界の平和を永遠に圖らねばならぬ。卽ち動もすれば、闇齋の弟子の如き學者の多き方今に、吾人は屹然として、師闇齋の見地に立脚せねばならぬのである。

二六、現今の社會

今の世は流行の世にして、何事も目先や、毛色の變つたものが持てはやさるゝのである、手近くは最近文華の一現象と稱する、出版界を瞥見しても、其の內容の如何を問はず、著者の人格を論ぜず、たゞ其の題號の嶄新警拔なれば、直ちに世人の迎ふるところとなる、社會を擧げて徒に新を趁ひ、奇に走る傾向である。之を要するに、

極めて低級なる社會の群集が、讃美謳歌するところのものは、大部分不謹愼にあらずんば、極めて非條理の言論にして、殆ど讀むに堪へざる不眞面目のものが多い、乃ち其の著書の題目も、或は醜なる動物や、其の他あらゆる下劣なる表題を付し、たゞ低級なる俗衆の歡心を得るに腐心す、何ぞ端坐して机上に繙くに堪へんや。大抵は皆此の類であるから、何等深遠なる學識もなく、又高尙なる理想もなきの徒が、片々たる閑文字を弄して、人を誤り又世を亂るのであるから、素より其の人格の是非などは論ずるの要はない。然るに斯かる流行は遂に世上一般の風潮となりて、不健全なる社會をして益々病根を增長せしめつゝあるのである。斯かる社會の中に在りて、低級なる時好に投ずるを厭ひ、超然獨立、哲學及び宗教を研究する者の立場より、現今の社會を鳥瞰して、其の弊風を打破せんと欲する者の責任こそ、實に重且つ大なるものである。

由來眞理は恒久不變にして、曾て增減なく消長のないものではあるが、人に依り又時代に依りて、千姿萬態の運用をなすものであり、又從つて其の色彩を異にするのである、而かも色彩の異なるまゝに、古今を一貫し、萬法を總統し、過、現、未を通じて不滅不變のものであらねばならぬのである、故に政治も、文學も、乃至凡ての科學も、皆純正なる哲學宗教を根本として成立して居る以上、恆久不變の大眞理の下に立つことを知らねばならぬ。たゞ時世の變遷に伴ふて哲學の範圍は他に奪はれ、或は心理學といひ、或は美學といひ、又音學といふ、これ曾て皆哲學と稱せしものゝ中に包含せられたものであるが、姑らく變遷に追隨して、時代の色彩を帶びつゝあるに過ぎぬのである。然らば古代希臘の哲學、若くば古印度の哲學を以て、今日の時代思潮として差支ないかといふに、決してさうではない、今日には今日の時代の色彩がある以上其の色彩を帶びたものでなければ、時代の思潮といふことは出來ぬのである。こは人知の進歩に伴ふて免るゝこと能はざるところのものであるが、吾人の見を以てせしむれば、古代希臘の哲學の如きは、耶蘇教の歐羅巴に入るや、忽ちに宗教的色彩を帶び來りたると同樣に、古印度の哲學が、一度釋尊の出現と共に、佛教的色彩を增したのである。西洋の哲學も中古より最近に至る間、カント、スピノザ、スペンサー等の如きが現はれて、其の宇宙觀に人生觀に、各別の意見あるが如しと雖も、其の根本に於ては古代に創唱せられたるものと少しも變らず、たゞ其の

色彩に於て變るのみである。然るに斯かる普遍的眞理を攻究する尊嚴なる哲學も、世の浮薄なる流行物の如く扱はれて、ベルグソン出でゝ新說を唱ふれば、卽ち世人は直に之に趨き、オイケン現はれて云爲すれば、又社會は之に傾到する等、卽ち約言すれば、科學跋扈の結果、哲學の權威は全然喪失して、徒に人心を亂る言論のみ、世人の容認するところとなる有樣である、吾人は斯かる風潮は時代の然らしむるところとして、已むことを得ざるとするも、權威ある哲學、尊嚴なる宗敎の恆久不變なる眞理の爲に悲しまざるを得ぬのである、世人が一時思想界に於ける最大權威の如く思惟せし、彼れオイケンや、ベルグソンの說論も、焉んぞ知らん既に數千年以前に印度に、又歐羅巴に創唱せられたる眞理のたま〳〵新しき形式を以て、繰り返されたるを思へば、卽ち謂ゆる本を忘れて末に走る誹りを免れぬのである。哲學者は一種最高の地位に立つものであつて、通常の學者とは自ら其の境遇を異にするものである、乃ち宇宙なり、人生なりの最高位の學理を攻究する權威者で在りながら、自ら卑下して科學者輩の如く、又彼の婦女子等が時好を競ひ、流行を追ふと同じく、轉た寒心に堪へぬものがあるのである。元來哲學を研究し、宗敎を憧憬する者は、世外に超越し、俗社界と遠かりて、區々たる毀譽褒貶に耳を假さず、如何なる壓迫を蒙るとも屈せず、或は非常識の如く、或は現代と沒交渉にも似たるはど、一身一家を犧牲にして、飽まで哲學の權威と宗敎の尊貴とを把持せねばならぬのである。

凡そ人は所謂パンのみに生くるものではない、飯を食ふ必要があると共に、娛樂も亦必要である、其の娛樂といふ中に就き、崇高なるものもあれば卑近なるものもある、之を總括して藝術とする時には、書も畫も、小說も、劇も、音樂も、皆これ廣い意味に於て藝術品と稱することが出來る。假りに若し人生より謂ゆる藝術を取り去つたならば、社會は如何に無味乾燥なるものとなるであらう。然しながら、今日の藝術と稱するものが、果して皆藝術品たるや否やは、別の問題として論議すべきである、例へば昔時に於ける河原乞食と侮られし俳優の如きが、今日は藝術家として尊重さるゝと雖も近時人格の劣等なる幾多俳優の技藝が、毫も其の典雅秀麗なる藝術的品位を保つこと能はざるに就ても知らるべきである。抑も藝術の神聖は必ずしも一時的多人數の喝采を博するを以て能事とすべきではない、寧ろ小人數なりと雖も、有識者の認識するところとならば則ち足るのである、然るに今日の謂

ゆる藝術は藝術に非ず、藝術家亦其の藝術家と稱するに難いとしたならば、實に藝術の墮落、藝術の衰滅、近代より甚しきはないといふべきである、一例せば、畫家の如き自家入神の作品を出すを忘れ、他人の需めに應じ、金錢の多寡によつて筆を執る、實に幇間的畫工に過ぎぬ。又俳優の如きも或は聖者に扮し、或は豪傑に扮し、又或は帝王に扮し、王女に扮す、各々其の氣分と性格と境遇とに隨順し肯當せねばならぬのである。然るに智者に扮して愚者の擧止を現はし、豪傑に扮して無賴漢の言行を失はざるの類、滔々皆然りといふも過言ではない。是の如くして、藝術の神聖は何處にあるか、藝術家の權威は那邊に存するか、疑はざらんとするも得ぬのである。然るに社會に在りて學才あり、又智能ありとせらるゝ人にして、而かも世の時好に投じ、下層の群に和して、何等一顧の價値なきものをも、時に尊重すべきが如く推賞し、充分未來を有するものをも、黃金の爲めには之を地に拋つが如き唾棄するも、亦飽かざるの徒輩を見るのである。況んや自から高く藝術家と稱する者の世に阿り人に媚び、阿堵物の爲に左右せられ、美色の爲に籠絡せらるゝを咎めるには當らぬのである。此の時に在て深く思ひを藝術の爲めに勞し、社會の前途を案ずる者は、又其の一手段として先づ斯かる弊風の打破に盡さねばならぬと思ふ。然しながら一方生活問題の關聯し來れることを察知すれば、時弊の根柢は或る程度まで詳悉することが出來るであらう。之を要するに、凡百の時事を表徵する藝術の多くが、野卑か淫逸か、然らずんば慘逆か無謀か、極めて低級なる標準に在て、駄文下作を敢てし、些かも思を高遠なる理想に趨するが如きことは皆無といふてもよいので、轉た寒心に堪へぬことゝいふべきである。

豈獨り藝術のみではない、更に甚しきを宗教家倫理學者と稱する者に見るのである。元來哲學或は宗教を研究し憧憬する者は、他の科學者の如きとは自ら類を異にする者であつて、一國の主權者と雖も、哲學或は宗教には服從せざるべからざるものであつて、此に哲學の權威あり宗教の尊嚴は存するのである。然るに動もすれば、高く倫理道德を標榜しつゝ、陰に不倫非德を敢てする者のあるが如く陽に俗社會と沒交渉なるが如くにして、而かも實は世に阿り、人に媚ぶること俗よりも俗にして、功名に執着深く、感情のために動搖する等、其の醜態嘔吐を禁ぜざらしむるものがある。近く此の例證を擧ぐれば、今次の歐洲戰亂に就て見るも、宗教の根

本たる信條に、謂ゆる神の敎に背き天の命ずる所に悖る行爲を敢てし、自國の爲めに戰捷を祈禱することは無理ならぬことゝはいひながら、博愛の神意を無視し、人道の情義を度外し、都合に依りては、表裏忽ちに一變する等、言語同斷といふべきである。又哲學者と雖も、自國の爲めには平生の主義主張も自ら之を蹂躙して慚ぢず。此に於てか哲學及哲學者、宗敎及宗敎家、何れも咸な全然消滅に近きものとなれる有樣である。抑も人生の歸趣たる宗敎が、社會の動亂に依て其の根柢を搖がし、心靈の支配者たる宗敎家が世間の禍中に捲入せらるゝが如き、宗敎の力に依て平和を克復し、又哲學の力に依て輿論を統一することは望んで得べからざるものである。此に於てか哲學も宗敎も有名無實といふの外はない。然しながら吾人は將來眞の哲學及宗敎に依て、世界の精神的結合の日の來るべきを期待して已まぬのである。

夫の謂ゆる平和會議の行はれたるは、歐羅巴に限られたものであることは無論である、其の歐羅巴各國は擧げて基督敎を遵奉する者と見做すことが出來る、卽ち三十餘年前の我が國を回顧するに、帝國大學に於て國際公法を講述せる學者が、平和會議は耶蘇敎國に限りて、他の異敎國は與からずと思惟したものであつた。然るに漸々我が國運の隆昌し來れるに伴ひて、異宗敎の我が國も亦遂に平和會議に列りて論議するの資格を得るに至つたのである、乃ち最近世界の一等國としての我が國の立場は列强環視の裡に在るに至つた以上、これを三十餘年前に比すれば隔世の觀があるのである。然らば謂ゆる平和會議の效果は如何といふに聊かも舊態を改めず、寧ろ弱肉强食の趨勢愈々甚しくして、表に戰爭の不可を論じ平和の希望を述べ、暗に軍備を整へ兵器を造り、益々一は自國の爲めに防衞の道を講じ、一は他國の隙を窺ひて征服の機を待つ等、矛盾も甚しき有樣である。乃ち歐羅巴各國の謂ゆる耶蘇敎國が、先んじて人道を紊り世間を欺きて、以て平和會議、實は戰爭會議の結果を生める以上吾人は尙ほ永く耶蘇敎國の唱ふる平和會議の全權を委托し置くの不安を感ずる者である。卽ち最初の門外漢たりし吾が國は、既に一等國の資格を得たる以上、蹴然起つて主として、眞の平和論を主唱し、且つ自ら之が盟主となり、從來の大弊を一掃し、世界の列强をして心服せしめ得るまでに至らんことを切望してやまぬ者である。

吾人は常に多く抽象的空論をなす者であるとの誹謗を受くるのであるが、然しながら宗教は人生の歸趣にして、哲學は學問の最高權威であるに依て、其の宗教の根柢たる博愛の道に背く事は出來ぬ、又倫理道德の基礎たる哲學の理に悖ることは敢てせぬのである。上、人類相互同愛の事は勿論、下、憐みを無告動物に及ぼすに至らねばならぬ、夫の歐米諸國に在りても動物愛護會の組織あり、又吾が國にも動物愛護會の團體の起れる所以も、決して偶然ではないのである。然るに方今尙ほ未だ國喪諒闇の中にも拘らず、新聞紙の傳ふるところに依れば、世の富豪、貴族、紳士と稱する人々が、山野に田獵し、或は河海に漁取し、可憐なる禽獸魚鳥の狩集を以て、大なる娛樂となす者が多いのである、殺生を以て世業とする者は問はず、何等足らざる所なき者にして、而かも惡むべき行爲をなし、甚しきは女性の身にして、輕裝山に上り田をめぐり、悠々自然を樂める鳥獸を追ふとは以ての外の動作といふべきである。更に吾人をして眉をひそめしむるものは、新聞紙の傳ふる所によれば、九重雲深き邊りに奉仕する人々が、京都雲ヶ畑御料地に於て、猪兎等の狩獵を企てられたことである、こは隨時隨處に行はるゝものであるけれども、吾人をして畏驚せしめたのは、此等の人々が恐れ多くも出獵の途次、桃山陵に參拜したことである、吾人は素と微賤なる者なれども、父母の忌日に當れば、身を清め心を淨めて、展墓禮拜にこそ往け、食肉をしりぞけて謹慎するのが常である、微賤の者にして猶ほ且つ此の心があるにも拘はらず、一世風敎の上に立ち、世人の模範たるべき人々は、持に十分の自重を要すべきことゝ思ふ。

之を大内青巒先輩に聞く、昔、水戸黄門光圀が、多くの神社佛閣を廢毀し、又少からぬ僧侶を還俗せしめたことは、遍く世人の知るところであるが、之を以て義公が排佛毀釋の人の如くにいふは未だ一を知て二を知らざるものであつて、義公は眞に敬神奉佛の大義から封内の漂泊及無用の寺院を廢毀し、併に破戒無恥の僧侶を還俗せしめたのである、中に就て磐舟の願入寺は、本願寺琢如上人の子瑛兼を招き、娶すに公の女を以てしたほどであり、又公の生女が日蓮宗のところから稻置に久昌寺を興したり、別して坂戸の常照寺の如きは創立に就て好話柄を遺してあるのである、卽ち曾て義公がたま〳〵品川東海寺に參詣せられた時に、大德寺の塔頭玉林院住職、仰堂和尙(後に勅して眞智圓應禪師と謚す)といふが、當時東海寺の輪番であ

つたが公は和尚に向つて、大德寺派の紫衣寺を水戸に創立したいと思ふから、輪番の終つた後、和尚に水戸へ來ては貰へまいかといふ慫慂であつた、然るに仰堂和尚は輪番終つて後は京都に歸山して本山詰とならねばならぬに依て、折角ではあるが御斷りを致すといふて固く辭して諾かないので、それでは致方もないと其の場はそれで濟んだことであつたが、其の後義公は西山に隱棲し、仰堂和尚は圓寂し、玉林院は其の弟子の陽岑長老といふが後任となつた此の陽岑長老は曾て本師に隨身して、屢々義公にも謁したことがあるので、曾識の間柄であつたのである、たまゝ〳〵或る年願入寺の瑛兼が京都へ上るといふのに託して、義公は仰堂和尚の弟子の中一人誰ぞ至急水戸へ遣はされたいといふ傳言を陽岑長老に通じた、すると陽岑は早速法弟の敬峯といふを送ることにしたので、程經て敬峯は前記の願入寺に到着した、其の翌日のことであるが、義公は遊獵に出掛けられた序に、自分の女の嫁いてゐる願入寺にも一寸立寄られた、そこで幸ひ昨日敬峯が到着したことでもあり、取り敢へず相見せられて如何でムるかと、住職から請はれた時に、義公は容を改めて、彼は道の爲めに招請した人である、今自分は遊獵の道すがらに相見するのは無禮であるに依て、他日威儀を具へて延見致さうと約されて、其の日は西山へ歸られて了つた、然るに何ぞ圖らん義公は其の翌日から病を得て終に起つことが出來なくなつたのである、さりながら病褥に在つて百事を指揮し、遂に一寺を創建したものが、卽ち佛日山常照寺であつて、これに寺領百石を寄附し、仰堂和尚の遺像を安置して開山とし、敬峯を第二世とした、斯くの如く義公の護法に篤かりしは勿論、別して出獵の序であるからといふ理由を以て、自ら招いた一僧侶にすら憚つて、而かも遂に相見せずに終へたといふ一事を以てしても、義公の人格が如何にも尊く思はるゝのであると。實に義公の謹嚴なる態度は追慕すべきである。

二七、余の仰欽する古聖人の生活

私は私の志す哲學宗教の研究、或は又教育事業の爲めに、終始一貫微力を盡して息まぬものである、それ故に通常一般の人の樣に歲末とか又年頭とか云ふ樣な區

別もなく、不斷の活動を續けつゝあるけれども斯かる多忙なる身にも、新春となれば流石に長閑なる思ひのせぬでもない、卽ち此に改暦に際し、大正四年に因みて、私の常に仰欽措く能はざる、古への四聖賢を擧げ、以て其の生活を略述して自から慰藉し、又此の聖賢の人格と事業とに倣はむと努むるのである。

抑も近來は何事も「新」を追ふことの流行して、哲學にまれ、宗敎にまれ、はた又文學にまれ、其の他の科學も大方は、「新」に趨る傾向である、此は卽ち此の宇宙を機械的に見るものにして、精緻愈々精緻を加へ、巧妙益々巧妙を重ぬべしと雖も、一度之を精神上、或は宇宙を靈動的有機體と見る側に在りては、自然界に於ける花鳥風月の美的觀念が、古今同一にして不變なるが如きは、恰も古くして而かも常に絕えず新しきものである、卽ち徒に夫の外形皮相の「新」を趁ふて、內面根本の眞「新」を忘却せる者とは異りて、新舊を超越したるものともいふべく、謂ゆる精神的の功績の如きものをいふのである、是に於て私が今略述せんとする聖賢の生活は如何といふに、世に謂ふ世界の四聖たる釋迦、孔子、基督、ソークラテースとは異り、或は其の餘りに狹量なるの誹りあるやも知らねども、私の研究する哲學上、又宗敎上に直接關係ある四聖人にして、而かも敬慕し私淑しつゝある人々をのみ選びしなれば、これ亦止むことを得ぬのである。

一　釋迦文佛

釋尊の偉大なることは、今更事新しく喋々を要さない、然しながら、果して今日の世人が、釋尊に對する見解にして、釋尊其の人に適中せるや否やは、一考を要すべきことゝ思ふ、釋尊は印度の一小王國の太子と生れ、他日尊嚴なる王位に登り、天下に君臨せらるべきの身なるにも拘はらず、一旦飜然として省悟する所ありて行乞の一沙門に下りて、遂に哲學的大宗敎の基礎を開創せられたる事實は、或は今日の常識上寧ろ狂的なるが如くに思はるゝけれども、由來天才と狂人は往々誤られ易きものである、然るに我が釋尊は、如何にして其の生涯を全ふせしかといふに、身は尊貴なる王室に出でゝ、而かも先づ萬有を悲觀し、富貴も名譽も逸樂も、一身に併せ領せしにも拘はらず、此等の凡てを抛ちて、超然王城を逃れ出で、或は學者を尋ね、或は哲人を訪ひ、研究多年、遂に一大宗敎を建立し、自らは一王國主の平安に安んぜず、宇宙法界の大統御者となり、謂ゆる天上天下唯我獨尊の理想を貫徹せられたのであ

る、是に於て釋尊は既に權威ある迦毘羅衞の皇儲以上、尊嚴無比なる法身佛陀としての釋迦如來となられたのである、實に釋尊の一生は其の降誕涅槃に至る、一篇の大なる長詩である、印度の詩人はこれを讃美して崇高なる詩に歌つたのであるが、世界を通じて恐らく釋尊の一代ほど詩的なる生涯はないと思ふ、啻に詩的一生なるのみならずして、又哲學的生涯であつた、それ故に又印度の哲學者は釋尊を哲學的に讃美し研究した、若し釋尊が遂に富貴、名譽、逸樂を放拋するに忍びず、大なる希望を抱かずして、小なる王位に戀々して終つたとしたならば、誰か釋尊を讃美し憧憬し研究する者ぞ、然るに我が釋尊はあらゆる物質的慾望と絶ちて、赤裸々となりて世外に出でゝ其の偉大なる人格を作り、高遠なる、眞理を道破したのである、之を今日最も文明の進歩せりといふ西洋諸國の最高位に在る人々に比するに、彼等は入りては禽獸の如き生活をなし、出でゝは領土を擴張し、只管惡魔の言行を逞うするものとは、實に雲泥の差を見るのである、これ私が敬慕措く能はざる古聖の生活中、最第一に特筆する所以である、然るに今の世の學者宗教家特に佛陀の法流を汲む僧侶達を見るに、能く其の一身一家を犧牲にし、眞に宗教家たるに恥ぢざるものは、果して幾人かある、今の所謂宗教家は或は權門に阿り、富貴に媚び、或は世俗の名譽を得んが爲に奔馳し、紫衣を纏ひ金襴の袈裟を掛け、地上の虛榮を滿たすに汲々たり、我が釋迦佛陀は身を棄て、國家を捨て、妻子を顧みず、王位をも拋ちしに拘はらず、其の弟子たるものは、自働車を趨らせ、勅任待遇に安んじ、妾嬖を蓄へ、守塔を荒廢に歸せしむるものが多いのである、青は藍より出でゝ藍より青く、氷は水より出でて水よりも冷かである如く、今日の僧侶輩は僧にして俗よりも俗なるものであるといふべきである。

二　龍樹菩薩

釋迦文佛が涅槃の雲に隱れし後、幾多の遺弟に依りて浩瀚なる經典は大成せられ、後四百有餘年間は小乘佛教のみ盛なりしが、其後五百歲より六百歲の間に於て有名なる馬鳴論師出でゝ大法を說破し、大乘佛教を唱道せしが、其の後凡そ百餘年を經て世に出で、深遠高大なる哲學的大乘佛教を唱道して、世に弘布せしめた者は、龍樹論師であらうと思ふ、故に大乘の極致の功績者として馬祖を措いて龍樹菩薩を述べんとする所以である、龍樹菩薩の一生は、既に斯道の研究者は熟知せるとこ

ろなるが、兎にも角にも婆羅門の徒なりしにも拘はらずして、後省悟して佛陀の敎を奉じ、あらゆる經典を讀破して、釋尊の眞隨を體得し、專ら北方佛敎を唱道したのである、卽ち大乘佛敎の學者が蘭菊美を競ひし時、龍樹は最大權威者として存在したのである、元來、印度より支那朝鮮を經て我が國に傳來せる佛敎の系統を見るに、俱舍、唯識、三論、禪、淨土、法華、眞言等、苟くも彼の道破せざるものはないのである、殊に華嚴の如きは、龍宮に入つて將來せるものといふ說もあれど、別に議論を要することであるによつて、今は姑らく措くとして、龍樹は其の著十地經の論釋たる十住毘婆娑論及び大智度論にも、華嚴を以て不可思議敎として說いてあるほどである、又彼の法華宗卽ち天台宗の如きは、彼の龍樹の道破せる中論を骨子とし、又密敎の如きも、龍樹が鐵塔中より將來せし聖典中より其の基礎を建てたのである、是卽ち釋尊に次で予の敬慕する人格と生活の第二たる所以である、彼龍樹の書著中にある一切空無得の議論の如きも、今日の西洋哲學のあらゆる哲學を含有せるものにして、カント、スピノザ等の大哲が所說も、殆んど擧げて龍樹の中論智度論等に包含せらるゝのである、此くの如く龍樹の功績の偉大なるにも拘はらず、一部の佛學者は彼の功績を認容して、而かも之を重視せぬのである、將來益々古印度の哲學が研究され、哲學的宗敎としての佛敎の價値が、一層確認せらるゝ時節の到來すべきを信じて疑はぬのである。

三　帝心尊者

由來華嚴聖典を根本として之を大成したものは、支那に於ける賢首法藏である、賢首は華嚴立宗の開創者として、其の人格に又其の著述に、偉大なる功績は彼の天台大師に讓らずと雖も、元來佛陀出世の本懷として、將た佛陀一代の說敎の根本法輪たる華嚴聖典を印度に紹介し、之を覺賢三藏が飜譯し、爾來幾多の高僧碩學輩出して、種々の注疏を作りて之が弘通に努めしかど、未だ曾て之を組織的宗敎となしたるものはないのである、然るに帝心尊者卽ち杜順禪師に至りて、始めて之を唱道せしに依て、華嚴の開創者としては、杜順を擧げねばならぬと思ふ。乃ち杜順禪師は智者大師と略ぼ時代を同うし、天台の智者は法華經を根本として、支那の學界を風靡したのであるが、此の時代に於て別に或は法界關門、五敎止觀各一卷を著はして、之に依て大哲理を窮知し得るやうにしたる手際は、最も能く華嚴聖典の深理を

窮盡せしものに非ずんば爲し能はざるところのものである、此くの如く杜順は嘗に學究のみに止まらず、其の高德は遂に唐の太宗が會々病を得たる時、召されて宮中に法を說きて速に宿痾を全治せしめ、又或は太宗に奬めて萬民の勞苦を慰むることを爲し、深遠なる學理を卑近なる言行に詮はしたのである、故に太宗は彼れ杜順を敬て帝心尊者とした程である、之を要するに杜順師が疏述せし一斑を窺ふに、其の著法界關門の如きは、盛に事々無礙の理を說きて、大乘極致の眞理を發揮したのである、又五敎止觀を見るに、佛陀一代の說法を小始終頓圓等、各名稱の下に各〻其の止觀を明かにしたのは、敎相學としては餘りに簡に過ぎ、敎相の正分としては完全ならざるが如きも、他日賢首の如きが、之を疏述して五敎の理を明にしたのである、獨り五敎のみならず、三重觀をも說いたのである、卽ち第一眞空觀、第二事々無礙觀、第三周遍含容觀がこれである、これは華嚴聖典に於ける眞理觀の至極であつて、これに依て亦十門を開きし哲學的宇宙觀は、實に嘆美の外はない、又五敎止觀は第一法有我無門、第二生卽無生門、第三事理圓融門、第四語觀雙絕門、第五華嚴三昧門である、これは華嚴の敎理を學修する人々の實行的方面を示したもので、是れ又精微を極めて居る、是等は皆至相師、賢首師等が其意を繼承し、盛に華嚴聖典獨特の深理を布衍したのであるが、華嚴聖典の大哲理が一代佛敎の中に超出せるのみならず、西洋の各派哲學に比しても、また優に勝れて居る所以を表示して餘りあるものと信ずるである。

四　聖武天皇

吾人は最後に聖武天皇を擧げ奉らんとするものである、抑も我が國に佛敎傳來してより久しく、不世出の大才たる聖德太子に依て、法華、勝鬘、維摩の如き、又淨土敎は弘通せられたのであるけれども、惜むらくは未だ華嚴に及ばれなかつたのである、尤も淨土敎の關係と其他の著書によつて太子が華嚴の敎理をも說かれしといふ說は、恐らくは誤謬であつて、且つ其の著書の如きも後世の僞作であると思ふ。然るに聖武天皇に至りて、翕然として佛敎の宣揚を見たのである、此の原因を尋ぬるに、元來世々の天皇は我が佛敎の大壇那にして、佛敎と皇室との關係は、極めて密なるものであつたのである、卽ち謂ゆる何々院、及び某々法皇等の御稱號は、純然三寶に歸依せられたるは明かなる事實である、例へば宇多上皇の多きは、自ら佛法の

小僧とおとしめたまふたほどである、然るに聖武天皇は國毎に國府を設け且つ必ず一寺を建立し名けて國分寺と爲し、遂に世界無比の大佛を奈良の都に造られせたまひたのである、當時、行基、良辨等、華嚴の弘布に力ありし人々も多かりしと雖も、畢竟聖武天皇奉佛尊信の外護ありしためだといふも過言ではないのである、即ち當時奈良東大寺の內苑に、四聖堂を設け、天皇は觀世音菩薩の化身にして、而かも聖德太子の再來なりといひ、良辨は彌勒の垂化、婆羅門僧正は普賢の化身、行基は文殊の再來なりと、或は神祕的に或は詩的に之を稱したほどである、要するに天皇が佛法の爲に力を盡させられしことは、詳しきは凝然の三國佛敎因緣集に列擧してある、只此に特筆すべきは天皇の尊貴を以てして、自ら三寶の奴と稱せられしは、古來無學なる神道者流及び儒者輩の問題とせるところなるが、私は私の見解を以てするに、二つの見方があると思ふ、而して其一は元來最尊無上なること天皇に超へたるものはないこと勿論である、其の天皇の尊貴を以てしても、不退の信仰を獲得せらるゝ時は即ち自らおとしめて三寶の奴とも稱せらるゝに至つたので、如何に天皇の篤信なりしかを窺ひ奉るべきである、故に敢て不思議とすべきでもなく、況んや之を嗤ふ者に至つては、寧ろその愚を憫むべきである。又其の二は天皇は當初盧舍那佛の尊像を建立せらるゝに當りては、先づ遍一切處の謂ゆる法身佛なるが、我が國天祖大神より尊嚴なるものなきより、即ち行基を始め宮中の臣僚をして神慮の如何を伺ふべきを以てせられたのである、然るに毘盧舍那佛は我が垂跡なりといふ神託を蒙りしより、直に崇高なる大佛建立を見るに至つたのであつて、後說の如くなれば決して大佛を拜したまひしとて、咎むべきではない、是に於て益々天皇の叡智にましましたるを讚仰し奉る、のである同時に天皇の奉佛篤信を云爲する無學なる儒者輩の至愚を嗤ふべきである。

上來の所說は、之を要するに、哲學的大宗敎たる佛敎が、世界に比類なき尊嚴無比なるものにして、而かも其の佛敎の信仰を確立したる古聖賢中、私の常に敬慕し、私淑する四者を擧げて、大正四年の新春に因みて、大要此くの如く說述したる次第である。

* * * * * * * *

私は、平素物質的文明に心醉する人々の淺薄なるを想ひ、想を高遠なる宗敎、哲學、

文學に致してゐる、文學によりて、宗教的若しくば哲學的感想を述ぶるを以て快事とする。昔し魏の文帝の文を論ぜし文を見るに、私の心を動かすものがある、その一節を擧ぐれば、斯うである。

蓋し文章は經國の大業、不朽の盛事、年壽は時有つて盡き、榮樂は其の身に止まる。二者は必至の常期なるも、未だ文章の無窮なるに若かず。是を以て古の作者は、身を翰墨に寄せ、意を篇籍に見はし、良史の辭を假らず、飛馳の勢に託せずして、聲名自ら後に傳ふ、故に西伯は幽せられて易を演べ、周公は顯れて禮を制す、隱約を以て務めずんばあらず、康樂を以て思を加へず。夫れゆゑに、古人尺璧を賤んで、寸陰を重んずるは、時の己を過ぎんことを懼るなり、而して人多く强力せず、貧賤なれば饑寒を懼れ、富貴なれば逸樂に流る。遂に目前の務を營んで、而して千載の功を遺す、日月上に逝き、體貌下に衰ふ、忽然として萬物と遷化す、斯れ亦志士の大禍なり。

と、この言、實に哲學、宗教、文學に志す者の味ふべきものではあるまいか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

獨善主義ナリ
世ニ益スルニ足ラズ
無用ノ人物ナリ

私は、常に古聖賢の道を樂んで、貧苦にも屈せず、人の毀譽にも管せず、人に知らるることを願はない、我を知る者少なければ、我れ貴しと云へる古人の言を信じてゐる、彼の宋王が、楚の襄王に對へるものゝ如き、取つて以て吾人の意見を開陳したものと見る可きである。乃ち

多數ニ知ラルルモノハ是高キ人物ナリ
中皆ニテ太陽最モ高貴ナルモノ
之ヲ知ラザルモノナリ

楚の襄王、宋玉に問うて曰く、先生其れ遺行有るか、何ぞ士民衆庶、譽めざるの甚しきや、宋玉對へて曰く、然り、之れ有らん、願はくば大王其の罪を寛くし、其の辭を畢るを得せしめよ。客、郢中に歌ふものあり、其の始を下里巴人と曰ふ、國中屬して和する者數千人、其の陽阿薤露を爲す、國中屬して和するもの數百人、その陽春白雪を爲す、國中屬して和する者數十人、商を引き羽を刻み、雜ふるに流徵を以てすれば、國中屬して和する者數人に過ぎざるのみ、是れ其の曲彌〻高ければ、其の和彌〻寡し。故に鳥に鳳有りて、魚に鯤あり、鳳鳥上九千里を擊ち、雲霓を絕ち、蒼天を負ひ、杳冥の上に翺翔す、夫れ藩籬の鷃、豈に能く之れと天地の高きを料らんや、鯤魚朝に崐崘の墟を發し、髻を碣石に暎し、暮に孟諸に宿す、夫れ尺澤の鯢、豈に能くこれと江海の大を量らんや、故に獨り鳥に鳳有つて、魚に鯤あるのみならん

や、士にも亦之れ有り、夫れ聖人は瑰意琦行、超然として獨處す、世俗の民、又安んぞ臣の爲す所を知らんやと。

誠に私達の意見と一つである、苟も哲學者たり、宗教家たり、將た文學者たるもの、この意氣なかるべからずである。

二八、大哲ソークラテースを憶ふ

正義を鼓吹し、信仰を宣傳すること七十年、アゼンの荒野に人となりて、主義の爲めに生きんと欲し、自守不動の精神は、遂に身を殺すに至つたけれども、其の名は千秋に輝き、其の敎は萬古に香ばしきもの、我れ之を大哲ソークラテースに見るのである。

彼れは西暦紀元前四六九年、彫刻を業とするソフロニカスを父とし、產婆を業とするフェナリトを母として希臘に生れた、年少くして家業を習ひ、又戰役にも從つて、長ずると共に、詭辯學者が執れる輕浮誇大の敎育法を捨てゝ、專ら自由簡易の主義を標榜して、一意青年の敎導に努めたのである、而かも其の方針は、青年をして自覺の途に就かしめやうとするに在つたが、時代は必ずしも彼れと彼れの主張とを包容するほど寬裕でなかつた、遂に彼れは神を瀆し、人を賊する者であるとの名の下に、罪せらるゝことになつたけれども、彼れは安住不動、泰然として刑に就いた、時正に西暦紀元前三九九年、彼れが終始渝らざる精衷は、斯くして世と相容れられなかつたけれども、其の純潔なる品性と、崇高なる學德とは、共に永遠より永遠へ亙り、世界思想界の大光明となつて輝くに至つた。

顧ふに彼れの內的生活は、其の母の產婆たりしことより學びたること多く、乃ち自ら眞理の產婆たることを以て任じ、人の眞理を發見するは、恰も眞理を生むが如く、且つ他人の補助なくしては、眞理を發見すること能はず、其の謂ゆる眞理の出產に當りて、之を助くるものは、眞理の產婆である、と斯く自己の天職を明知して、一向專心、他事を顧みなかつた故に、身の赤貧を厭はず、家事の何物をも打ち捨てゝ、驀直に其の目的の遂行に努め、斃れて後已まんとする確乎たる決意であつた、是に於て

彼れは心中果して克く此の天職を完うし得るや否やに就て、大に顧慮し、恐懼するところがあつたので、日夜戰々兢々として慾を制し智を研き、德を修め、行を正うしたのである。

斯くの如く、彼れは唯、其の一身の德操を發揮することにのみ努めたとは雖も、敢て國家社會に冷淡なる感情を懷いて居つたわけではない、世を益せんとするには、須らく先づ自己を修養して以て、始めて國家社會を化導すべきであると確信し、終生一市民を以て安んじたのである、然しながら、彼れは祖國の緩急に當りては、進んで奉公の誠意を盡した、乃ち或はポチデアの軍役に、又デリュムの戰陣に、若くばアムフイポリスの出帥等に從ひ、何れも其の忍耐と勇敢とを發揚して、常に衆中に冠絕したと傳へられて居る、而かも彼れは其の勳功に依て賞典を受くることを屑しとせず、斷然之を固辭して平和の時期を待ち、干戈罷めば、乃ち又元の一市民に還りて、只管、自己の天職に從事したのである。

加之、時に商人と語り、學者と論じ、政治家を訪ひ、學校に到り、工場に趣き、苟くも機會あらば之を把握して、知識道德に就て、彼此相較し、以て自己の天職を果し、且つ社の福利を增進することに努めたる彼れが、其の進歩的、希望的、根本的、內面的なる處世法は、職由するところ、本より彼れの高潔純淨なる人格に在ると雖も、就中、其の所說、其の主義をして、速に實現せしめんとする意志の力に外ならなかつたのである、然り彼れが大なる意志の力は、やがて彼れの哲學に於て窺知することが出來るのである。

方今物質的文明に醉ひ、科學萬能に飽きたる歐米の風潮が、思想の反動として、翕然精神生活の甘味に浴せんとして、ベルグソンよりオイクンへ、オイケイケンよりタゴールへ、轉々として思索の逍遙を爲す時に當り、靜に想を二千三百年の昔に回らし、大哲ソークラテースが實證的、歸納的なる哲理を味はんとする、又以て徒爾の業ではないと思ふのである。

彼れが高足クセノフォンは彼れの行業を記して曰く、「人未だ曾てソークラテースの言行に於て、不正なる點を聞見せしものあらず、氏は敬神の人なり、小事と雖も、先づ之を神に謀らずして爲せし事なし、氏は正義の人なり、毫も他人を害せしことあらず、氏は克己の人なり、曾て忠誠を捨てゝ快樂を擇びたることなし、氏は聰明の

人なり、善惡の判斷を誤まりしことあらず、一言に之を約すれば、氏は人類中の最も善良にして、又最も幸福なる人なりし」と、以て彼れが如何に古代に於ける巨人たりしかを察知することが出來る、況んや其の哲學思想に在りては、之を簡單に敍說することは不可能であるけれども、一言以て之をいはゞ、先づ彼れの研究は、批評的歸納法ともいふべきものにして、乃ち歸納法に依て、批評的に事物上普通の點を認め、且つ之れが概念を構造し、以て其の事物に關する正確なる知識を得るの方法である、故に彼れは常に事物は其の概念に因らずして、其の事物に關する眞理を認識することを得ぬと斷言して居る、然らば謂ゆる其の概念とは如何なるものかといふに、彼れは先づ反省を以て其の第一要件とし、眞正の知識を得るには、自己の心的狀態を認識することの必要を說いた、乃ち倫理學にあれ、心理學にあれ、其の的確を求むる者は、必ず反省を以て始め、自己の經驗を他人の經驗に比較し、互に相通ずる所を認めて、以て其の概念を構造せねばならぬと主張したのである。斯くの如く、二千餘年の太古に於て、斯かる批評的歸納法に依て、眞理を發見せねばならぬと說破したる、ソークラテースの見識は實に驚嘆すべきものである。

又彼れは常に智德の合一を主張した、乃ち善の何たることを知りて、之を爲さぬものはないと同時に、不善の何たることを知りて、之を、避けぬものはない、故に人の善を爲さずして、不善を行ふは、未だ善の何たるかを知らぬに因り、其の反對に不善を爲すは、不善の何たるかを解さぬが爲めであつて、善惡の辨は、智の增進に因て始めて眞に了解せられ、此に德の輝きを認めることが出來るのである、故に知識と道德とは同一のものといはねばならぬ、而かも道德に二つはない、德は終始唯一のものであつて、男女老幼の差に因て變換のあるものではない、又時、處、位に伴ふて、異同を見るべきものでもない、謂ゆる之を天地に建てゝ悖らず、之を神明に質して疑ひなき底のものである、然しながら、一歩を進めて彼れが謂ゆる諸德の大本たる知識とは、果して道德と同一のものであるや否やに就て、彼れの所論は單に善に關する知識であるといふて居るやうである、然らば其の謂ゆる善とは何であるかと云ふに、彼れには此の點に於て正確なる論斷はないのである、これ後年に至りて、甲論乙駁、彼れの眞意を捕捉するに苦しましめた所以であつた、又彼れの死後、種々の學派起り、人才出でゝ研鑽之を久しうするも、遂に善とは何ぞやてふ問題に逢着する每

に滿足なる説明を遺さなかつた彼れを憾む次第である、顧ふに彼れにも果して確固たる意見があつたものかどうかは、猶ほ疑問として今日に存せられつゝある、然しながら、之を要するに希臘古代の哲學者中、最も抽象的客觀的の所説、卽ち超世間的なる當時の時代思潮より脫却して、彼れの哲學そのものは、直に世間の道德であり倫理であるとした點に、景仰措く能はざるものがあるのである。卽ち吾人は宇宙の實在、卽ち神の觀念より出でゝ、而かも最も崇高なる實證的顯現となるに至る點に、多大の尊敬を拂ふ者である。

偶々彼れは其の晩年に及びて、メレトス、アニトス、リコの三者に依て、甚しき彈劾を受くることになつた、そは彼れが國敎を奉ぜず、剩へ新神を信じ、青年を蠱賊するの三條を以て、有罪と決定せられたことである、彼れは其の不法なる宣告に服せずして、自ら法廷に立つて正義の爲めと信仰の爲めに、滔々として廣長舌を揮ひ、假令瀆罪金を以て宣告を取消すことを得るとも、却て自ら罪あることを天下に表明するものであるとして、一應は其の無罪を主張して、審判の是非を待つた、然るに判官は彼れが餘りの傲語に激昂して、斷然死罪を宣告したのである、彼れはアゼンスの習慣に從ひて祭船のデロス島より歸還するまで、三十日の猶豫を得たる間、泰然自若として毫も平生と異ることなく、諄々として弟子を敎へて倦まなかつたといふ、時に人あつて彼れに脫獄を勸めたけれども、彼れは違法の行爲を敢てすることを好まないといつて從はず、期に及んで從容毒杯を仰いで死んだのである。蓋し彼れが在世七十年は、迫壓と、貧窮と敎導と、豪氣との生活であつて、之を一貫するのは不遇であつた。然しながら、彼れが肉身は亡びて、枯骨亦空しく、後世に及ぶと雖も、大道洞然として、久遠永劫に滅せざるものがある。これ卽ち彼れが貧家に出でゝ遂に刑に死するに至る間、敎へて倦まず、導くに吝かならざりし、偉大なる精神そのものにして、果然其の精神はプラトーンとなり、アリストテーレスとなり、乃至泰西哲學史となつて、往年頑冥にして大哲を害したる、守舊家輩の如何ともすること能はざるところとなつたのである、彼れは自ら書を著はさず、其の事蹟及び學説は弟子クセノフォーンの備忘錄、或はプラトーンの對話篇に依りて僅に窺ふべしと雖も、最後一杯の榮ある毒酒は、實に彼れの生涯に一層の光輝を增さしめ、其の人格に益々景仰の念を深く感ぜしむるに至つたものである、卽ち彼れの人物及び品性を

約言すれば、彼れは自制、克己、剛毅、熱心、正義等の諸德を兼備し、而して是等諸德の最良模範を世に開示せるものであつて、常に敬神愛國の念深く、不撓不屈の自信を具へ百難動かず、萬死も枉げ得ず、而かも友人に對しては、信義を以て其の安寧幸福を圖り、尙ほ少壯青年輩を親愛したといふ、以て如何に彼れが古代に於ける一大偉人であつたかを察知することが出來る、而して彼れが最後は、是等の諸德をして打成一片、渾然として白玉の如く、高く、清く大なる精神を千秋に遺す動機となつたのである。

二九、世界第一の聖人

予は數々世界史上に於て、聖人と呼ばるゝ人々に就いて研究し、其の德を讃へて、諸所に講話を試みた。今日普通一般に聖人と賞讃せられるのは、釋迦、孔子、耶蘇、ソクラテスの四人である。又此れら四聖以外に、カントや老子を聖人と呼ぶ者もある。謂ふまでもなく、此の人々は悉くその鴻德を衆に施したものであるから、數百年、數千年の後から稱讃されて止まないのである。予は之れに對して、決して異議を挾むものでない。

そして、古來、聖人と謂はるゝものは、皆道德を說いたものであつて、物質上功績ある人は、聖人の列に入れられて居ない。聖人は、どちらかといへば、科學的のことには精通して居ない方である。それは、その當時の科學が進步して居なかつたのであるから、聖人のみ科學に迂遠であつたと云ふのではないが、聖人の所說中には、今日から見て笑ふべき非科學的のものもあるが、然しそれは枝葉であつて、彼等の所說の根柢は仁とか、慈愛とか、博愛とかに存することは言ふまでもない。此の仁とか慈愛とか博愛とかいふものを一に守つて、他の物質的の欲望に惑はない處に、彼等の尊嚴が存する。予は別段進化論で有名なダアウイン、電氣發見に努めたフランクリン、引力を發見したニュートンの樣な科學者、又、英雄豪傑として、尊崇されるナポレオン、ネルソンなどを痛く排斥し、又は呪咀するのではない、これ等の人々の事業や功勞をば、認めることは認めるが、これらの人々を聖人に比較すると、その優劣が大に懸隔してゐる。

又同じ聖人の稱呼中に包まれてゐる人々について攻究する時、又こゝに優劣を認めない譯に行かぬ。尤も公平なる鑑識に從へば、何といつても、釋尊が第一位に居る。他の聖人を釋尊に比べると、殆んど比肩することが出來ない。例へば、耶蘇の、彼れの如くなつたのは、羅馬より猶太が、虐待された事が動機になつて居り、又、ソクラテスの如きも、希臘のソフヒストが盛に行はれて眞に道を論ずる者の無いのに憤激して立つたので、彼れは終始國家的觀念に支配されてゐる。國家的觀念が惡いといふのではないが、何となく狹い。又孔子の如きも、形而下の治國平天下を主唱した、勿論孔子は一方に形而上高遠な理を喜び、易を解明したやうなことがないでもないが、これを釋迦佛陀に比較すると狹い。釋尊は、身、國王の息に生れ、富貴榮達、何不自由なかるべき位置にありながら、之れを抛つて山林に入り、苦業の末、世界卽我、我卽世界といふ立場から、たゞに人類といはず、鳥獸草木、あらゆるものを救濟せうとした。その理想の高尙遠大なる、その人物の卓越優俊なる、他の聖人に比し、甚だしい軒輊がある。一部の論者は釋尊も亦當時印度に行はれた四種の差別階級に反抗して起つたものといふが、決して釋尊出家說敎の大根柢は、そんな小なるものではない、これは余一個の私見ではない、學者の公平なる議論である。

余は、佛敎に關する古今の書物を讀んだが、釋尊の敎理の、宗敎、哲學、文學の方面に廣く亙つてゐて、その深邃な妙味に富んでゐるのに、いよ〳〵驚愕を增すのみである。西洋哲學者に、隨分遠大な、又は高尙な說を道破したものが多いが、到底佛敎の其れに及ぶ可くもない。

然るに怪訝に堪へないのは、この世界的大經典を所持して居り、これを世界に弘布すべき責任のある宗敎家が、眼前の小利小慾に眼が暗んで、俗化して了つたこと形式に拘んで了つたことである。余は此の際、大哲學者、大宗敎家が此の世に出現して、この頽風を一掃し、釋尊の眞意を弘布して、哲學の權威と宗敎の尊嚴を振興せんことを希望する。今日復活の曙光を齎すものは誰れであらうか、昔しは、文仲子、其の門人に答へて云く、汝ぢ人を求めんよりは、汝ぢ自ら其の人となれと、この言實に味ふべきである。

三〇、法然上人とソクラテス

今年は、吾が宗教界の偉人、法然上人の七百回忌に丁れるを以て、聖上陛下には列聖の遺志を繼詔せられ、同上人に、明照大師の諡號を宣加せられたるは、洵に宗教界の爲めに喜ぶ可き事にして、亦其の影響する所も、多大なるべきを信ず。

吾輩、此の聖者が德望見證に就いて、及びその七百回忌に際し、從來の例に倣ひ、熱誠に諡號下賜を乞ふべき旨を、その吉水の法流を汲む人々に勸吉したること數回に止まらず、その意見は載せて諸新聞諸雜誌に在れば、重ねて茲に繰返すの要を見ず、又此聖人を讃美せし文も、同じく新聞雜誌に掲げたり、さり乍ら猶少しく感想を述べてこの聖者を仰鑽せんと欲す。

そは外ならず、日本淨土教の偉人たる法然上人と、彼の希臘の大哲學者として、兒童走卒にも、その名を知らるゝソクラテスとの類似之れなり。尤も此兩偉人は、位置を異にし、出所を異にし、經歷を異にするを以て、兩者に共通の點を見出すことは、なことに困難なれども、この兩者の、當時の周圍よりする、壓迫に對する心事に於て、又その當時の習俗慣例に對して、改革を加へたる態度勇氣に於て、類似せる點無くんばあらず。

抑も、希臘の哲學は、ソクラテスに至る迄は、世界萬象の解剖、卽ち宇宙の實體に付きて研究し、人間行爲の是非問題を閑却したるを以て、一般に倫理道德の念に薄く、宇宙觀に意を注ぐ事の多きに比し、人生觀を疎略にしたるものなるが、一度、ソクラテス出でて從來の慣習を破り、倫理道德に重きを置く哲學を創唱し絕叫し、その影響する所頗る廣く、その弟子また師の敎理を奉じて、四方にこれを弘布し、歐洲哲學界に一新紀元を劃したると。吾が日本國に於て、南都北嶺の僧徒等が、徒らに、高遠幽玄なる學理を喜び、人類相互間の、行動云爲に關して拘泥するを卑近として蔑視し、これを等閑に附し、所謂自力敎の聖道門を說く人は多かりしも、民間の無知なる多數の人々をして、嚮ふ所を指示する、所謂他力敎の淨土門は、殆んど絕無とも云ふ可きばかりに不振なる時に際し、法然上人出でて、從來の學風以外に、他力敎、卽ち、易行道の敎理を立て、平易なる敎を說き、上は萬乘の　至尊より、下は愚夫愚婦に至るまで、安心立命を得せしめんと努力し、其の大信念の重んずべきを知らしめ、その弟

子中より、高僧親鸞を出し、今日猶諸宗、教中に、淨土宗の勢力をして、最も重からしめしとは、その類似點と謂ふべく。又ソクラテスが『余は他人に優る所無し、但、自らの無智なるを知るのみ』と絶叫せしと。法然上人が『われは、これ烏帽子も着ざる男、十惡の法然房、愚痴の法然房が念佛して、往生せん』と喝破せしと、何んぞ其のよく類似することや。又ソクラテスが臨終に際して、『宣告に服從し、金を出して、罪を贖うて、無難に過すは不可なり、贖罪金を出すは、自ら其の罪にあることを認容するものなり』と云へると、法然上人が流刑に處せらるゝ時、『われは、だとひ死刑におこなはるゝとも、わが所說は眞に變ずべからず』と、凜乎として斷言し、寸毫も憂色無かりしと、何んぞそのよく類似することぞ。この二人者は、共に聖人として、永久に仰慕するに價するものなるが、今日一般の人々が、唯聖人の德望功績を讚美するに止まらず、大に法然上人の意志を體して、これを實行實現せざるべからず。當今の想界にも、亦法然上人の如き、また ソクラテス氏の如き偉人の、出でんことを渴望すること轉た切なるを覺ゆ。

三一、親鸞聖人を偲ぶ

本年は淨土宗の開祖法然上人の七百回忌と、眞宗の開祖親鸞上人の六百五十回忌とに際し、その遠忌の法要を營まるゝに就いて、吾輩にも感想を求められた、仍て多忙な身であるが、親鸞聖人に就て多少考へた事を述べる。

而して吾輩は、諸學者、諸宗教家諸君と與に、兩上人を讚美することはするが、啻に讚美するに止まらず、兩上人の意志を繼いで、大に實行的に、教化事業に活動してもらひたい、自分もせうと思ふ。

東西兩洋宗教の優劣。宗教の人生に必要なことは、今更云ふまでもない事であるが、今日は宗教の力が甚だ不振であるかと思はれる。然し東西兩洋の文華に見るに、物質的文明は、東洋が西洋に及ばない觀がある、凡て物質上に於ける、機械の發明などは西洋に一籌を輸して居るが、精神上の事に至つては、東洋が遙に西洋の上

にあると思ふ。さう云へば、西洋最負の人は、耶蘇教などは、佛教などより進んでをると云ふかも知れないが、決してさうでない、彼のギリシヤ、ユダヤ、エジプト等の古い宗教が、東洋の印度から出でゐるに相違ない、印度宗教は日本に渡來しては、既に日本化して立派な宗教となつた、兎に角何にせよ、東洋の宗教が西洋のそれより遙かに上にあることは、爭はれぬことゝ思ふ。

佛教教理の難易兩道。佛教が日本に渡つて、日本化して精神界を支配し、國體を擁護するに至つた、その中には深遠高妙な哲理を說く宗門もあるが、それは學者として研究し、思索に耽つて、その幽邃な趣を、娛しむのには適してをるが、多數の人々を救濟するといふのには適しない。これは龍樹の所謂難行道、卽ち聖道門といふのである。彼の鎌倉時代までは、隨分高尙な宗教が流行し、僧侶は非常に傲慢となり、教理以外に權勢を振はんとした。然るに一度法然上人出でゝ、高尙な哲學的宗教では一般人を救ふ上に功を奏しないことを看破し、淨土宗を樹立し、所謂易行道によつて、世人を救はれ、その弟子からは、又親鸞聖人が出でられて、法然上人より一層簡易に平民的に之を說き、其勢力は、今日に至つて、猶儼として拔くべからざるのみか、益々その光輝をあげんとするのみにても、親鸞聖人の偉なる力を想見することが出來る。

親鸞上人の人格。彼の古人も云つた如く、世を濟ひ人を救ふといふ卽ち出家は、非常の偉人、傑士でなければ能はぬところで、彼の俗に所謂豪傑といはれる人々は、概して肉慾を恣にした我利的人物で、これを偉大なる宗教家、慈悲博愛で世を救はんとし、苦心するものに比しては、小なる者である。然し概して、日本宗教の開祖といはるゝ人は、多くは卑賤から起つたのであるのに、彼の親鸞聖人の如きは、藤原家の貴族より出で、而かも自ら愚禿親鸞といひ、叡山に修學したる後は、煙簑雨笠、東西に奔走して教を說き、世に自分より下劣なものはないと稱し、一文不智の愚夫愚婦をも御同行御同朋と云つて、決して傲慢な態度を取られなかつた。これは誰れにでも出來ることではなく、今日迄衆人の敬仰を受けるのも偶然ではない。

千古の卓見。凡そ宗教家は、釋尊以來、戒律を尊ぶことが非常なもので、法然上人の如きすら、精進潔齋を稱へて、止まなかつたのであつた。然るにその門中より出でた親鸞聖人は、宗教家の嚴禁たる戒律を破却し、肉食妻帶主義を唱說せられた、これ

は實に古今獨歩の大卓見である。詳しいことは述べないが彼の釋迦佛なども、肉食はせられたやうである。餘事はさて置き、眞宗以外の各宗でも、皆今日に至つては公然と肉食するやうになり、女人禁制、肉食嚴斷を掲げた宗派でも、今日は皆女人も公然上げれば肉類をも食してゐる。實にこれ親鸞聖人は六百五十年も以前に將來はかくあるべしと洞見せられたもので、彼の獨逸のマルチンルーテルが、羅馬の古制を破却し、プロテスタントを創立せると比較して、世界に誇るべきである。又吾輩の家は世々淨土宗であるが、亡母は眞宗の家から來た因緣で、幼い時は母より『阿彌陀經』の捧讀や『正信偈』、『三帖和讃』などを敎へられたから、常に親鸞聖人を眞の佛樣と信じてゐた。又亡母から此外に『つれ〴〵草』を敎授された、それが先入主となりて、今日も猶、淨土門の敎理に深き趣味を持ち、又『つれ〴〵草』の感化に依り世のすねものとなつた。右樣の譯で、今日も親鸞聖人作の『和讃』は暗記してをる所も多くある、『和讃』の中に、

たとひ大千世界に、みてらん火をもすぎゆきて、佛の御名をきくひとはながく不退にかなふなり。

と云ふを深く感じ、信仰の上にも、將た事業の上にも服膺して、座右の銘として、有難く思つてゐる。

三二、大哲カントを憶ふ

人類進化の跡を觀るに、別ちて三種と爲すべし、卽ち一は其の原始時代にして、草莽未開、天日高く徒らに野生を照して露堂々、地上の自然亦赤裸にして僅に人聲と鳥語を隔つあるのみ。然るに科學の研究に伴ひて、此に謂ゆる中世時代を生じ、百般の事物漸く發達して、開化の實を擧ぐるに至れりと雖も、然かも猶ほ未だ人文の極致と稱すべきにはあらず、卽ち早晩近代文明の出現せらるべき階梯として、幾多の人材輩出し、諸般の科學發明せらるゝに至りしなり。更に近世時代に及びては、洗煉せられたる科學と、圓熟せる人材とに依りて稍々完全なる文明を築き、剩へ形而上にも亦徹底せる說明を見るに至れり。就中、哲學は人生に於ける最も尊嚴に

して權威ある學問として益々光明を放てり。今吾人の見を以てすれば、哲學は恰も食物中に於ける大牢の珍味の如く、或は之を人に譬ふる時は、他の學藝が通常人とすれば、哲學は以て帝王にも比すべく、洵に崇嚴高貴なること諸科學の上に超然たり。而して西洋に於ける近世哲學の中、最も傑出せる所論は、之をカント以外に求むることを得ず、何となれば、近世哲學はカントを以て其の以前と以後とを區劃し、彼をして明かに近世哲學の覇者たることを立證するに足れば也。大哲カントは近いて此に二世紀に垂んとす、暫らく想を二百年の昔に回らせば、又多少の感慨なくんばあらざるなり。

吾人は固より、深く泰西哲學の知識を有せずと雖も、古代に於て、謂ゆる哲學を一變して、倫理道德の方面に牽着せる、ソクラテースの如きが、人生に於ける其の富貴、名譽、快樂等を超越して、無限絶對なる宇宙の實在と合一する觀念を把持せる、純精神的全人格に、多大の尊敬を拂へるものなり。スピノザの如き亦然り、あらゆる物質的慾望を度外して、終始理想主義の目的を貫徹せる、換言せば神は永遠眞理にして絶對者、最高善として之れに到らんとせる、高貴なる生涯に讃仰の誠意を表して已まざるものなり。然りと雖も、大哲カントが近世哲學に偉大なる色彩を放ち、前人未發の斷案を下せる等、恰も暗夜に月光の懸れる如く、其の光明に於いてカント未前の古代哲學と、中世哲學とを窺ふべく、又カント以後の近代思想を悉知することを得べし。吾人は專らカント研究の餘暇なきを憾むと雖も、而かも此の大哲が人格と所論とを仰慕すること久しく、常に憧憬私淑の情に囚はれつゝあるものなり。彼が出生は實に西暦一七二四年四月二十二日にして、能く八十餘歳の高壽を保ち、此の間一日の如く、深遠なる哲學的眞理の爲に研鑽論究して、遂に一八〇四年二月を以て祖國に歿したり。余は過般東京帝國大學構内山上御殿に於て開催せられたる、哲學會のカントアーベントに列席して、轉た尊崇の念を深くせるものあり、故に聊かカントの人格及び其の所論に對する私見と批評とを試みんとす。

先づカントの哲學上に於ける學説に就て、最も其の特色として見るべきは、ベーコン、デーカルト以來、百年に亙りて論諍之を久うし、而かも嘗て之が批判を敢てせし者無かりしが、經驗論と合理論の結局は、彼れカントに於て始めて之を見たるものにして、吾人は此の一事を以てしても、彼が近世傑出の哲學界の大偉人たりしこ

とを斷言して憚らざる者なり。即ち一切の吾人の寫象は、經驗の結果なりや、又精神の原的所有物なりや、吾人の認識は感覺の所產か、將た純理の表現か、從來此の論諍に容喙せる者と雖も、概ね身を其の何れか一方に置きて、以て公平なる審判者たること能はざりしなり。然るに彼は儼然として之が調和融合を試み、堂々たる解決を下せるは、實に近世哲學者中、優に一頭地を拔ける價値ありとすべし。又夫の哲學史上に於ける觀念論と實在論との論諍は、要するに一は認識の起原、及び其の範圍、一は演繹法と歸納法との應用是れなり、即ち認識の起原及び其の範圍に就て合理論の所說は、吾人の寫象中には感覺に起原せざるものあり。一切の概念は感覺より派生すべからず、何となれば、吾人の認識は普遍性と必然性とを有すればなり、普遍にして必然なる認識の唯一の機關は、理性に外ならずといふに在り。然るに之に反して、經驗論は吾人の認識は、決して經驗の範圍を超脫する事能はず、認識せらるべきものは、必ず感覺的直覺中に供せられたる、現實的のものならざる可からず、故に實在の唯一機關は、感性に外ならずといふに在り。是に由て之を觀れば、認識の起原は合理論を是とし、其範圍は經驗論を正しとせざる可からず。今此等の兩說を結合する時は、畢竟、或る概念は先天的なりとするも、此等の概念は經驗以外の對象に應用せらる可からずといふに歸着す。これ即ちカントの唱道せしところたり。更に演繹法及び歸納法の應用に就て、經驗論者の所說に聞けば、演繹法は知識の新領地を開拓するに足らず、吾人の認識の範圍を擴張する唯一の方法は、これ歸納法を措きて他に求むべからずとせり。然るに合理論者は曰ふ、認識に缺くべからざる特質は、其普遍性と必然性にして、歸納法より獲得せる知識は蓋然的に過ぎず、即ち吾人の認識に普遍性と必然性とを與ふるには、演繹法以外に他に何物もあらずとせり。是に於て吾人は、果して此等の短を避け長を索め得ざるか、又經驗的ならずして吾人の知識を增大する認識はなきか、又普遍性及び必然性を具備する認識はなきか、之を約言するに、如何にして先天的なる綜合的判斷は可能なりや、これ即ちカントが純理性批判の主題たり。

彼は更に超絕的論理學をも唱道し、謂ゆる十二個の範疇を說明せるが、是等の範疇は、收めて四種と爲すべし。即ち時間は經驗的概念にあらずして、現象の繼起は既に時間を豫想すればなり、空間も亦同樣に經驗的概念にはあらず。何となれば、

現象の俱在は既に空間を豫想すればなり、故に經驗が空間及び時間をして可能ならしむるにはあらずして、空間及び時間が、經驗をして可能ならしむるなり。即ち空間は外面的經驗をして可能ならしめ、時間は內面的經驗をして可能ならしむ、是に於て空間及び時間は感覺の豫想にして、感覺より抽象し得たる結果に外ならずといふ、これ其一。次に時間は先天的に必然的寫象なることにして、吾人は時間中より一切の現象を除去すと思惟することを得れども、蓋し時間そのものを除去すと思惟すること能はず、吾人は現象なき時間を思惟することを得れども、時間なき現象をば思惟すること能はざるなり、空間も亦然り、是の故に空間及び時間は、現象の可能的條件と謂はざるを得ず、これ其の二。更に時間は辯證的若くは普遍的概念にはあらずして、種々の時間は唯一の時間の一部分に過ぎざるなり、空間も亦た之と同じ、然るに單に一個の對象より生ずる寫象は、本と概念にはあらずして單一なる寫象、即ち謂ゆる直覺之れなりといふにあり、これ其の三。又一定の時間の大さは、其の根本たる單一的時間と區劃せるものに過ぎざれば、原始時間は無限なりと謂はざるを得ざるなり、空間亦此くの如し、これ其の四。吾人は如上四種の所說に就き、カントの哲學上に於ける效績を認識せざるべからざるが、其の宗教哲學に於ける偉大なる效績は、最も憬仰に値すべきものなることを信ず。即ち彼は明かに哲學と宗教とを分離して說明せず、知識と信仰とを歷然區分せず、最高無上の倫理觀に立ちて一大斷案を下せるものなり。即ち彼は道德的意識の上より、哲學と宗教とを烏瞰し、知識と信仰とを打成せるを以て、特色なりとす。換言すれば、哲學は眞理の問題にして、眞理とは吾人の意識の上に生ぜるものなれば、佛教に謂ゆる三界唯一心の境地に聳起せるなり。然かも古來幾多の哲學者が唱道せるところの謂ゆる眞理とは、時處位の異同に依て、著しき變化を現はせるものにはあらずして、之を絕對の價値なりとして極力主張せるものなり。然るに彼れカントは主觀客觀の兩者を包括して、而かも其の根柢は深く主觀に立脚し、吾人日用の生活に運用して、吾人を措いて他に眞理の價値なしとせり。即ち彼が自由意志を重んぜる所以にして、又彼は內在的に自然を重んじ、同時に人の理性を主とせり。彼が立場は明かに宗教そのものにして、カント哲學の根蔕亦深く此に存せるを見るなり。

以上はカントの所論の一端なるが、轉じて彼が平生の行業を察知するに、八十餘

年の活生涯は多大なる困苦に逢着しつゝも、早く喪ひたる慈母を追慕して、殊に慈母の感化を蒙りし結果、或る一種の宗派に屬し、幼年の頃將來神學を研究せん目的を以て高等學校に入りたり、其の崇高なる人格を作れることは是等に起因せるものゝ如し。是れまた後昆に傳ふるに足るべく、別して其の宗教心の涵養に至りては、彼が深奥なる哲理の產出せられたる基礎として、洩すべからざるところのものたり。而かも彼は終生妻を娶らず、極めて簡易生活に甘んじ、且つ時間的に讀書運動を爲し、必ずしも枯木寒巖の如き禪客風の無味なる學究輩とは選を異にして、彼は學界の最高府に學び、知能を開發して著書を出し、遂に名譽ある博士の月桂冠をも得、大學教授の重任に就き、剩へ藝術にも親しみ、貴夫人等にも交際せり、蓋し居常圓滿なる好個紳士たりし如し。而も彼が一面智的生活の裡には、斯かる情的氣分のありしは、尤も興味深き現象にして、殊に彼の義妹より送れる尺牘中には、明かに此の間の消息を詳記せるを見るなり。彼が終に獨身生活に安んぜるに就ては、多少同情すべき餘地なしとせず、卽ち彼の如き大天才にして、或は戀に泣きしこともありしなるべし、然りと雖も、淸貧なる彼は、其の境遇を情人に語ることを得ず、遂に永く不遇に泣かざるを得ざりしや必せりと謂ふべし。而かも彼が深奥なる所論は、斯かる宿命の境地より顯現せるものに外ならずして、其の近世哲學史上の一革新を劃せるに至れるは、萬人の須知せるところなり。特に余は西洋哲學中にカント哲學の出でしは、恰も印度最古の哲學中より、佛教の哲學出で、遂には高遠なる大乘哲學の顯はれ、而かも其の不振に際して、賢首法藏の出るに至り、これに由つて華麗莊嚴なる華嚴聖典の哲理の唱道となりしと、其の軌を一にせるを見るものなり。又カントの唱道せし十二個の範疇を說けるは、華嚴聖典に於ける十地品の中の十二緣起に酷似し、而して此の十二の範疇を四分せるは、華嚴哲學の四法界觀に似たり、聖者賢首と哲人カントとの對比、敢て不倫にはあらざるべし、又儒教に在りても、孔子孟子を經て、其の儒教の衰微せるを慨し、毅然として起ち、盛に高遠深奥なる理氣の哲理を唱道して、儒教の一大面目を改新したる宋代の朱子の功績は沒すべからず、卽ち支那の儒教哲學に於ける朱子の功績は、又西洋哲學に於けるカントのそれと相似たるものあり。

要するにカントが、西洋哲學者中に在りて、其の哲學界に偉大なる印象を與へ、歸

然として魯靈光の如く、萬古に高く聳ゆるは、最も仰鑽すべきなり。吾人は大哲カントを憶ふて、杳然想を二百年の昔しに致し、轉た感ずる所を敍すること爾り。尙は終に臨みて一言附記すべきことあり、彼は實に哲學及び宗敎の根柢に立ちて一大倫理を唱道し、尙ほ曾て『永久平和論』を著はして、世界の平和を冀望せるが、圖らざりき彼が祖國たりし獨逸帝國は、今や列强と戰端を開きて干戈の中に在り、名著『永久平和論』と相背馳すること極めて甚大なるが如き現狀たりと雖も、吾人は彼が理想の、何れの日にか實現せらるべきを確信して疑はざる者なり。

三三、佛敎學者の使命

一

古來人智のまだ開けざりし時代には、隨分迷信的の宗敎行はれたが、漸次文化の進むにつれ、幾分其の迷信は除却され、眞宗敎の光輝は其の光を放たんとすに至つた。宗敎も他の政治、學術、文藝と同樣、人文史上の必要物として生れたるものなるは勿論なるが、吾人の立脚地よりすれば、宗敎程尊嚴にして、且權威あるものはない。何となれば、學術其の他のものは、社會上なくてならぬ必要物で、また人間の意識の上より云ふも、科學の如きは、社會を益すること、大にして、其の科學の發達進步を喜ぶは吾人と雖も、敢て人後に落ちぬ、然れども學術、政治、法律文藝の如きは、無論生活上必要なるに相違なきも、これ生活上の方便、機械道具たるに過ぎず、從つて何等認むべき權威はない。之に反して宗敎は人心の歸趣すべき所にして、人類の存在を確知し、宇宙の最高理想であり、無上の權威者である。かの學術は、研究的に理智の力によりて進み、其の發展は、吾人を驚かすものがあるが、宗敎は無論理智の力によると雖も、單に理智の判斷にて分析することは出來ない、其の分析や解剖し得ざる所が、宗敎の眞諦であつて、尊嚴にして且權威の存する所である。かく言へば科學者は宗敎が分析や解剖が出來ざるが故に、學術上淺薄なりと云ふかも知れぬが、如何に進步せる醫術も心理學も、人體を解剖し分析し得ても、また說明し得ても、其の生命は如何ともすることは出來ない。生命あるものを徹底的に解剖し分析すれ

ば、直ちに其の生命を失ひ、生命ある其のまゝのものは、如何ともすることが出來ない。宗教は恰も此の如きものであつて、宗教の宗教たる所以、即ち生命の生命たる所以の如く、そこに尊嚴と權威が伴ふて來るのである。

二

東西兩洋に通じて、往古は宗教と哲學とは殆んど一體であつた。科學も心理學も、皆これに隷屬して居た。尤も現今にては各科學互に其の領域を分割して居るけれども、往昔は宗教が主であつて、其の他の學術文藝は皆宗教の臣下の如き觀がつた。西洋哲學も宗教から派生したるもので、近世の哲學と雖も、到底宗教から全然離れることは出來なかつた。然し希臘最古の哲學は、重に宇宙觀に屬して居て其の哲學が人生に觸れず、從て人生觀と云ふものは、殆んど度外視せられ、單に不可知的の宇宙觀に論諍をして居たのである。然るにソクラテスが出でゝ、此の宇宙觀よりも、人生哲學に重きを置きて其の位置を一變せしめた。即ち宇宙觀を説くと同時に、實人生に觸れて、人生觀を唱導するに至つたのである。これ當然の成り行きであつて、森羅萬象中、人間が自己の價値、權威を立てざるべからざるは無論のことで、人間の意識に顧みて、人生觀に觸れざるを得なかつたのである。宇宙の實在、神を論ずるにも、抽象無形のものより、人格的のものを帶ぶるは免るべからざる次第である。

然るに東洋哲學は之に反して居る。素より最古印度の宗教が、其の根柢に勝れたる哲學的思想を含み居るは言ふ迄もない事であるが、印度哲學は、最初より飛び離れて人生觀を説かなかつた。人生觀に基ける宇宙觀を立てたのである佛教以前の哲學が、既に其の通りである。その詩的神話的最古の哲學より、婆羅門に至る迄の宗教が、之を要するに人格的神、即ち梵天を哲學的に説明して居る。而して佛教は更に數歩の高處に立ちて、深遠微妙の法を宣べた。これ等が西洋哲學と既に異れる色彩であつて、東洋哲學の特長である。勿論小乘教の方は、戒律嚴重に規して、精神的生活をやかましく言つたのであるが、大乘教に至つては、大法界を説き、大宇宙を論ずるも、歸一する所は人生觀にある。これ東洋思想が、西洋思想の唯だ宇宙觀より一變して、人生觀に及べると異りて、最初より宇宙觀即人生觀と云ふ説き方である。これは何人も異議を挾み得ざる所である。

三

全體西洋の特長は、萬物を分析的解剖的に說明する所にあつて、東洋は直覺的である。近來かの科學が盛になつて、如何なるものも爲めに左右せられ、所謂科學萬能主義が唱へられた。古來權威ありし哲學の如きも、恰も太陽の輝ける前の氷雪の如くに、其の勢を墜落し、宗敎もまた哲學の如くに、一時は其の信仰を破壞せらるゝに至つた。かくて實驗的科學の前には何ものも跪き、澎湃たる潮流には不可抗である如く、科學に對しては、哲學も宗敎も、殆んど不可抗とさへ思はれた。然れども、科學が如何に進步し、發展はするとも、到底其の力を以てして、尙ほ開拓し得ざる分野がある。典雅幽玄の詩的生活もそれであり、理智の解剖にて不可能なる宇宙觀もあり、高遠深妙の宗敎もそれである。此等の分野は到底科學的知識を以てするも、分析し解剖し得ざるものである。是に於てか、科學萬能主義が、靈的宗敎には、遂には其の膝を屈せざるを得ないことになつた。丁度夢より醒めたる人の如くに、此の精神的生活は、其の勢を挽回して來た。これ誠に結構なることであつて、世界の文華益々其の醇を釀し、乾燥無味、沙漠の如かりし科學萬能主義より人類が醒めて、春花爛漫たる豐艶世界に入つたのである。人類の幸福は此より上ないのである。

四

今や泰西哲學界に於て、科學萬能主義の本源地に於て、精神的生活は高調せられかく變化せることが青年學者の歡迎する所となり、各自競ふて其の學說を採用し、甚だしきは自家の從來の說を拋つて之れに歸向し、それを傳播するに勉めて尙ほ日も足らざる觀を有せしむるが。然し彼等は餘りに遠きに親みて近きに疎き譏を免れざるか。燈臺下暗しとはよく人の言ふ所であるが、現今の思想界は丁度それである。尤も古きを厭ふて新に就くは、人情の常態ではあるが、學問の如き眞理の探求、宗敎の如き信仰の渴望等に於て、新奇を競ふは、未だ賞すべきことでない。眞不眞は時勢によりて變動するものでなく古今一貫せるものである。此の見地よりすれば、我邦の精神上の精髓たる佛敎、佛敎と云つても中には迷信的色彩を帶ぶるのもあり、又種々方便的のものもあるけれども、これを赤裸々にせる眞理觀は古今を一貫せざるを得ぬ、それでこそ宗敎としても、將た哲學としても尊嚴であり、

且つ高遠である。西洋哲學は、宇宙觀に偏して人生觀に疎く、東洋哲學はこれに反して、宇宙觀卽人生觀であつて、今日泰西に於て靈的精神的生活が、科學の上に一頭地を拔きて我が佛敎の說き方に傾けるではないか、而して佛敎は實に東西諸哲學の魁首となる、內容と權威とを持つて居るのである。然るに嘆ずべきは、佛敎を信ずると云ふ人、佛敎家と稱する人も、眞に佛敎を說かず、泰西哲學に耽るものも、我國に傳來せる佛敎の眞理を研究せば、寧ろ此に似て尙ほ淺薄なる學說を喜んで居るのは、所謂古きを厭ふて新に就くのではあるまいか。今日にては日本の學者よりも西洋の學者が却つて精密に佛敎を研究して居る。かくなれば佛敎の眞理は西洋の學者先づこれを知り、東洋の學者却つて、彼より其の研究を聽かざるべからざるに至らざるか、これ大に吾人の反省すべき點である。依之、吾人は尙ほ佛敎哲學なり、また其の宗敎的眞諦なりを獲得して、而して後ち其の價値を社會に紹介するに努力すべき必要あり又其の使命を有して居ることを覺悟せざるを得ぬのである。

三四、フイヒテの誕生日

フイヒテの哲學を一瞥するに、その宇宙觀人生觀に就きて慊らざる所が多く、彼れがカントの思想を承繼したとしても、何だか物足らぬ感がある。フイヒテの哲學觀に就て、ホンの一言批評を加ふるならば、彼れの哲學的思想は、大に印度古代の勝論哲學に似て居るかと思ふ、尙ほフイヒテの爲人は、餘程勝氣な所があり、其の兩親より受けたる血統とか、伯林大學在職中、學說を異にする敎授連と爭論せし事などは兎も角として、彼れは哲學者として好位置を得たる人なるも、餘りに狹隘なる國家的觀念に捕へられて居た、尤も當時の國勢は、彼れをして熱心なる國家主義たらしめたる理由もあり、且つ彼れが愛國心に富み、其の主義を叫びしは寧ろ嘉みすべきことではあるが、純正なる哲學者として哲學的宇宙觀、卽ち普遍思想を要するに係らず、國家主義に偏重し、それが爲め國家的觀念に捕へられて、其の哲學を狹小にしたかと思はれる。尙ほ言へば、彼れは非常に國家主義を主張すると同時に、母

國の爲めに普國と戰ひ、其の戰線に立たんとした事などは、國勢が餘儀なくせしめたとは云ふものゝ、哲學者の態度としては、輕擧にはあらざるか。是れ彼れが其の宇宙觀の廣大ならずして、其の思想の狹隘なる所以なりしかと思はれる。尤もソクラテスや、王陽明なども、從軍した事はあり、敢て戰が好きではなく、國家の爲め從軍するのであるから、其の誠忠は敬すべく、國家主義だと云つても當然ではあるが眞の國家主義を主張すると同時に、更に普遍思想を主張するは、哲學者の本分ではなからうかと思ふ。全體フイヒテの宗教上に於ける思想は、其一生中に二度ばかり變はつた樣に思はれる。其の他倫理學や哲學は、大抵カント哲學を祖述したものゝ、それに多少自己の思索を加へ、色彩を異にしたるものと見ることが出來る。

又彼れがこの宇宙を研究解剖して三個の論を立てた、卽ち彼によれば宇宙は絕對的大我の顯現である、而して吾人は此の絕對大我の權化たる小我であつて、其の他の萬物は皆是れ吾人の小我に對せる非我であると云ふ樣に論じて居る、此の三つの我と云ふことに就いて、思ひ出さるゝは印度の波羅門哲學である、婆羅門哲學には、高等梵天、劣等梵天を說いて居るが、勝論の如きも大我の實質を述べて居るし、而して婆羅門哲學の色彩を帶びて居る小乘佛敎にも、また似た點が存して居る、フイヒテは大我と小我及び非我とを立てゝ、宇宙の實體を說明するけれども、華嚴哲學に在つては、此のフイヒチの絕對我と云ふ者は、頗る其の法身の觀念に似て居る、探玄記には法藏師はこれを眞我と云つて居る、もし其の比較論を試みたならば、一の興味ある一篇が出來ると思ふけれども今はこれを略して置く。

我と云ふことに就ては、哲學上非常なる問題であつて、中論や、唯識論上では、眞理を我と說く、卽ち宇宙間の眞理が我であると云ふ樣に說いて居る。又哲學上から考察すると吾人々類は、人であつて我でない、又我は我であつて人でないとも云へる、然しながら人に非らざるの我を以て、我に非らざるの人に名づけてこれを我とも云ふ。又佛敎の上では、此一の我を二我として居る、卽ち我所と我王とこれである、また五つに分けて論ずることもある。かゝる點より云へば、フイヒテの三つの我と云ふ者も、研究すべき餘地が十分あると思はれる。されば、フイヒテの絕對我と云ふ者は、普遍的のものであつて、これは恰も勝論哲學の、宇宙萬有に周遍する大我と云ふのと、一つであるやうに思はれる、然しながら、もし此の絕對我をして實在

とし、實在卽絕對我とすれば、最早大我の顯現たる小我を立つる要もなく、純對我と小我とを相對的に論ぜず、萬物を非我とする必要はない、此等の點よりしてフイヒテの哲學が、完全ではないと大に思はれるのである。

現今哲學者の一般に唱導する說によると、宇宙の實在を大我と見て、宇宙の萬有たる吾人をすべて小我と見る。大我を絕對的の眞我として、小我は相對的の假我であると立てる、斯くして吾人が努力して、大我に沒同すると云ふ樣に立てるが、此れは大小二我を立てるのであつて、これには吾輩は異論を唱へる。この大小二我說や、フイヒテの三我を立てるは、共に宇宙觀人生觀として、未だ完全でないと思はれる。華嚴の學說に至つては、斯かる二我論三我論なく、宇宙一切を法身、卽ち絕對的眞我と立つる一我論であつて、換言すれば、宇宙卽ち眞我なれば、この他に小我や非我を立つるの要はない。何となれば宇宙は此の如く幾つにも分れたるに一貫して居る。吾人を解剖して見れば、吾人は眞我の絕對無限なる本質で、大我卽眞我、換言すれば法身であつて、此の絕對的實在を自覺するのであつて、最初より二我や三我を區別するのでない。丁度スピノザが神卽自然、本體卽神と云ふたのに似て華嚴哲學には法身卽法界、實在卽法身と說く、卽ち華嚴哲學では、宇宙全體が法身(眞我)の顯現で、これが一多相卽の哲理に由つて、吾々衆生も亦法身の顯現であれば、特更に大小二我や、或は三我を立つるの要はない。で吾輩より見れば、この華嚴哲學の眞理觀は、西歐の諸哲學者が立論する眞理觀よりは、數層秀出して居ると思ふ。であるから勿論フイヒテの哲學に比して完全であると信ずる。されどフイヒテがカントの後を受けて唯心論の發達を促がしたる哲學上の功績は、決して沒することが出來ない。

三五、學者の自重を望む

凡そ人類社會には、人爵的威嚴なるものは、幾等もあるけれども、天爵的に最も尊嚴なるものは學者の位置である、(予が所謂學者とは、重もに哲學者宗教家を指す)古より洋の東西を問はず、大哲學者大宗教家として、世界の人々より千萬世の後まで

も鑽仰崇尊せらるゝ者は、其の時代に在りては、自家の所念を貫徹する爲めに擧世滔々たる間に立ちて萬難を排除したのである、今日吾國に在りても、哲學者宗教家として、社會より多大の尊敬を拂はれ、其の言動は衆人の視聽を聳えしめて居る、所謂名望ある人も少く無いが、其人々の態度を靜に傍觀して居ると、洵に疑はしい點が鮮くない。夫れは此等の學者宗教家は、忠實にして一意專念、渾身の熱血を注いで攻究すべき、自己の職責を他所にして、俗世長に於ける四圍の物質的機運風潮に動搖せらるゝこと、浮萍なるが如くであるからである、斯くの如き態度は、決して自己の識見に依り、一世を風靡する所以のものでない。

往昔は一學理研究の爲めに熱注し、當時の大戰爭を知らず、殊に其の學者の研究室に彈丸の飛來するに及んでも、猶ほ自若として自己の研究を退けなかつた者さへある、然るに今日堂々たる學者として、社會の尊敬を受けてゐる人々の擧動は如何。其の一言一行が、學界を動かすに足るのであるから、今少しく自重して貰ひたい、然らずして彼の婦女子が流行の衣裳を追ひて、邉々然たる如きに倣ふべきは、誠に感心は出來ない。

見よ彼等一部の人士が爲めにする所あつて、大石良雄等四十七士を擔ぎ出して云々すれば、平生自ら第一流の學者を以て據り、又社會よりも、大學者として尊敬せられて居る人々が、爭つて四十七士賞讃に後れまじと先を爭ふ如きは、洵に淺間しく誠に嘆ずべき事象であると思ふ、斯くの如きは表面喜ぶべくして、其の實憂ふべきことゝ思ふ、大學者の權威を其の擧動に於て失墜したものではなからうか、彼の義士の擧は武士道的一美談に相違なく、之れを傳ふのは決して差支あるべき筈のものではない、併し今の世に彼等の所行を適用したら如何であらう、學者は何と云ふであらう、大いなる矛盾ではないか。四十七士が主家の讐を復したことの如き謂はゞ一小事である、斯く云ふと、假令一小事にせよ、彼等が精神氣力を賞揚するのであると云ふかも知れないが、彼等の忠義は、夙に我國民の頭腦に浸潤すること、既に深いのであれば、何も第一流の學者が先を爭つて、或る者の後塵を追ふには及ぶまい、又一流の學者先生にして陽明學の流行に連れ、山鹿素行が流行すれば、直に素行の稱讃に勉め、或は熊澤蕃山に之き、或は二宮尊德に之き、一意世に自己の名を博せんことに努め、井伊大老や、櫻田志士を擔ぎ出す者あれば、直ちに之れに參加して

演說に講演に口を極めて稱讃するが如き、何たる輕卒な態度であるか。

我日本帝國は往昔の日本では無い、世界に於ける日本である、其の大日本國の大學者が、一定不動の確信無く、社會一時の風潮に迎合せんとするやうでは實に心細いではないか。

且つ之れのみならず、一流の大學者にして、知己を千載に覓むる大著述を作るに意なく、一書肆の依賴に應じ、僅かの報酬に流行物を作るに至つてはその平素の修養の淺薄さが窺はれる。

書店の依賴を受けて、時好に投ずる著述をするは、所謂三文々士の所行に屬すべきものである、こんなことをしてゐる學者に、永久的大著述の出來るはずが無い、今日迄の日本の學者に、どれだけの大著述があつた、それらの多くは皆西歐人、或は支那人の摸倣である、燒直しである、たゞ〳〵二三學者の創作らしいものがあるにせよ、それは世界に誇るべき程の內容の充實したものでない。

古來一身を宗敎改革とか、或は一大哲理の研究に捧げ、一代の風潮に抗して、人心を根柢より感動せしめた人々は、實に其の一代は、幾多の辛酸を嘗め盡した、幾多の煩悶を重ねた結果である、激烈なる煩悶苦痛を經て來ない見識に、人を感動せしむる力は乏しい、彼の諸種の講演若しくは講話會抔に聘せられ、其の會が耶蘇敎ならば耶蘇敎徒に阿り、其の會が佛敎に關するものならば、其の僧侶に諛り、或は何々學派、或は某々學術會抔、到る所に媚を呈し、心にも無き御世辭を振蒔く樣な學者達に偉大なる抱負と、堅固なる確信のあらう筈はない、『知我者少則我貴』『君子依乎中庸遯世不見知而不悔唯聖者能之』と云へる如き、古人の金言を、唯小自我の廣告に腐心する、今の學者に味はせたい、否味はせたら渴仰するよりは、却つて厭惡の情を惹起するのが、當然今日の所謂學者達の、眞面目かも知れない。

眞の哲學者や宗敎家は、今後は世界的學者であると自ら任じて、非眞理的狹隘なる學說を主張し、世に阿諛するには及ばないから、斯く〳〵の思想を發表したならば、或る向きから忌憚せられはしないか抔、ビク〳〵もので、心にもなき學說を唱道せず、斷々乎として確信を發表し、世界的學者として立つて欲しい、世界的學者となれば、自から日本の名譽であれば、自己の確信發表に、或る一部の制裁を怖れるやうでは、眞の學者の態度では無い、學者の本領は、そんな弱いものではない筈だ。余は

今日の學者の態度を傍觀して、慨嘆に堪へざるものが少くない、故に聊か玆に其の一斑を漏して、世の所謂第一流學者の一考を乞ふ次第である。

三六、華嚴哲學と中庸

私は、『華嚴哲學と中庸』と云ふ題を、此間東さんが御出で下さつた時に申して置きました、又今朝の新聞紙を見ますると、さう出て居りますが、私は近來著書と學校設立の用務に忙殺されて居ますので、今日御話する事も、考へて居ることが出來ませぬのでありますから、『華嚴哲學と中庸』との歸着點を終りに一寸、述べるだけにして、大體述べまする所は、私が今日研究を致して居りまする『將來の宗教』といふことに付いて、お話致したいと思ひます、併し陽明學會で宗教の話をするのは、些とお門違ひではないかと云ふお叱りを蒙るでありませうけれども、私は宗教といふものは、佛教とか、耶蘇教とか云ふ既成の宗教外、迷信的の者のみでなくて、吾々人類が有する、非常な高き理想、卽ち至上高美なる實在の感念を指したるものと信じて居るのであります、乃ち陽明先生の、心は理なり、理は尊嚴なる良知であると道破せられたもの、是れ取りもなほさず宗教心であると、思ふのであります、ドウカ其のお積りでお聽きを願ひます。

さて『華嚴哲學と中庸』の眞理觀に就ては、其の歸着點は一つであるといふことは是は私は何時か一つ書て見て、大方の教を乞ひたいと思ふて居ります、で詳細な事は、それに讓る事とし、唯今より『將來の宗教』と云ふ事につき清聽を煩したい。

それで、將來の宗教と云ふことは、非常に大切な問題であらうと思ふのであります、唯今學者の中にも、我邦將來の宗教と云ふことに付いて意見を提出せらるゝ人もあるが、その既成宗教に代はるべき眞宗教は如何なる者であるか、將來の宗教として、智識あり、教育ある人間にも滿足を與へる、善美なる眞宗教は、斯う云ふ宗教であると云ふ、具體的のものを提供されない、それに付いて、私は或る新聞に、二回ばかり書いたことがあります、又雜誌に書いたこともありました。

此問題について、お話する前に、少し近來第一流の學者の態度について一言致し

たい。

諸君の如き、道に忠なる、古聖人の道を味ふと云ふ樣な方々は、矢張、私共と御同感であらうと存じます、それは外でもない、近頃吾々が平素尊敬して居る、一流の學者先生の態度が餘りに輕卒であると云ふ事である、元來大哲學者とか、大宗教家とか、大詩人とか云ふ、千載の後までも人の尊敬を受くる者は、世の流行とか一時の毀譽褒貶に心を動かす樣ではいけない、現世の不遇、窮困等に靈臺を煩さず、己れの天職を盡すべきである、然るに今の第一流の學者の中には、時好に投じ、流行を追ふの弊がある、實に學界の爲め嘆ずべきである。

一例を擧ぐれば、一流の學者先生にして、或る者が大石良雄等四十七士を擔ぎ出せば、直ぐにそれを追ふて、或は浪花節語りや、講談師と同じやうに、四十七士の賞讃に、先を爭ふて騷ぐ、成程、武士道としては、四十七士の鼓吹もよいけれども、モー少し上に眼を着けて、其の暇に大哲理の研究でもして、世界の學者を驚かす程の事をして貰ひたい、今日は已に日本の日本でなく、世界の日本である、さう云ふ上に於て世界に誇るべき著述でもする考へなく、ヤレ、井伊掃部頭はドウであるとか、櫻田事件の水戸浪士が斯うであるとか、山師連が騷げば、直ぐに其の尻馬に乘る。大宇宙の研究をするとか、大なる宗教の改革を圖るとか、東西兩洋の哲學を窮盡せんとか云ふ大抱負を持つてゞざる方が、時の流行を追ふて、俗人輩の後塵を追ふ樣では、實に心細い次第である、併し斯く云ふものゝ、俗人輩が是等一流の學者を誘ふから、已むを得ない故かも知れぬ。

昔しは、專門の學理を研究する人々の中には、其の時代に在りて、大なる戰爭があつて、自分の學理を研究して居る室外に、彈丸が飛んで來ても、自若として研究を止めず、戰爭が終つて、初めて人から聞いて、戰爭のあつた事を知つたと云ふ位熱心であつた。慶應義塾の御開山、福澤先生の如きは、一部の學者からは、拜金宗の親玉であるとか、物質的智育の祖師であるとか云はれて居られる、茲にお居での松尾先生なども、矢張、慶應義塾出身の方である、けれども拜金宗でも、物質學者でもない、斯くの如く、日本に物質の文明を鼓吹し、道德以上に金を尊いものゝやうにしたと、誹る人もありますけれども、福澤諭吉翁は、戊辰前から、今後は吾も人も、世界の事情に通じなければならない、それゆゑに先づ英語を研究して、人に敎へなければならぬと

云ふので、戊辰の際、江戸で彰義隊と官軍と戰つて居る時に、芝の新錢座に寓居なされて英書の研究に餘念無く、彰義隊と、官軍との戰爭を知られないで、後日知られたと云ふことを承つて居る、私は明治の學術界に兎に角、一印象を與へた學者は、違つたものであると思ひます。

然るに、私は今の第一流の學者達は、餘りに、輕躁ではなからうかと思ふのであります。尙又我が陽明學の盛んになつて、人々皆良智の尙ぶべき事を解して貰ひたいと思ひます、今日では道義が非常に衰へた、此頃の新聞を見ますと善い事と云ふものが殆どない、首無し事件とか、六人殺しとか、親殺しとか見るも忌はしい記事が新聞の三面を塡めて居る、是等によりて、社會一般の風潮を見る事が出來るであります、陽明學の如き、高尙なる學理が流行すれば、是等の惡行爲は、後を絕つに至るであらう、彼の華嚴の大學者であつた、鎌倉時代の明惠上人といふた方は、皆樣も御承知の如く、北條氏の善政は斯人の敎を奉じた爲めであると云ふ位の智識であつた。此上人の言つて居ることを見ますと、凡そ人と云ふものは、平生讀む書物に注意しなければならぬ、多少妙妹があつても精神を害するとか、倫道を傷ふとか云ふやうなものは一切讀まぬやうにせよと云ふのであります、それは非常に良い、敬服すべき語であると思ふ、此の明惠上人の傳記を見ますると斯う云ふ事を云ふてゐる、華嚴聖典中に釋迦が兜率天に登つて、多くの天人や菩薩を集めて、高大なる說法をして居る章を讀む時は、自分も多くの天人や聖者と列んで、其の側に居るやうな心持になり、身も自から氣高く、他の聖者と同じ樣に化せらるゝと。又私共でも陽明先生が南鎭に遊んで、門人と花の開落を問答された章を讀む時は、吾々も亦先生と共に其の馥郁として花の匂ふて居るのを、今見るやうな心地になります。さういふ次第でありますから、卑猥なる小說、裏店の者が痴話狂ひをするとか云ふ事を讀みますと、矢張それに化せられる。隨分、昔は淨瑠璃本や芝居で心中事を見て情死が盛んになつたと申します、曾根崎心中を、悶れッぽく、色ッぽく語れば、人がそれに化せられる。大阪地方では、其の當時情死する者が多かつたと云ふ。さう云ふ次第でありますから、お互に、聖哲の道を味つて、人を善い方に導かうとする者には、さう云ふ所に注意しなければならぬと思ふのであります。私は常に人樣から、二十世記の物質的文明の盛んになつた時代に、數千年前の華嚴哲學など研究するは、迂で

ある愚であると、笑はれて居る、けれども此の誹謗嘲笑は甘受する、のである。眞理の上から見ますれば、宇宙には古今が無い、三千年も刹那である、幾億萬年前の吾人の理想も、幾億萬年後の理想も、畢竟一つである。吾々の理想は不生不滅で宇宙を一貫して居る。故に進歩と云ふも、或る變化に過ぎない、さう云ふやうに考へたならば、陽明學とか、華嚴學とか、今日そんな事を主張しても駄目だ、それよりも金儲けをした方が宜いと云ふ人が多いけれども、それは大なる間違ひである、古を溫ねて新きを知るでなければならぬ。

そこで宗教と云ふものは、今御話する樣に、非常に大なる問題であると思ふ、故に私は此一生涯を自家の理想とする宗教に委ぬる決心であります。併し乍ら私は人格も小さく、又力も足りないから、迚も親鸞とか傳教とか、空海とか、日蓮とかのやうに、熱烈な形を以て、教團を作る事は出來ぬけれども、私は私として、將來に知己を得られる、一大著述でも致して置きたいと思ふてゐるのであります。

世間には非眞理なる既成宗教を目して、宗教を無用視する學者も多いけれども宗教も矢張、人文史上に顯はれたものでありますから、他の學術と共に退ける事の出來ないのは勿論、科學哲學の上に秀出せる、人生必須のものとして、否、人の精神を支配するものとして崇敬し、又研究せなければならぬ。由來宗教とは、人が佛になるとか神になるとか、或は神を尊敬するとか、恐懼するとか、神の正しき命に從ふとか云ふ意味に、學者間に說かれて居る。けれども私はさう思はない、吾々は各自、天賦尊敬なる靈性がある、孟子の所謂人々己れに尊きものありと云へる如く、至上高美なる實在の觀念、卽ち宇宙の實在と合一するもの、華嚴哲學に所謂一切の現象界差別界を超越して、還元すると云ふのが、宗教の本であらうと思ふ。一部の宗教家は、今日一般に行はれて居る倫理と云ふものは、人と人と相互間に形ちつくられたものであるけれども、宗教は、神と人を同化するのであると唱へて居る。併しさうで無い、吾々人類は自から尊貴なるものを有して居る、彼の天命之れを性と云ふ樣に、自個の尊嚴を自覺するのである、吾々人間は、現象界より彷彿として、美人を天の一方に望むと云ふやうに、高遠なる超意識的の實在である、吾々人類は階級的差別界で滿足し得る者ではない、爵位富貴迚も滿足を與へることが出來ぬ。滿足し得らるゝものは自個が尊嚴なる宇宙の實在そのものであることを自覺する處に在

る、宗教は根本を其處に置いて居ります。

宗教と一口に云ふけれども、宗教の派別が澤山、東西兩洋にある、西洋でも、耶蘇教とか、マホメット教とか、枚擧に暇あらぬ位あります。耶蘇教でも數派に分れて居る、佛教の方でも八萬四千の法門がある、宗派が澤山あるけれども、其の中に偉大なる勢力を有し、多くの信者を支配して居るものは、西洋では耶蘇教、東洋では佛教を推さなければならぬ、哲學では、希臘哲學を始め、澤山の學派がある、東洋でも、支那の孔孟哲學、老莊哲學などいろ〳〵ありますが、宗教として居るのは、佛耶兩教は世界の二大宗教であります、此の二大宗教は、過去及び現在の如く、將來も矢張智識ある教育ある者に滿足を與へるであらうか、實に疑問である、私は今日までの有樣では迚も滿足を與へることが出來ぬと信ずるのである、耶蘇が神の子であると云つて其の他の者は神の子でない、どうしても吾々人間は神の子の教に由つて天國に生れ、天父に服從しなければならぬ。迚も耶蘇と同等になることが出來ない、況んや天父をやである。佛教の方でもさうで、釋迦が王位を捨てゝ、三十にして成道して八十年の說法をして涅槃の雲に入つた、これを學者宗教家が神秘的に、或は詩的に釋迦の一生を說いた、其の法身佛とは、宇宙に徧滿する法界身である。法身佛とは聲もなく息もなく遍一切處の實在であると云ふのである。

此の法身佛に吾々は助けて貰ふのであると云ふので、佛耶兩教とも如何に抗辯しても、之れを抹殺することが出來ない。斯の如き道理によつて、吾々人類が耶蘇なり、釋迦なりに救はれなければ、天國又は極樂にゆくことが出來ぬと云ふやうなことは、どうしても、將來知識あり、教育ある人類の宗教として成立たぬ。耶蘇教でも、耶蘇が十字架上の露と消えた後、其の教が種々に說明せられた。佛教の方でも、釋迦の滅後、色々の學者が出來て、種々に說明し。其れが印度より支那、朝鮮を經て日本にも渡り、多くの宗教が出來て。先づ近く日本で言ひますれば、傳教とか、弘法とか、法然とか、親鸞とか云ふやうな人達が、經文に依つて――大日經によつて、弘法が眞言を弘め。或は中論や法華經によつて、天台大師が天台宗を成立すれば、之れを傳教が皷吹する。又日蓮が法華經に依つて日蓮宗を拵へる。法然、親鸞は、淨土三部經に依つて念佛宗を開く。斯樣に皆な各々學問をして、己れが人の餘喘を嘗めることを嫌つて、別に一機軸を出したのであるからして、他宗を非眞理であると

云ふ。日蓮は法華經を一切經の王とし、天地法界の中に一大圓佛がある、此の佛に救はれるので、それを信ぜぬものは、日蓮の法流を汲んだ者でない、念佛無間、禪天魔と云ふやうに信仰せぬ。禪宗は不立文字と云つて、此心が佛である、同じ禪でも臨濟宗とか、曹洞宗とか、黄檗宗とか、其の祖師に依つて、眞理觀を異にして居る、これは公平な論でない。宗教は總て、祖師の人格に依つて存在して居る、耶蘇の人格に依つて、耶蘇教は存在し、佛教も亦釋迦の人格に依つて、存立せられてゐる。之れを局外者から見たら、眞理と云ふ事は區々になつて居る、それは眞理の歸着點は一つであるけれども、形の上に於て、又行き方に於て、皆な違つて居る、青い眼鏡を掛けて見れば總て青く見え、赤い眼鏡を掛ければ赤く見えると云ふ樣に、吾は日蓮宗である、天台宗である、禪宗であると云ふ樣に、眞理を幾つにも見て居る。元來眞理は新しいもので、眞理は二つはないけれども、新しいものである。原素も六十何原素であつたのが、段々原素が殖えて來た、過去に於て吾々の肉眼で見えなかつたものが、望遠鏡や、顯微鏡の力に由つて種々發見せられた、宗教も既成各派の如く、狹隘なる教權の中に、多くの人間を入れ、その鑄型に當嵌めると云ふことは、決して私は出來ませんと思ふ。

茲で一寸御參考に、各宗で唱へて居る、眞理觀を簡短に述べて置きたい、私は自分が華嚴の哲理を研究して居るから、矢張色眼鏡を掛けて、華嚴が一番眞理と思つて居るとのお笑ひもあらうが、併し華嚴の教理は、比較的に公平であります。華嚴の中に含有して居る一部分を、他の教理が含有して居るのでかく云へる。

例へば、天台教の一心三觀、即ち空假中の眞理觀は、華嚴の理事無碍觀であり。又禪宗の直指人心、見性成佛、彼處に月が出て居ると云へば、月さへ見れば、指に用は無いと云ふやうなのは、華嚴の性起趣入である。法宗の天地萬物は心の作用で、天地萬物は、唯心緣起と說くのは、華嚴法界緣起の初門である。法相宗は法隆寺に僅に名殘を存して居る。眞言の大日如來の智水に、吾々凡夫の心が移り、一つになると說くのは、華嚴の三密加持陀羅尼と云ふものに屬して居る。又律宗といふのがあり。上野東叡山に、天台律の寺がある。彼の阿哞鉢羅婆とかいふ人も此の律宗の釋妙雲師の弟子であると云ふ、阿哞鉢羅婆と云ふ人は、種々不思議を現はすと云ふ事であるが、一向吾々には信ぜられぬ。

話は横徑に入りまするが、一寸序に申上げる、私が華嚴を研究して居るからでもありませうが、阿氏の弟子が、數回、一度阿氏の邸を訪へと勸めに來たが、私は斷つたそれはよく〳〵聞きますと、阿氏を一度でも訪問したならば、直ぐに弟子の帳面に記入せらるゝとのことである、拙者は不肖と雖も、阿氏の弟子になることは御免である、陽明學會の評議員である宗伯も、一度訪問されたら、直ぐに弟子にされたといふ。阿氏は初め華嚴宗の僧の弟子となり、今度は又眞言宗の配下に屬するさうである。眞理の爲めには、此の肉體がどうされやうが、自分の主義信仰を打破る樣では、與に語るに足らない。扨て此の律宗は華嚴の普賢行願品から出てゐる。今申した上野の淨名院の釋妙雲と云ふ人が、七十以上の高齡になるまで、生來、横に寢たことが無い、一日一食で、それでも米を食はぬ、蕎麥粉を喰つて居る、さうして一生涯に地藏菩薩の像を十萬體描く誓願ださうな。今日俗人から見れば、馬鹿々々しいと思ふであらうが、今は既に七萬ばかり出來て居るさうである。此老僧が實に大德な人である、此の老僧の所へ例の阿氏が弟子入をして、法を敎へて貰つて居るさうである。此老僧は曾て、或る伯爵家が上野で葬式をした時、導師にと賴み、三百金を布施すると云ふたけれどもイヤだと斷つた、今日の如く墓を賣つたり、何にかして居る坊さんであつたならば、伯爵樣の葬式で三百金も布施さるゝならば、自ら進んで行くと云ふのであらう。又此老僧に御經を讀んで貰ひ、五十金を香料として持つて行つた人がある、老僧は此五十金で香を買へと云ふ、侍僧は香料としてあつても、他の物を買つてよいと申すと、それはいけない、香料として呉れたものを、外のものに使ふ事は出來ぬ、苟も戒を持する出世間の沙門が、人から香料として呉れたものを外のものに使ふのは以ての外のことだと、五十圓の香を買つたと云ふ、今日の破戒墮落の僧達と雲泥の差がある。身に紫の衣を着し、金襴の袈裟を掛けて居つても、俗人よりも俗なのはあると聞く。

又淨土敎では阿彌陀を立てゝ其の阿彌陀は、超越的のものであつて、それが不可思議、壽命無量、壽命が量られぬ、盡十方無碍光佛で、始もない終りもない、絕對であると說くのは、それは華嚴の不可思議觀である。又耶蘇の天國は、華嚴の兜率天に當る。以上述べましたやうに、各宗派の眞理觀は一言にして申せば、華嚴の敎理中に含まれてゐる。

陽明先生は、理も氣もお說きになつたけれども、人の心を土臺として、唯心論を說かれた。華嚴のも矢張、三界唯心、心を土臺としてゐる、此の點は陽明學と華嚴と一つである。西洋哲學でも、今日では唯物唯心を一元に論ずるやうになりました。加藤弘之博士の如きは、唯物論者でありまし、西洋では、今日はもう既に唯心論者の方が、勝を制したけれども、矢張唯心とか唯物とか云ふ立場に立ちまするとと、唯心的哲理、唯物的哲理といふやうになつて反對的になる。陽明先生の學派では、總て元に還らなければならぬ、元とは心である、さうして見ると、今日でもまだ、唯心と唯物と二樣に論じてゐる學者もあるけれども、已に陳腐である。華嚴哲學で稱へる唯心論は、超意識的である、想ふに宇宙には吾々の意識を超越したものがなければならぬ、併し廣大無邊なる宇宙であつても、研究する上からは、吾々の心を離れて、天地萬物が無いのであります、心の上から見れば、意識を超越したものが、宇宙に存在してゐるのである。華嚴の哲學は此の說き方は、西洋の哲學よりも秀出してゐる、華嚴學では、此心を明鏡に譬へてゐる。陽明學もさうであります、陽明子は、心は明鏡の如しと言はれた、善惡を超越して居る。吾々の善惡と云ふのは、果して善であるか、惡であるかと云へば、一考しなければならぬ。人を殺すのは惡事であるけれども、戰爭の時は敵を殺す。自分に害を爲す者があれば、正當防衞、法律で許してある、けれども、それが果して善であるかと云へば、善と言へない、是は差別的善惡であります。

吾々人類社會に於ける差別的善惡は、吾々の常識に依つて極めるものであつて、善とか惡とか云ふものに色々ある。こゝに極貧窮なものが、自分の苦しさに、僅かの金錢を盜みたりとすると、忽ち法律上の罪人とし、縲絏の羞を受けねばならぬ、人の物を盜み取るといふ事は、罪事には相違ないが、その事情は洵に憐れむべきものがある。然るに又これに反して、身は高位高官に在りながら巧みに法網を潛つて、大なる惡事をなしつゝあるものがあつたとすれば、これは前者に反して法律上の罪人とならないから、善人の如く天下を橫行濶步してゐる、前者果して惡人で、後者果して善人かといふに、之れを道德上、倫理上からみれば、後者の方が前者に比して餘程大罪人のやうに思はれる。常識的で一般に善惡の名稱を附するものを、所謂至善の境地から見れば、それは善でも惡でもなくなるのである。王學の方でも差

別的善惡を見ないで、直ちに至善に據つて見る可しと立論するのである。我々人類には、一種靈妙なる氣、卽ち良知がある、これに據つて進み、これに背反しないやうにせよといふのが眼目である。華嚴哲學の方にても、亦かやうに說くのであつて、王家の說と嚴家の說と一致する。陽明先生は、心は明鏡の如くと云はれた、鏡は美醜善惡を選ばず、或は花鳥或は泥濘、或は惡漢或は聖賢と、そのいづれたるを問はず、平然と映ず、換言すれば、鏡は美醜惡善を超絕して居る。われ〳〵は平素常識的差別的善惡に慣れてゐるが、進んで、至善によつて宇宙一切の事を見る時には、其の趣きが渾て眞善美を具備した、玲瓏たる結晶體である。われ〳〵人類は、蕞爾たる地球の中に生息するもので、常識的に善惡を差別してそれに甘んじて居るものが多いが、宇宙の廣大なる意識、善惡を超絕した心といふもので、判斷するやうにしなければならない。この意識この心を、華嚴哲學では、法界性といひ、陽明學では良知といふのであつて、これは彼の西洋哲學が唱道する唯心哲學と、一見頗る類似してゐるやうであるが、よく玩味攻究すれば、彼等の唯心哲學よりは、遙に秀出して居るのである。吾々は無頓着に西洋に流行する唯心哲學其他を崇拜し攻究するよりも、先づ東洋の學理を研究し、それを西洋の學者に敎へる方がよからうと思ふ。物質的の事、卽ち機械工業等の事は、彼れに一日の長はあるかも知れないが、高遠なる精神的學理に至つては、決して讓步すべきものでない。特に陽明學、華嚴學に至つては實に世界の精神界に誇るべきものであつて、これは唯に私一家の見ではないのである。

而して陽明學の方は、此處に御列席の熱心なる方々の御研究を願ひたいが、一方華嚴學に至つては、不肖乍ら私畢生の志願として研究もしつゝあれば、それを世に顯したいと心掛けて居る。

こゝで一寸又序に申上げて置きたいのは、佛敎の方で尤も深遠なる哲理を說く所の、彼の天台の敎理は、西洋學者の唯心說とよく似て居る、其の說ではわれ〳〵の栖息してゐるこの地球の上に、善のみが實在してゐると云ふのは間違ひで、善も惡も實在であると云ふのである。而して、夫の加藤弘之博士の如きは、善惡共に實在であるから、惡を除くことは出來ないと論斷せられる。けれども天台の方では、いかにも善惡兩方實在すれども、惡を避けて善に向つてゆけばよいと說く、これは加

藤博士の說より倫理道德を立てる上に於て、勝つてゐると思ふ。一例を擧ぐればこゝに一人あつて、人の物を盜んだ、さり乍ら後それを悔い、善に向つて改心し良い人となつたとすれば如何する、又秋夜明月を望むに、その明月を蔽ふ雲が起つて來て、天地を暗くする、その場合その雲も實在するのである、然し又黑雲が離れ去つたならば、再び明月を仰ぎ見るやうに、惡を離れて善に進めばよいと思ふ。又花にみるも、一見美事なれども、仔細に觀察すれば、毒蟲も附着して居れば、恐しき荆を藏して居る。然しそれ等を除いて、花の美を賞美すれば、心目を樂します上に於いて充分である。天台の所說は、科學的實驗說に囚はれて居る加藤博士の所論よりは杳にすぐれてゐるが、更に華嚴に至つては一層秀出して居る、華嚴では惡の實在を見ないで、直に宇宙を一大美妙なものと見て、其の間に於ける差別的惡を見ない、卽ち直覺的に高美なるもの、至善なるものゝみと見て居る。日に於る雲をみないで、月をも雲をも美とする。雲を惡とか醜とか見るのは、差別的小我見であるとする。

陽明學でも斯樣に立論し、所謂倫理上、道德上から、努めて善をなせと强いるのでは無い、善とか美とかゝ根本であるから、その光を出せと說く、君子や善人が、皆美とか善とかを好みてある、惡漢も亦善美を好む素質を含んでゐるに相違ない。宇宙間の物皆それである、乃ち今より幾億萬年の後、地球が破壞し、太陽が滅亡しても、猶變化しない萬古を一貫する道理がある。

であるから人類は、かやうな道理によつて進んでゆくものであれば、例令肉體的の一生涯は、生活上不幸に終つても、その心をば高美に愉快に保つべきである、御互に道に志すものは大抱負がなければならぬ。それは大覺悟の境地に立てば、彼の釋迦の如く、王位を放擲し、肉體上幾多苦痛を嘗めて、猶より以上快樂の爲めに、平然たることも出來れば、又クリストの如く、十字架にあげられて、肉體を刺されても、猶平然たり得るので、ソクラテスが、哲學に一大生面を開拓し、この宇宙をば善美のものと立て、之れに依て人の道德を唱道し、それが法に反するものと認められ、毒藥を飲ましめられるに至り、友人知己がこれが爲めに苦心して、其の信仰を狂ぐるならば、生命を救ひ得るが如何と云ひしに、彼が肉體を捨てゝも眞理を捨てないと叫び、終に毒を飲んだ心境にも達せられるのである。之れに反して今日の學者は、大抱負も大自信力もなく、全く浮萍的で小さき名譽を得んために努力してゐはせない

か頗る疑ひなき能はずであります。

以上述べた所で、私の考へて居る大要は殆んど盡きたが、これから少し「華嚴哲理と中庸」について述べてこの席を降らうと思ふ、それでこの話は少々詳く申上げたいと思ひ、參考書も所持してまゐつたが、時間に制限があること故、極く簡單に申上げる、猶その間に一寸申して置きたいのは、此頃の儒教復活です。此現象は誠に慶ぶべきこと乍ら、儒教は論語一卷にて十分なりとし、孔子の全面は論語だけによりて知らるると斯う考へる人もある、成る程論語はいかにも必要な書には相違ないが、御承知の如く素と論語は、孔夫子が多くの弟子に對し、その性格によつて說かれ、門人が各自これを筆記したものなれば、一つの仁を說くにしても、子路、顏回、子貢、冉求と、皆その人の性行によりて立說してある、かるが故に孔子の道を研究せんとするものは、更に易の繫辭傳とか、中庸とか、家語とか孔叢子とかに付いて研究していたゞきたい、尤も後の二者は後人の作といひ、子思が中庸をば作つたといふけれども、これ等を讀めば孔子の人格なり、理想なりを知ることが出來る。扨て本題の華嚴と中庸につきましては、先づ中庸の中に、何を一番說いてあるかと申しますれば、

天命之謂性。率性之謂道。修道之謂敎。

とあり、これが中庸一篇の大主眼である。天命之れを性といふの性を、朱子は理と解して居る、外に又古人も理は心なりと謂つてゐる、尤も心は理なりといふ事は、陽明先生も然かく謂て居られる。乃ちこの性は心であるのであれば、我々は心のまゝに率つて行けばよい、性に循ふことゝなる、性に率ふこれを道といひ、道を修するこれを敎といふ、乃ち吾々人類に於ける敎育でも何でも、總て其の根本は性の一字に含まれる、性が中庸の主眼である。華嚴哲學の方でも、第一着性を說いてある、舊譯の六十華嚴、新譯の八十華嚴にせよ、いづれも性起品が、根本土臺となつてゐる。毎度申します通り、華嚴の哲學には、法界緣起を立てる、前にも申した通り、西洋の唯心論も、つまる所皆性からである、性の名が變つて心と唱へるのである。中庸の天命これを性といふのも、華嚴の方で渾て性より起るものとする、卽ち性起品と歸着點を一にしてゐる。而して中庸の終りには、如何なる事が說いてあるかと云ふに詩經の語を引いて、

詩云。予懷明德。不大聲以色。子曰。聲色之於以化民。末也。詩曰。德輶如